

はじめに

本報告書は、平成22年度～23年度の2か年にわたり、公益財団法人日本教材文化研究財団の支援を得て研究した成果の一部をまとめて刊行したものである。

1 研究の目的

平成20（2008）年改訂の新学習指導要領において、知識・技能の活用力の育成が重視されたのは周知の通りである。これを受けて、平成20年度から2年間にわたり、当財団の研究支援の下に、小学校社会科における習得・活用・探究型学力の育成と評価に関する研究を行ってきた（日本教材文化研究財団調査研究シリーズ50『児童・生徒の習得・活用型学力を育成する社会科学習指導方法と評価に関する研究』平成22年9月）。そこで明らかになったのは、学力としての「活用する力」の重要性である。つまり、ただ事实的知識や情報処理能力を身に付けるだけでなく、それらを活用して社会的事象の関係や構造を説明したり解釈したりする能力、及びその結果としての説明的知識こそが社会科の学力の中核をなし、人間としての生きる力となるだろうということである。そして、その育成のためには小・中学校で一貫した指導が必要であり、またそれを正当に評価する手法を単元レベルで開発することの意義が指摘された。

そこで、平成22（2010）年から新たに中学校社会科を対象にして、「活用する力」の育成と評価に関する研究に着手することにした。三分野において、例えば地理的な見方や考え方、歴史的な思考・判断、政治・経済の見方考え方をどう育成し、評価するのか。先行授業・評価実践等に学びながら仮説を立て、それに基づく実験授業・評価を通して、現実の授業と評価の改善に資する授業構成・評価モデルを開発することを目的とした。

2 研究の方法

研究員各自が分担した領域毎に研究を進め、2か月に1回の会合において成果や課題を報告する。そして、相互の議論を通して研究の方法や方向性を修正しながら、課題解決に向けて研究を深めるというやり方で研究を遂行した。

- （1）新学習指導要領において、中学校社会科の三分野に期待される活用力とは何かを学習指導要領や先行研究の分析を通して明らかにする。その際、内容知と方法知の両面に着目する。
- （2）中学校社会科三分野の先行授業実践や評価問題から優れた事例を収集し、それぞれにおける活用力の育成と評価の原理を究明する。
- （3）上記（1）（2）を踏まえて、三分野それぞれの活用力を定義し、その育成と評価のための仮説を設定する。
- （4）上記（3）の仮説に基づいて、三分野でそれぞれ適切な単元を設定して授業と評価のプランを開発する。
- （5）上記（4）のプランに基づく実験授業と評価を可能な限り実践し、実践結果の分析・検討を踏まえて、より確かな活用力の育成と評価のモデルを提案する。

3 研究計画

当初に予定した研究計画を示せば、以下のようになる。

- <1年次> ①地理・歴史・公民の各分野の活用力を定義する。
②地理・歴史・公民の各分野の優れた授業・評価実践を収集、分析して、活用力の育成に資する授業構成と評価の原理を究明し、仮説化する。
③上記仮説に基づいて、地理・歴史・公民の各分野の授業・評価プランを一定の単元で開発する。
- <2年次> ④開発した授業・評価プランを実践し、データを記録する。
⑤記録したデータを分析・検討し、仮説の妥当性を検証・評価する。
⑥検証された事実を下に活用力の育成に資する地理・歴史・公民各分野の授業・評価モデルを確立し、他の成果とともに公表する。

4 研究の組織

交通の便を考慮し、大阪府内に勤務ないし居住する社会科教育関係者の中から、研究面でも教育面でも実績を有する人材を選抜し、下記のような分担で研究組織を編成した。

氏名	所属	分担
原田 智仁	兵庫教育大学 教授	活用力の理論と歴史の実践分析 総括（研究会の運営）
峯 明秀	大阪教育大学 准教授	活用力の評価論と公民の実践分析 連絡（研究員間の連絡）
中本 和彦	四天王寺大学教育学部 准教授	活用力の授業構成論と地理の実践分析 書記（研究会の記録）
井寄 芳春	大阪教育大学附属平野中学校 副校長	活用力を育成する地理的分野の授業と 評価の開発・実践
佐古田英樹	堺市立美原中学校 教諭	活用力を育成する歴史的分野の授業と 評価の開発・実践
奥田修一郎	大阪狭山市立南中学校 教諭	活用力を育成する公民的分野の授業と 評価の開発・実践

(平成24年3月現在)

5 研究の成果と課題

予定通り、ほぼ2か月に1度のペースで会合を開催し、持ち寄った研究情報や実践報告について議論することで、課題への認識を深めることができた。そこで、ここに2年間の研究成果をまとめ、公表することにした。

報告書は大きく2部構成になっている。第I部では、社会科の「活用する力」の育成と評価に関する理論を扱っている。大学に勤務する3名が、それぞれ「活用する力」の定義（第1章）、育成の理論（第2章）、評価の理論（第3章）について論じた。続く第II部では、中学校に勤務する3名が「活用する力」の育成と評価に関する実践を、それぞれ得意とする分野を中心にまとめている（1章：地理的分野、2章：歴史的分野、3章：公民的分

野)。大学に勤務する3名は、地理・歴史・公民の諸分野における先行授業実践から、活用力に関わる事例を取り上げ批判的に考察した。それとの対照で、本報告書における理論モデルや実践の意義を浮き彫りにするためである。執筆者の意図したとおりの提案になっているかどうか、大方のご批判・ご叱正をお願いする次第である。

また、研究組織の起ち上げの段階では想定しなかった人事異動もあって、当初意図したような実践に基づく活用力の育成・評価モデルの検証にまでは至らなかった。3名の実践者はいずれも優れた教育研究能力と経験を有するだけに、モデルの妥当性を実験実証的に検証し得たならば、本報告書の理論モデルがさらに重みを増したに違いない。その意味で、きわめて残念と言うしかないが、実践による検証は今後に残された課題としたい。

最後になったが、本研究をご支援いただいた公益財団法人日本教材文化研究財団に対し、心より感謝申し上げたい。特に、財団の専務理事新免利也氏と事務局長の佐藤昇氏には、研究会の運営に関して大変お世話になるとともに、研究面でも貴重なご助言をいただいた。ここに記して、お礼を申し上げたい。

平成24年3月

社会科活用研究会
代表 原田智仁

目 次

はじめに

第 I 部 社会科の「活用する力」の育成と評価に関する理論

第 1 章 社会科における「活用する力」の意味と基本原理

- 1 はじめに—本研究の基本的立場—…………… 8
- 2 活用力の定義と指導要領の学力観との関連…………… 8
- 3 社会科における活用力の育成と学習過程…………… 10

第 2 章 社会科の「活用する力」の育成に関する理論モデル

- 1 社会科における「活用する力」育成の鍵…………… 13
- 2 社会科における「活用する力」を育成する授業構成と単元設計…………… 14
- 3 活用力を育成する社会科授業の実際—地理的分野を事例として—…………… 16

第 3 章 社会科の「活用する力」の評価に関する理論モデル

- 1 社会科の活用力，何を評価すればよいのか…………… 27
- 2 社会科の「活用する力」をどのように評価するのか…………… 27
- 3 社会科における「活用する力」の評価問題をどのように作成するのか…………… 34
- 4 社会科における「活用する力」の評価観点
—問いと求める回答の一致—…………… 37

第 II 部 社会科の「活用する力」の育成と評価に関する実践

第 1 章 地理的分野における「活用する力」の育成と評価

- 1 「活用する力」に関する地理の先行実践分析と課題…………… 40
- 2 地理的分野における「活用する力」を育成する授業提案…………… 52
- 3 地理的分野における「活用する力」の評価計画と実践分析…………… 64

第 2 章 歴史的分野における「活用する力」の育成と評価

- 1 「活用する力」に関する歴史の先行実践分析と課題…………… 73
- 2 歴史的分野における「活用する力」を育成する授業提案…………… 86
- 3 歴史的分野における「活用する力」の評価計画と評価問題案…………… 96

第 3 章 公民的分野における「活用する力」の育成と評価

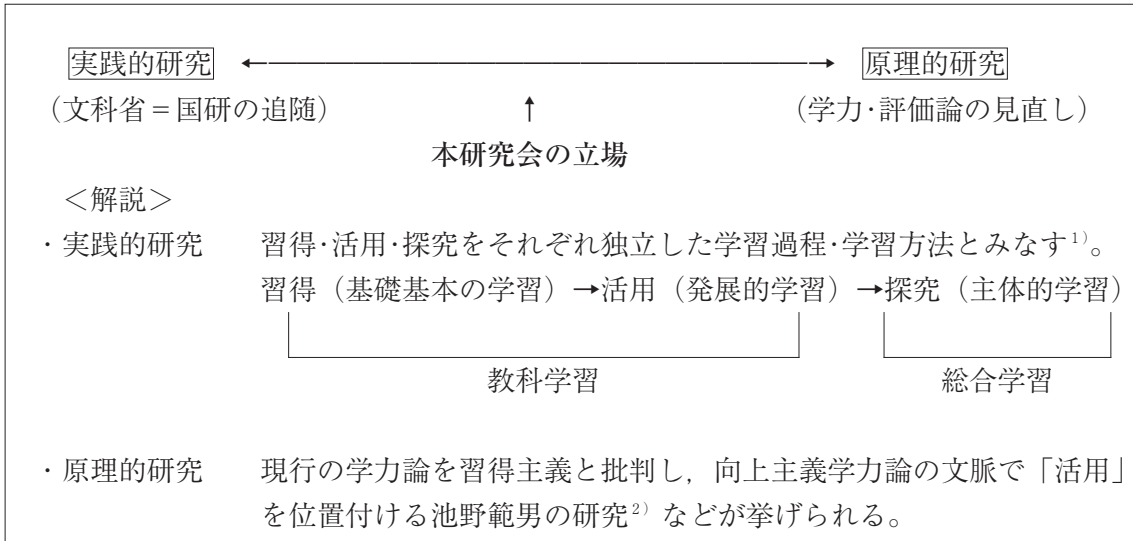
- 1 「活用する力」に関する公民の先行実践分析と課題…………… 104
- 2 公民的分野における「活用する力」を育成する授業提案…………… 115
- 3 公民的分野における「活用する力」の評価計画と実践分析…………… 127

第 I 部 社会科の「活用する力」の育成と評価に関する理論

第1章 社会科における「活用する力」の意味と基本原理

1 はじめに—本研究の基本的立場—

平成20（2008）年改訂の新学習指導要領で注目を集めた「習得・活用・探究」は、論者により多様なとらえ方がなされている。現状を簡潔に図示すると、下記のようになる。この一番の課題は、原理的研究と実践的研究とが大きく乖離することである。

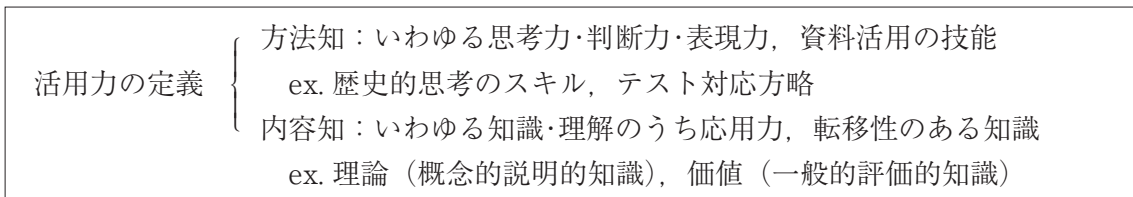


本研究の基本的スタンスは、上図に示したように両者の間に位置する。つまり、①現場の授業改善に資する研究を意図しながらも形式主義・要素主義に流されない、②現場の先生たちの納得の基に実践しやすい論理構成をめざす、この2点を重視するものである。

また、「活用する力」（以下、活用力と略称）の育成と評価に関しては、以下の3点に留意して研究を進める。第一は、指導と評価の一体化である。すなわち、授業（＝指導）を通して活用力を育成し、生徒の活用力の評価を通して授業そのものを評価し改善に生かすという原則である。第二は、前記の留意点と並行して、地理・歴史・公民の各分野で活用力を測るテスト問題の構成原理を明らかにすることである。第三は、多様な評価方法を開発することである。その点で、向上主義学力論のように学力を総合的に捉えて評価する方法は、理論的にはともかく現実的な方法とはいえない。ある程度の要素主義を認めつつ、評価の手段・方法の多元化、多様化をめざす方が現実的で理解されやすいと考える。

2 活用力の定義と指導要録の学力観との関連

本研究では、活用力を次の二つの側面にとらえたい。



まず、活用力は大きく内容知（いわゆる知識）と方法知（いわゆる技能）とからなる。内容知は社会の見方・考え方といってもよいものであり、理論（分析的理論，総合的理論）に関わる概念的説明的知識と、価値（社会の基盤となる価値）に関わる一般的評価的知識に分けられる。従来，社会科の本質を科学的社會認識形成としてとらえる立場から，活用力もまた理論的側面に限定されがちであったが，本研究では社会の基盤となる価値，例えば民主主義，人権，平等，公正といった普遍的価値（高次の価値）についても内容知に含めて考えることにした。

次に，方法知は思考・判断の能力と，思考・判断したことを表現（説明・論述）する能力に分けられる。いずれも内容知と密接に結びついてこそ発揮される能力である。つまり，何らかの内容について考え，決断をするのであり，その意味で思考・判断は社会科固有の活用力ということができる。ただし，表現は実質的に国語（言語）の活用力といえよう。

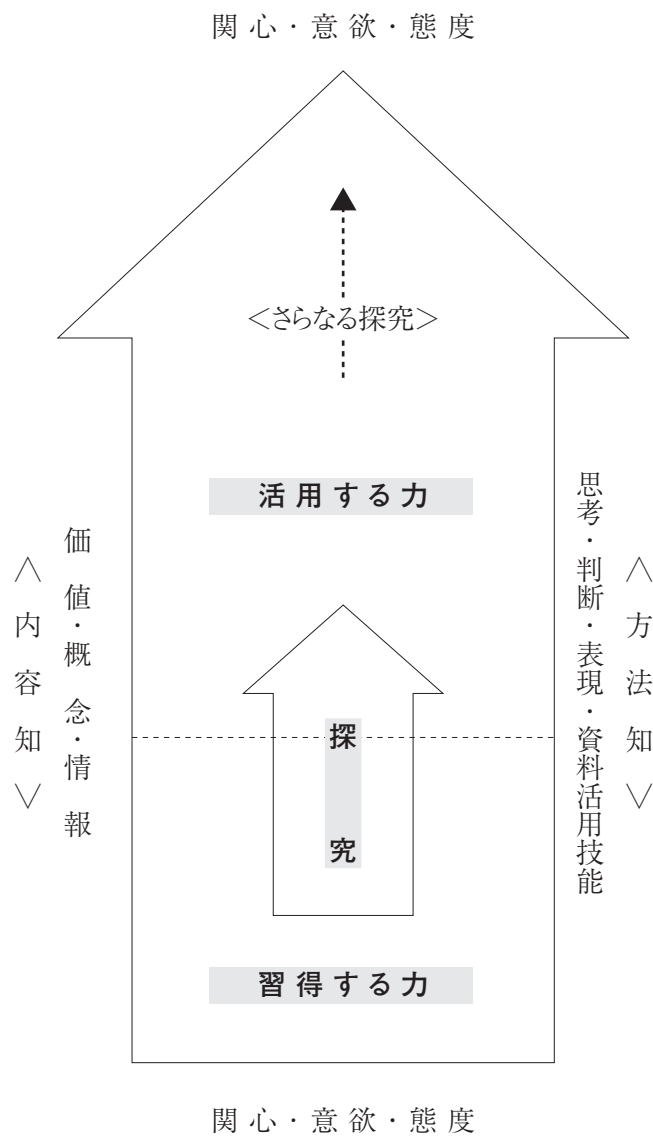


図1 現行指導要録の学力の観点と「習得・活用・探究」の位置付け

また、本研究での「活用力」を習得・活用・探究論との関連、及び現行指導要録における学力の4観点との関連で位置付けると、前頁の図1のようになる。その特色は以下の4点である。

第一に、関心（＝問いの自覚）・意欲（＝学習の見通し）は学習の前提でもあり成果でもある。したがって生徒の関心・意欲を踏まえて学習を組織するとともに、学習を通してさらに関心・意欲を深めていく必要がある。それが恒常化してこそ、一定の学習態度が形成されると考える。

第二に、思考・判断・表現、資料活用技能は「習得」と「活用」の両場面（それぞれの学力形成の過程）で働く。思考・判断を例にすれば、習得のための思考・判断と活用のための思考・判断があることになる。

第三に、習得と活用を区分する鍵は、方法知の側にはなく、内容知にある。情報（事実に記述的知識）に関わるのが習得であり、概念（概念的・説明的知識）や価値（一般的・評価的知識）に関わるのが活用である。

第四に、「習得」と「活用」は学力論として、また「探究」は学習論としてとらえる。習得の蓄積が活用につながるのではなく、探究的学習が習得を活用に高めることになる。このことは文科省・国研の習得・活用・探究論と基本的に異なる点である。

3 社会科における活用力の育成と学習過程

社会科における活用力の育成と評価に関する理論モデルについては、第2章の中本論文、及び第3章の峯論文で詳述するが、ここでは学習過程との関連で基本原理を提示する。

まず、その前に確認しておきたいのが、活用力と深く関わる「思考・判断・表現」の概念である。第一に、思考とは漠然と思うことではなく、問いを立てて探究することを意味する。それは、question（質問）がquest（探究）の派生語であることからしても明らかであろう。第二に、判断とは問いに対して一定の結論・決断を下すこと、つまり意思決定を行うことである。そして第三に、表現とは思考（＝探究）の過程や結果を、口頭や文章で説明することである。前頁の図1にも示したように、活用力を方法面で支えるのが思考・判断・表現の能力であることから、以上の定義を銘記しておきたい。

さて、中等教育段階の社会科授業で一般的な方法は、周知の通り教師の講義による教科書解説型授業であり、生徒の学習を支援するような考え方はほとんど見られない。だが、それでは活用力は育たないといってよい。つまり、指導と評価の一体化が成立してこそ、活用力は育つのである。

ここでは、活用力の二つの内容知のうち、主として理論の育成に関わる学習過程として探究学習を、また価値の育成に関わる学習過程として意思決定学習に注目し、それぞれの学習過程と活用力の関連を考察する。

（1）探究学習における活用力

社会科における探究学習の基本的な学習過程を図示すると、次頁の図2のようになる。活用力はこのプロセスの各場面で発揮され育成されると考えられる。まず、①では入手した情報等から問題を発見する能力、すなわち問題発見のための活用力が育成される。次いで②では、知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力、すなわち仮説設定のた

めの活用力が育成される。そして、③では新たな情報を用いて仮説を検証する能力，すなわち仮説検証のための活用力が，さらに④では複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力，すなわち仮説応用のための活用力がそれぞれ育成されると考えられる。

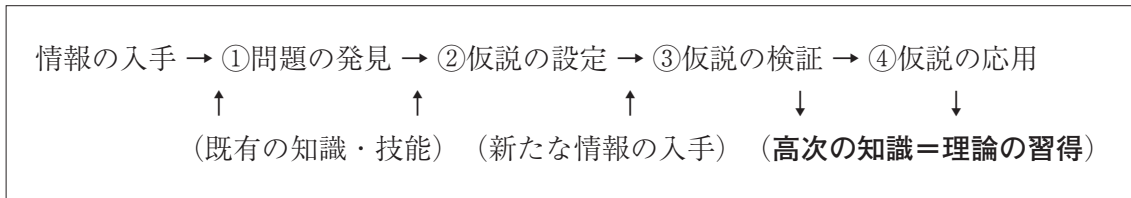


図2 探究学習の過程と活用力

(2) 意思決定学習における活用力

社会科における意思決定学習の基本的な学習過程を図示すると，図3のようになる。

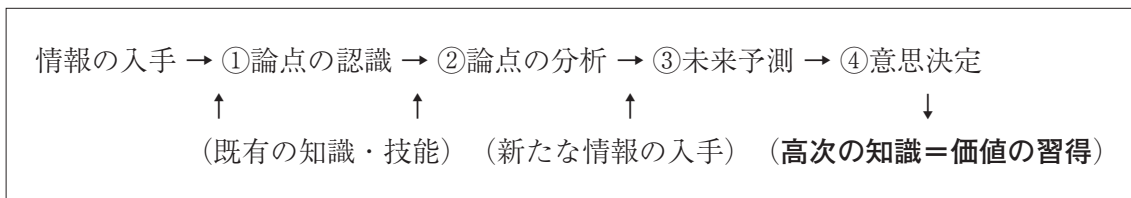


図3 意思決定学習の過程と活用力

まず①では，入手した情報から論点を認識する能力，すなわち論点認識のための活用力が育成される。続いて，②では既存の知識・技能を用いて論点を分析する能力，すなわち論点分析のための活用力が育成可能である。そして，③では新たな情報を用いて未来予測をする能力，すなわち未来予測のための活用力が，また④では未来予測に基づいて主体的に意思決定する能力，すなわち意思決定のための活用力を育成することができると考えられる。

(3) 社会科における活用力の育成と評価の基本原則

以上の活用力の定義を踏まえると，その育成と評価の基本原則は次のようにまとめられよう。具体的な学習・評価モデルについては次章以降で述べられる。

- ①社会科固有の内容知・方法知は，ともに具体的な内容に即して初めて習得され，活用されるものである。つまり内容の伴わない活用力はあり得ない。
- ②社会科における活用とは，端的に言えば単元毎に探究学習ないし意思決定学習を組織し，前述の基本的過程に沿って学習を遂行することである。
- ③それゆえ，社会科の活用力を育てようとするならば，具体的な題材に即して探究学習，ないし意思決定学習を遂行するしかない。
- ④したがって，社会科の活用力を評価しようとするならば，到達目標としての知識・技能を明示した上で，探究ないし意思決定の学習過程を具体的な授業計画書として構成し，そこに評価方法（評価計画）も記載することが望ましい。
- ⑤評価方法としては，授業過程でのワークシートやノート等のポートフォリオ評価の他に，目標とした知識・技能を授業で用いたものとは別の事例の中から発見させたり，習得し

た知識や技能を応用して事象を説明・解釈させたりするテスト問題が考えられる。

<注>

- 1) 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編『習得・活用・探究の授業をつくる：PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント』三省堂，2008年，他
- 2) 池野範男「学力向上に必要なものは？－向上主義学力観とその方策－」『現代教育科学』No.630，明治図書，2009年3月

(原田 智仁)

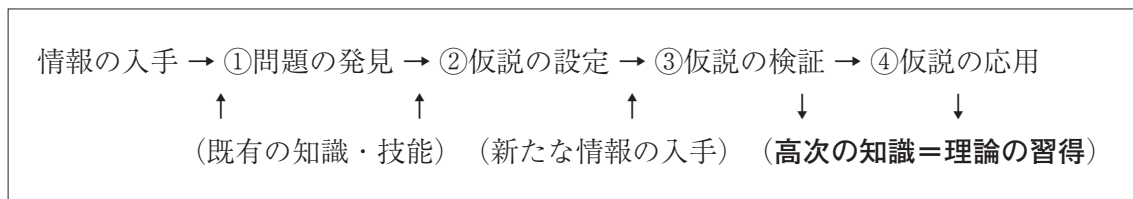
第2章 社会科の「活用する力」の育成に関する理論モデル

1 社会科における「活用する力」育成の鍵

授業者は、社会科において、「活用する力」（以下、活用力とする）を、どのような学習内容で、どのような方法によって育成すればよいのだろうか。また、その育成の鍵は何だろうか。このことについて、原田智仁が第1章において示した、学習過程と活用力との関連をもとに、考えてみよう。

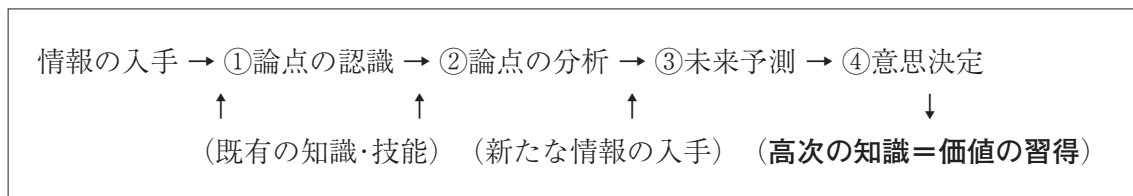
原田は、学習過程と活用力との関連を、次のように示している。

<探究学習の場合の学習過程と活用力>



- ①入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力
- ②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力
- ③新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力
- ④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力

<意思決定学習の場合の学習過程と活用力>



- ①入手した情報から論点を認識する能力＝論点認識のための活用力
- ②既存の知識・技能を用いて論点を分析する能力＝論点分析のための活用力
- ③新たな情報を用いて未来予測する能力＝仮説検証のための活用力
- ④未来予測に基づいて主体的に意思決定する能力＝意思決定のための活用力

ここでは、社会科における活用力の育成を、大きく二つの学習（理論にかかわる探究学習と価値にかかわる意思決定学習）に分けている。そして、それぞれ、活用力育成の基本的な学習過程を段階的に示すとともに、それらの学習過程の各段階で育成される、あるいは期待される活用力も示している。これらは、具体的には次の二つを示唆している。一つは、①～④の育成される、あるいは期待される活用力は、方法知であるということ。もう一つは、それらの方法知はそれぞれ個々に形式的に育成されるものではなく、最終的に内容知である「高次の知識」をめざす学習過程において必要とされる方法知であるということである。すなわち、活用力の育成は、「高次の知識」（理論、価値）の習得、すなわち豊かな内容知の習得がめざされる授業構成において育成される、ということである。

なぜ、そのような授業構成が求められるのか。それは、より体系的で間違いの少ない知識を求めようとすればするほど、より広くて深く正確な思考や判断が求められることになるからである。すなわち、思考や判断は、知識を習得するための手段であり、思考や判断の質は知識の質によって測られるからである¹⁾。

このようにみても、社会科における活用力育成の鍵は、到達目標として設定される内容知、すなわち学習内容にあるといえる。そして、どのような学習内容で、どのような方法によって活用力を育成すればよいのかは、より体系的で、より間違いの少ない科学的な知識(理論)、あるいはより普遍的な価値に関わる知識で、＜探究学習の場合の学習過程と活用力＞に示されたような科学的な探究過程によって、あるいは＜意思決定学習の場合の学習過程と活用力＞に示されたような合理的な意思決定過程によって育成する必要があるといえよう。

2 社会科における「活用する力」を育成する授業構成と単元設計

前節でみてきたように、社会科において活用力をより豊かに育成するためには、学習内容をより質の高い知識とし、学習過程を科学的な探究過程、あるいは合理的な意思決定過程にする必要がある。それでは、どのような内容知、学習内容にすればよいのだろうか。また、それを踏まえると、どのような授業構成・単元設計となるだろうか。もう少し具体的にみてみよう。

社会科の授業は、大きく二つの社会認識を形成する。一つは事実認識であり、もう一つは価値認識である²⁾。先に述べた活用力育成の学習過程を対応させると、事実認識が探究学習の場合に、価値認識が意思決定学習の場合に対応する。これらのうち、活用力育成において特に重要となるのは、事実認識に関わる部分である。なぜなら、探究学習の場合においてより体系的で、より間違いが少ない事実認識が求められるのはもちろんであるが、意思決定においても同様なことが求められるからである。すなわち、意思決定においてより深く、より正確な判断を行うためには、その判断の根拠となる事実認識がより体系的で、より間違いが少ないことが求められるからである³⁾。

事実認識にかかわる知識は、事実に基づく知識と理論的知識に分かれる。社会諸科学の成果としてより体系的で、より間違いが少なく社会事象を説明する知識が理論的知識である。理論は、分析的理論と総合的理論からなる⁴⁾。

分析的理論は、地方中核都市論といった特定の事象を越えて同じ類型の事象にみられる傾向性を説明する理論(類型的理論)や、工業立地論といった類型や地域・時代を越えてより一般的な説明を与える理論(普遍的理論)のことである。

総合的理論は、特定の地域に限定されない世界システム論や工業立地論といった普遍的・類型的な理論のことではない。ある特定の社会(地域、時代)を説明するために構造化された理論のことである。例えば、広島市を例にすると、広島市は都市計画によって復興した都市であり、中四国の中心都市であり、国際平和都市と解釈できる。都市計画論でいえば広島市以外にも名古屋市なども該当するし、地方中核都市論でいえば仙台市や福岡市なども該当する、また国際平和都市論でいえば長崎市などが該当する。しかし、これら三つの理論によって包摂され、解釈される都市は広島市に限定されるだろう。ここに広島市の個性があるといえる⁵⁾。このように、特定の社会(地域、時代)を社会諸科学の成果

に基づいて分析し、構造化したものが総合的理論である。

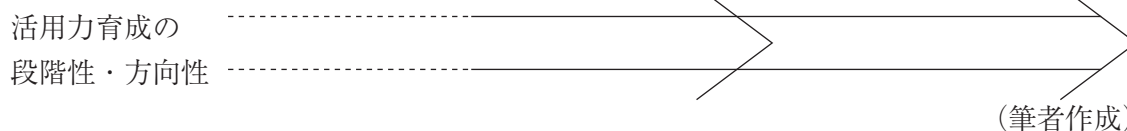
このような理論的知識は科学的な知識であり、その習得は科学的な探究過程によってなされる必要がある。なぜなら、理論はただ与えられただけでは知識として内面化しないからである。理論は具体的な事例の分析を通して習得され、応用されていくとき、学習者の見方考え方として内面化されていく⁶⁾。

これらの知識の習得をどこまで質の高い知識としてめざし、活用力を育成するかは、どのような単元設計を行うかによって異なってくる。地理的分野であれば、工業立地論といった事象を説明する分析的理論の習得をめざして対象地域の事象を分析するところまで行うのか、さらには、その分析的理論を活用して他の地域の事象も分析させ、事象を解釈させるとともに分析的理論の一般化まで行うのか（この二つが分析的理論を習得・活用させる社会科授業）、さらには、地域にみられる複数の事象の分析・解釈を通して総合的理論を習得させ、地域の特色（個性）までも解釈させようというのか、によって異なってくる。

以上のような知識の質を踏まえて授業構成・単元設計を考えてみると、授業構成・単元設計の段階性と方向性は、次のように整理することができる。

表 1 活用力を育成する授業構成・単元設計の段階性と方向性

分野	授業構成・単元設計 (事実的知識を習得させる社会科授業)	理論的知識を習得・活用させる社会科授業	
		分析的理論を習得・活用させる社会科授業	総合的理論を習得・活用させる社会科授業
地理的分野	(地理的事象を記述させる地理授業)	地理的事象を分析・解釈させる地理授業	地域を解釈させる地理授業
歴史的分野	(歴史的事象を記述させる歴史授業)	歴史的事象を分析・解釈させる歴史授業	時代を解釈させる歴史授業
公民的分野	(社会的事象を記述させる公民授業)	社会的事象を分析・解釈させる公民授業	社会を解釈させる公民授業



以上をまとめると、次の3点がいえるだろう。

- ・社会科において活用力を育成するためには、理論的知識を習得・活用させる授業構成・単元設計とする必要があること。
- ・意思決定学習の場合においても、理論的知識の習得・活用を必要とする論題設定とそれを踏まえた未来予測、意思決定をさせる授業構成・単元設計とする必要があること。
- ・「質の高い知識」として習得させる理論的知識を、分析的理論とするか総合的理論とするかによって授業構成・単元設計が決まり、活用力育成の段階制・方向性も決まる。

3 活用力を育成する社会科授業の実際—地理的分野を事例として—

これまで述べてきたことを踏まえて、活用力を育成する「理論的知識を習得・活用させる社会科授業」のうち、地理的分野を事例に「地理的事象を分析・解釈させる地理授業」、 「地域を解釈させる地理授業」の実践例を具体的に提示しよう。意思決定学習の場合については、第Ⅱ部第1章第1節で具体的に示すこととする。

(1) 地理的事象を分析・解釈させる地理授業の実際—迫有香「日本の諸地域—他の地域との結びつきを中核とした考察『中・四国地方』の場合—」⁷⁾—

活用力を育成する「理論的知識を習得・活用させる社会科授業」のうち、「地理的事象を分析・解釈させる地理授業」として、迫有香「日本の諸地域—他の地域との結びつきを中核とした考察『中・四国地方』の場合—」がある。

ア 迫実践の概要

○単元の目標

中国・四国地方の地域的特色を本州四国連絡橋や高速道路等の社会資本整備の影響を通して理解する。

○単元の指導計画（全5時間）

第1時 本州四国連絡橋って何だろう？橋や高速道路開業の効果を予想しよう

第2時 なぜ明石海峡大橋ができて、徳島の人にプラスの効果をもたらしたのだろうか？

第3時 なぜ明石海峡大橋ができて、徳島の人にマイナスの効果をもたらしたのだろうか？

第4時 浜田自動車道は、地域にどのような影響を与えたのだろうか？

第5時 中国・四国地方の諸都市がいかに「ストロー」効果という共通の地域的課題を現実に受け止め、町を活性化しようとしているか調べ、単元を通じ、「中国・四国地方」とはいかなる地方なのかをまとめよう

○学習展開の概要

時	主な問い	主な生徒から引き出したい知識	学習過程
1	◎明石海峡大橋は徳島の人にどのような影響を与えたのだろうか？予想してみよう。		学習課題Ⅰ
2	◎明石海峡大橋は、徳島の人にどのようなプラスの効果を与えたのだろうか？説明してみよう。	◎明石海峡大橋架橋後のメリット ・天候の影響を受けない輸送の実現 ・四国地方の住民の生活向上 ・物流の広域化 ・所要時間の短縮 ・交流人口の増加 ・出荷量を伸ばしている農産物の誕生 ・観光コースとしての魅力 ◎規模の大きな都市と小さな都市を結ぶ交通手段が整備されると、小さな都市の商業は発展する。	問い1 事実1 仮説1
3	○だけど、困ったことも起きました。それはどんなことだと思いますか？	・みんな徳島から出て行った。 ・フェリー会社の人が困った。フェリーに	仮説1の応用・反証事

	<p>◎なぜ、「明石海峡大橋」ができて「困ること」が起きたのだろうか？ 資料を読み解き、説明してみよう。</p>	<p>乗る人が少なくなった。 ・観光客によって治安が悪化した。</p> <p>・阪神方面への購買流出率の増加 ・徳島県から京阪神地方への平均訪問回数と泊数の増加 →徳島県で徳島の人がものを買わなくなって、徳島のものを売る人がもうからなくなった。 →日帰り観光客が増えて、徳島県で買い物をする人が減ってしまった。</p>	<p>例 1 問い 2 事実 2</p>
	<p>◎明石海峡大橋ができて、徳島の人々が、徳島で買うよりも様々な種類から商品を選ぶことができる店舗の多い京阪神地方で買い物をするようになり、徳島県でものを売る人たちにとっては、もうけを大都市である京阪神に吸い取られてしまうという困った現象が起きた。そのことが明石海峡大橋ができる前後の大きな変化である。</p> <p>↓</p> <p>◎橋のような高速交通手段の開業によって、地方都市から大都市への買い物客が増加し、地方都市の販売店の収益が減少する。まるで大都市がストローをくわえた口であれば、ストロー（ここでは高速交通手段）を通して、地方の拠点性が吸われていくような現象をストロー効果という。</p>		<p>仮説 2 直接的ストロー効果</p>
<p>4</p>	<p>◎新聞記事を読み、「なぜアルパークに島根ナンバーの車が急増したのか」予想を立てよう！ ◎浜田自動車道は、地域にどのような影響を与えたのだろうか？説明してみよう。</p>	<p>・広島への買い物客の増加と浜田市での店舗数、売り上げの減少 ・徳島市と同じようなシャッター商店街となっている。 ・従業員数の減少</p>	<p>仮説 2 の応用・予測 学習課題Ⅱ 他の事例 2</p>
	<p>◎なぜ高速道路が開通した後に、郊外型大型小売店が浜田市に出店したのだろうか？</p>	<p>・大型小売店やショップの出店が、地元小売店に打撃を与えている。</p> <p>○山陰には競争店が少なかったから。 ○浜田自動車道ができて広島に近くなり、商品の輸送が簡単になったから。 ◎広島に行かなくても、浜田の人は、広島や全国の商品が郊外型大型小売店で買えるようになったけれど、浜田で商業をしている人は、ますます自分の店で商品が売れなくなってしまった。</p>	<p>反証事例 2 新たな問い 3 事実 3 仮説 3 間接的ストロー効果</p>
	<p>◎直接的ストロー効果 高速交通手段の整備によって、消費者の購買行動が地元から大都市へと大きく変化し、それにともなって地元商業が打撃を受ける。 ◎間接的ストロー効果 高速交通手段の整備によって、物流の時間短縮が図られ、郊外型大型小売店などの出店が増加し、郊外型大型小売店での消費が、地元商業に打撃を与える。</p>		<p>仮説 2 と仮説 3 のまとめ</p>
<p>5</p>	<p>◎なぜストロー効果を心配する地方自治体が、高速道路無料化を歓迎して</p>	<p>・地鶏で勝負しようとしている。 ・日帰り観光客の増加を期待 ・四国地方の知事の発言「ピンチをチャンスに変えることができる。」</p>	<p>仮説 2・3 の反証事例 3 学習課題Ⅲ・問い 4</p>

<p>いるのだろうか？説明してみよう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・観光業の売り上げ増加 ・観光業による活性化期待・高速道路無料化歓迎 <p>◎規模の大きな都市と小さな都市を結ぶ、高速交通手段が整備されると、輸送や物流の利便性が増すと同時に、小さな都市の商業は衰退するが、観光業は発展する可能性がある。</p>	<p>事実 4</p> <p>仮説 4</p>
<p>◎中国・四国地方とはどのような地方なのだろうか？他の地域との結びつきの視点から説明してみよう。</p>	<p>◎中国・四国地方とは、中国地方と四国地方の9県をまとめた呼称である。</p> <p>◎中国・四国地方は、現在、本州四国連絡橋や高速自動車道等の交通体系の整備や瀬戸内海的环境保全など、両地方の共通の課題について協議会が設置されている地域区分である。他地域との結び付きの視点で両地方を見ると、中山間地域の過疎地域を抱え、都市との結び付きを可能にするために高速道路網が整備されている。</p> <p>◎高速交通手段の整備によって他地域との結び付きが深まった反面、その結果もたらされる経済的な地域の変容である「ストロー効果」を生んだ。</p> <p>◎ストロー効果によって収益が大都市へ吸収され、地元商業は打撃を受けたが、観光業を中心にまちの活性化を図ろうとしている。</p> <p>◎観光名所や特産物は、中国・四国地方独自の自然環境や歴史的要因が生み出している。</p>	<p>学習課題Ⅳ</p> <p>まとめ</p>
<p>規模の大きな都市と小さな都市を結ぶ、高速交通手段が整備されると、輸送や物流の利便性が増すと同時に、小さな都市の商業は衰退するが、地域の歴史的要因や自然環境が生み出す観光資源を中心に観光業は発展する可能性がある。</p>		

(迫有香学習指導案 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/kusahara/2008video/akashiohashi.html>, 2012年2月10日閲覧より筆者作成)

イ 迫実践の特質と限界

迫実践の本単元の目標は、学習指導案には中国・四国地方の特色を理解させることとなっているが、実際は地域経済学による空間構造を説明する法則である「ストロー効果」という理論(分析的理論)を習得させることをねらいとしている。学習内容は、「ストロー効果」の下位に位置付く「直接ストロー効果」と「間接ストロー効果」、そしてそれらを具体的に説明する事例としての明石海峡大橋と徳島、浜田自動車道と島根(浜田)にみられる社会的事象である。本単元の主な学習内容を図に示すと、次の図1のようになる。

また、本単元の学習過程は、基本的な学習過程として、事実をもとに「なぜ」と問い、仮説を立てて検証する科学的な探究過程となっている。つまり、本単元は、中国・四国地方の地理的事象を取り上げ、科学的な探究過程によって地域経済学の理論を習得させ、地理的事象を分析、解釈させる授業であるといえる。

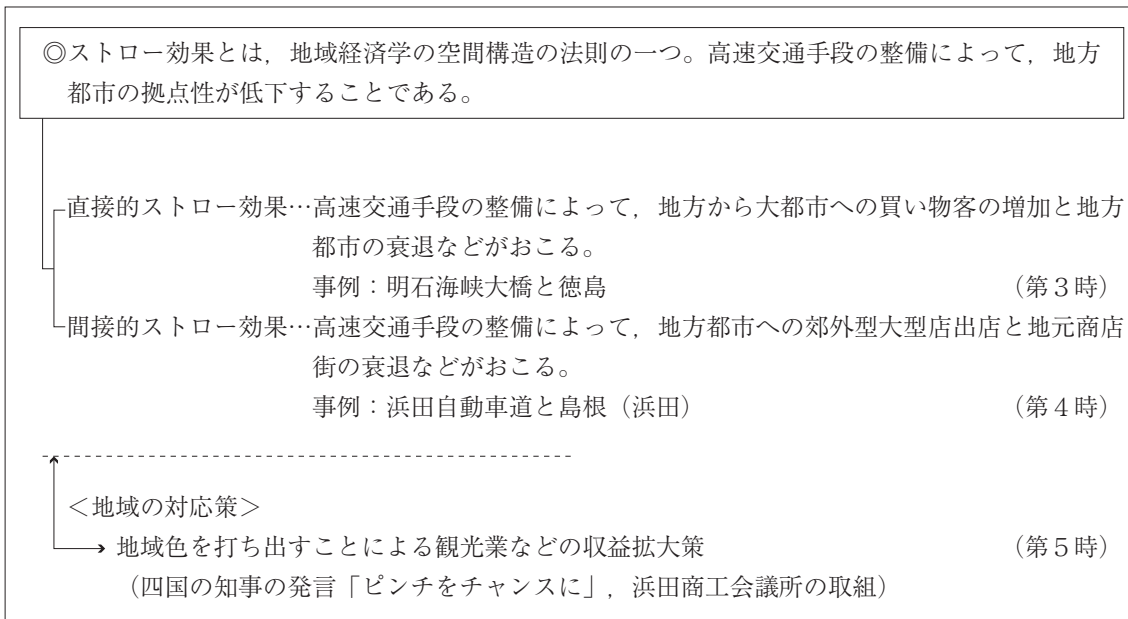


図1 迫有香「日本の諸地域—他の地域との結びつきを中核とした考察『中・四国地方』の場合—」の主な学習内容

(迫有香学習指導案 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/kusahara/2008video/akashiohashi.html>, 2012年2月10日閲覧より筆者作成)

さらに、本単元の特筆すべき点は、生徒の知識の変革的成長を意図した単元設計にある。本単元では、問題を探究することによって理論を仮説として習得した後、その仮説では説明できない事象（反証事例）に出会わせ、新たな「なぜ」の問題を設定、探究させることによって、生徒に習得させる理論（仮説）をさらに深化・拡大させていくように単元設計されている。具体的には、第1・2時で、本単元の導入を図り、生徒が容易に導出できであろう明石海峡大橋ができたことによる徳島の人へのプラスの効果を仮説として設定させる。次に第3時で、明石海峡大橋ができて起きた「困ること」に出会わせ、「なぜ、『明石海峡大橋』ができて『困ること』が起きたのだろうか？」と問い、探究させることによって「直接的ストロー効果」を習得させる。次に、他の事例（浜田自動車道）に応用（活用）させることによって「直接的ストロー効果」は明石海峡大橋にのみに限定される理論ではなく一般的な理論であることを検証させた後、「直接的ストロー効果」では説明できない新たな事象（反証事例：郊外型大規模小売店の出店）に出会わせる。そして、「なぜ」と問い、「間接的ストロー効果」を習得させる。そして、第5時で、中国・四国地方の諸都市がいかに「ストロー」効果という共通の地域的課題を現実に受け止め、町を活性化しようとしているかを調べさせ、単元を通じ、「中国・四国地方」とはいかなる地方なのかをまとめさせている。

以上のように、迫実践による本単元は、中国・四国地方にみられる交通網の整備とそれに伴う諸都市の変化を分析、解釈させることによって、変革的に生徒の知識を成長させ、分析的理論である「ストロー効果」を習得させようとする探究学習の授業であるといえる。

しかし、本単元の限界も単元設計にある。それは、本単元は地域の特色を解釈させることとなっているにもかかわらず、実際は地理的事象の分析、解釈に留まっていることであ

る。そのため、第1時～第5時の前半部分までと第5時の後半部分で、展開に断絶がみられる。具体的には、第5時の後半に「◎中国・四国地方とはどのような地方なのだろう？他の地域との結びつきの視点から説明してみよう。」という地域の特色を問いながらも、最終的なまとめは、「規模の大きな都市と小さな都市を結ぶ、高速交通手段が整備されると、輸送や物流の利便性が増すと同時に、小さな都市の商業は衰退するが、地域の歴史的要因や自然環境が生み出す観光資源を中心に観光業は発展する可能性がある。」という中国・四国地方を越えた一般的な理論的説明になっている。ここに、本単元が「地理的事象を分析・解釈させる地理授業」として優れた実践として成功しているが、「地域を解釈する地理授業」としての単元設計上の限界がみられる。

ウ 迫実践が示唆するもの—活用力を育成する探究学習—

以上のような迫実践を活用力の育成からみると、本単元は、活用力を育成する優れた社会科（地理）授業であるといえる。具体的には、第1節で示した活用力の育成の「探究学習の場合の学習過程と活用力」に対応させると、迫実践では、反証事例との出会いによって「①入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力」を、「なぜ」の問いの探究過程によって「②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力」、「③新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力」を、そして「直接的ストロー効果」と「間接的ストロー効果」をもとに地域の対応策を解釈させることによって「④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力」を育成することができているといえる。

このように、本単元は、地理的事象を分析・解釈させることを通して分析的理論を習得・活用させる、典型的な活用力を育成する探究学習のモデル授業といえる。

(2) 地域的特色を解釈させる地理授業の実例—山本憲令「私たちの県（熊本）を調べよう」⁸⁾—

活用力を育成する「理論的知識を習得・活用させる社会科授業」のうち、「地域を解釈させる地理授業」として、山本憲令「私たちの県（熊本）を調べよう」がある。

ア 山本実践の概要

○単元の目標

＜社会的事象への関心・意欲・態度＞

- ・「なぜ」問題を自ら発見し、その答えを自ら追究する。

＜社会的な思考・判断＞

- ・因果の法則的仮説を設定できる。

＜資料活用の技能・表現＞

- ・工業がさかんである、さかんでないなどの相対的抽象的な変数を観察・測定できる変数に変換し取り出すことができる。
- ・比較をするために、条件を同じにする加工処理ができる。

＜社会的事象についての知識・理解＞

- ・「熊本県の特色」を理解する。

(略…「単元の展開計画」の◎部分に該当)

○単元の指導計画 (4時間計画)

第1小単元 熊本県の人々の所得が少ないのはなぜだろうか。(1時間)

第2小単元 なぜ、熊本県は工業が盛んでないのだろうか。(1時間)

第3小単元 熊本県の農家の人々は、収入を増やすにはどうすればよいだろうか。(2時間)

○単元の展開計画

時	学習課題	主な生徒から引き出したい知識
1	1. 熊本県の人々の所得が少ないのはなぜだろうか。	◎工業でさかんでないならば、所得が少ない。卸売業がさかんでないならば、所得が少ない。日本においては、農業がさかんであるならば、所得が少ない。熊本県は、工業がさかんでなく、卸売業もさかんでない。しかし、農業がさかんである。このため、熊本県の人々の所得が少ない。
	①熊本県の人々は日本の中で所得が多い方だろうか、少ない方だろうか。 ②日本ではどんな産業のさかんな都道府県で、所得が多いのだろうか。 ③日本では、工業がさかんであると所得が多いのに、なぜ農業がさかんであると所得が少ないのか。	○熊本県の一人当たりの県民所得は、日本の中で47都道府県中36位で、日本の中で所得の低い方である。 ○日本では、工業のさかんな都道府県(県民一人当たりの工業生産額)、卸売業(県民一人当たりの卸売り販売額)のさかんな都道府県で県民一人当たりの所得が多い。 ○日本では、工業においては、能率のよい機械の導入により、工業従事者一人当たりの生産額が増加したので、所得が増加した。 しかし、農業においては、機械を導入したが、農業従事者一人当たりの耕地面積は増加しなかったため、労働時間は短縮したが、生産額は増加せず、所得もふえなかった。
2	2. なぜ熊本県は工業がさかんでないのだろうか。	◎日本は、工業原料を海外から輸入している。このため、資源立地型の工業は臨海部でさかんである。そしてできるだけ大消費地に近いところに立地する。熊本県は、大消費地から遠い。このため、熊本県は工業がさかんでない。
	①熊本県は日本の中で、工業がさかんな方なのだろうか。それともさかんな方でないのだろうか。	○熊本県の県民一人当たりの工業生産額は、日本の中では少ない方であり、工業はさかんでない。
	②工業は消費地の近くの方がよいのだろうか、資源の産地に近い方がよいのだろうか。	○水などをのぞいて、工業原料が製品より量が多い工業は、資源の産地に近い方が輸送費が安くなり、資源の産地に近い方がよい。工業原料より製品の方が量が多い工業は、消費地に近い方が輸送費が安くなり、消費地に近い方がよい。
	③なぜ日本では、工業は臨海部で人口密度の高い地域でさかんなのだろうか。	○日本は、鉱産資源の大部分を海外から船で輸入している。このため資源立地型の工業は港に近く、かつ、消費地に近い方が、輸送費が安くなる。このため、日本では、工業は臨海部で人口密度の高い地方の近くでさかんである。
	④なぜ、熊本県は工業がさかんでないのだろうか。	○日本では、大消費地から遠いならば、工業がさかんでない。熊本県は日本の大消費地から遠い。このため、熊本県では工業がさかんでない。
	⑤熊本県では、不利な条件の影響の少ない工業はどんな工業だろうか。	○熊本県では、大消費地以外をおもな出荷先とする工業ならば、不利な条件の影響が少ない。
	⑥熊本県では、日本の中でどんな工業がさかんだらうか。	○熊本県では、日本全体と比較するとICを中心とする電子機器、二輪車や船舶などの輸送機器、食料品工業の生産額の割合が高く、これらの産業がさかんだといえる。
⑦熊本県のどこで、どんな工場があるだろうか。	○熊本市にNEC、大津町に本田技研、長洲町に日立造船、嘉島町にサントリーの工場がある。	
3	3. 熊本県の農家の人々は、収入をふやすためにどうすればよいだろうか。	

<p>①農家の人が所得をふやすにはどんな方法があるだろうか。</p> <p>②農家の人が所得をふやす各方法を実行し、所得をふやすには、どんな条件が必要か。</p> <p>③②で予測したことは本当か。</p>	<p>○農家の人々が収入をふやすには、A収入のよい仕事に転業・転職する。B農業とともに収入のよい農業以外の仕事もする（兼業）。C経営規模を大きくして、収穫量をふやす。D土地生産性の高い作物に転換する。</p> <p>○A転業・転職に必要な条件 （ア）その地方に収入のよい仕事があること。 B兼業に必要な条件 （ア）その地方に収入のよい仕事があること。（イ）農業労働時間を短縮して、農業以外の仕事をするのが可能であること。 C経営規模拡大して収入をふやすための条件 （ウ）地価・地代が安く収入が拡大できること。（エ）資金が準備できること。 D作物転換に必要な条件 （オ）土地生産性の高い作物生産が可能な自然条件であること。（カ）市場に出荷できること。（キ）資金が準備できること。</p> <p>○賃金指数の高い都道府県は兼業農家率が高い。賃金指数の高い都道府県は農家減少率が高い。農地地価の安い都道府県は農家一戸あたりの農地増加率が高い。</p>
<p>4 ④熊本県の農家の人は、所得をふやすにはどの方法をとったらよいらろうか。</p> <p>⑤熊本県のどこで、どんな農産物の生産がさかんだらうか。</p>	<p>○農業以外に収入のよい仕事が少ないならば、転業・転職や兼業をする農家は少ない。熊本県では、全国と比べて、収入のよい仕事は少ない。このため転業・転職や兼業をしている農家の人は少ない方である。農地の地価や地代が、耕地を拡大して収益が得られるほど安くないならば、経営規模を拡大する農家は少ない。熊本県では農地の地価は全国の中では安い方であるが耕地を拡大して収益が得られるほどには安くない。また、地代は安い貸してくれる農地は少ない。このため、経営規模を拡大している農家は少ない。土地生産性の高い作物生産が可。</p> <p>○熊本県の植木町を中心とした鹿本地方ではスイカの促成栽培がさかんである。熊本県の八代地方では、トマトの促成栽培がさかんである。熊本県の横島町を中心とした玉名地方では、イチゴの促成栽培がさかんである。</p>

（山本憲令「わたしたちの県（熊本県）を調べよう」、高山博之・水山光春編著『中学社会 課題解決力を育てる授業の設計 地理』日本文教出版、2004年、pp.85-97より筆者一部抜粋修正。）

イ 山本実践の特質と限界

山本実践の本単元の目標は、「所得と産業」、「工業立地」、「農業条件と所得」のそれぞれ一般的傾向性（分析的理論）の習得とその活用を通して、熊本県の地域的特色を解釈し、説明させることをねらいとしている。学習内容を時間毎に整理すると、次の図2のようになる。

第1時<1>	所得と産業の関係についての分析的理論の習得 (a) とそれを活用した日本の県民所得と産業の関係についての傾向性の習得 (b)
<2>	日本の県民所得と産業の関係についての傾向性を活用した熊本県の所得と産業の関係の一般的共通性 (c) と地方的特殊性の発見・解釈 (d)。
第2時<1>	工業立地についての分析的理論 (= 工業立地論) の習得 (e) とそれを活用した日本の工業立地の傾向性の習得 (f)
<2>	日本の工業立地の傾向性をを用いた熊本県の工業立地の一般的共通性 (g) と地方的特殊性の発見・解釈 (h)
第3・4時	農業収入を増大させるための一般的な条件 (分析的理論) の習得 (i) とそれを活用した日本の農業条件の傾向性の習得 (j) と熊本県の農業条件の一般的共通性 (k) と地方的特殊性の発見・解釈 (l)
※ (a) ~ (l) の記号は、筆者が説明上、便宜的に記したものである。	

図2 山本憲令「私たちの県（熊本）を調べよう」の主な学習内容

(山本憲令「わたしたちの県（熊本県）を調べよう」, 高山博之・水山光春編著『中学社会 課題解決力を育てる授業の設計 地理』日本文教出版, 2004年, pp.85-97より筆者作成。)

そして、図2中で記した学習内容の (a) ~ (l) を地域との関係で整理すると、次の図3のようになる。

地域 時	(一般) 普遍	→	日本	→	熊本県 (個別)
1	産業と所得の関係の分析的理論 (a)	→	日本の産業と所得の関係の傾向性 (b)	→	熊本県の産業と所得の関係の一般的共通性 (c) と地方的特殊性 (d)
2	工業立地の分析的理論 (e)	→	日本の工業立地の傾向性 (f)	→	熊本県の工業立地の一般的共通性 (g) と地方的特殊性 (h)
3・4	農業収入を向上させる一般的条件 (分析的理論) (i)	→	日本の農業条件の傾向性 (j)	→	熊本県の農業条件の一般的共通性 (k) と地方的特殊性 (l)

図3 山本憲令「私たちの県（熊本）を調べよう」の主な学習内容と地域との関係

(山本憲令「わたしたちの県（熊本県）を調べよう」, 高山博之・水山光春編著『中学社会 課題解決力を育てる授業の設計 地理』日本文教出版, 2004年, pp.85-97より筆者作成。)

本単元の学習内容は、図2, 3にみられるように、地域との関係性から大きく三つの学習内容に分けることができる。具体的には、地域を越えた分析的理論、日本の傾向性、熊本県の地域的特色 (一般的共通性と地方的特殊性) となっている。それらは、説明の範囲の

広い、より一般的な知識から、説明の範囲をより限定する個別的な知識に向かうようになっている。そしてそれらに対応するように、第1時では産業と所得の関係について、第2時では工業立地について、第3・4時では農業条件について学習するようになっている。

本単元の学習過程は、基本的には、五つの段階による学習過程が構成されている。それは、「Ⅰ 事実を獲得し、問いを設定する→Ⅱ 分析的理論(仮説)の設定→Ⅲ 分析理論(仮説)を活用した日本の傾向性の検証・習得→Ⅳ 熊本県への日本の傾向性の応用(活用)・検証→Ⅴ 熊本県の地方的特殊性の発見・解釈」となっている。この基本的な学習過程と図2、3で記した学習内容の関係を整理すると、図4のようになる(図4中の①～④は、先に示した山本実践の単元展開の各時間に記してあるものと一致する)。

基本的な学習過程	第1時		第2時		第3・4時	
	過程	内容	過程	内容	過程	内容
Ⅰ 事実を獲得し、問いを設定する	①		①			
Ⅱ 分析的理論(仮説)の設定	②	(a)	②	(e)	①	(i)
Ⅲ 分析理論(仮説)を活用した日本の傾向性の検証・習得	③	(b)	③	(f)	②③	(j)
Ⅳ 熊本県への日本の傾向性の応用(活用)・検証		(c・d) *	④	(g)	④	(k)
Ⅴ 熊本県の地方的特殊性の発見・解釈			⑤⑥⑦	(h)	⑤	(l)

図4 山本憲令「私たちの県(熊本)を調べよう」の基本的な学習過程と各時間の学習過程・学習内容との関係

(※熊本県への日本の所得の傾向性の応用(c・d)は、第1時で熊本県の傾向性は、①の過程、すなわち、熊本県の所得の日本の中での位置を確認して問いを設定する過程と、その後の②、③の過程で日本の傾向性を習得することによって、間接的に検証されることになっている。)

(山本憲令「わたしたちの県(熊本)を調べよう」、高山博之・水山光春編著『中学社会 課題解決力を育てる授業の設計 地理』日本文教出版、2004年、pp.85-97、図2、図3より筆者作成。)

図4に示すように、山本実践は、第1時での熊本県の地域的特色についての学習展開が弱いものの、単元全体を通じて、事実から問いを設定し、一般的な理論的知識を仮説として設定し、その仮説を日本全体を取り上げた検証によって日本の傾向性を習得させ、さらにその日本の傾向性を活用して共通するところから熊本県の一般的共通性を、共通しないところから熊本県の地方的特殊性を発見・解釈させるものとなっている。すなわち、問い、仮説、検証といった科学的な探究過程を踏まえているといえる。

以上のことから、山本実践は、複数の産業に関する理論を包摂させることによって熊本県の地域的特色を発見・解釈させる探究学習の授業であるといえる。

一方、本授業には課題もみられる。本授業での熊本県の地域的特色の解釈は、複数の産

業に関する理論それぞれからみた日本と熊本県の共通点と相違点の解釈に留まっている。すなわち、熊本県とはいったいどういうところか、と地域的特色を産業以外も含めたより総合的な解釈をさせるところまでは至っていない。加えて、なぜ、熊本県の地域的特色を産業に関する理論に限定して解釈していく必要があるのか。この点についても合理的な説明を欠いているといえる。ここに、この授業の限界があるといえよう。

ウ 山本実践が示唆するもの—活用力を育成する探究学習—

以上のような山本実践を活用力の育成からみると、本単元は、活用力を育成する社会科（地理）授業であるといえる。具体的には、第1節で示した活用力の育成の「探究学習の場合の学習過程と活用力」に対応させると、山本実践では、事実の獲得によって「①入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力」を、一般的な分析的理論を仮説として設定させることによって、「②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力」を、そして日本全体を取り上げて分析的理論を仮説として検証させることによって「③新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力」を、そして（総合的に解釈させるところに課題を残すものの、）複数の日本の傾向性をもとに熊本県の共通性や特殊性（地域的特色）を発見・解釈させることによって「④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力」を育成することができているといえる。

このように、本単元は、分析的理論を習得・活用させることによって地域を解釈させる、典型的な活用力を育成する探究学習のモデル授業といえる。

<注>

- 1) 森分孝治「社会科における思考力育成の基本原則—形式主義・活動主義的偏向の克服のために—」『社会科研究』第47号、1997年、pp.1-10参照。
- 2) 森分孝治「市民的資質育成における社会科教育—合理的意思決定—」『社会系教科教育学研究』第13号、2001年、pp.43-50における「図1 社会認識の構造」参照。
- 3) 前掲2), p.45参照。
- 4) 分析的理論と総合的理論については、以下のものを参照。
 - ・森分孝治「連載 社会科授業構成の理論10 開かれた科学的認識形成の授業構成（二）—子どもと社会科学—」『教育科学 社会科教育』Vol.20, No.238, 明治図書, 1983年1月, pp.105-113
 - ・森分孝治・棚橋健治「社会科教授能力の形成—社会科教育学講義と社会科授業観の変革—」, 広島大学教育学部教育方法改善研究委員会編『人間発達の実験的・実証的研究能力形成のための教育方法の改善』, 1984年, pp.164-184
 - ・森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書, 1984年, pp.110-121
- 5) 広島市を例にした授業の詳細については、社会認識教育学会編『中学校社会科教育』学術図書出版社, 2010年, pp.58-62を参照
- 6) 森分孝治『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, 1978年, pp.139-140, pp.164-165参照。
- 7) 迫有香学習指導案

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/kusahara/2008video/akashiohashi.html>) (2012年 2 月 10日 閲覧)

- 8) 山本憲令「わたしたちの県（熊本県）を調べよう」, 高山博之・水山光春編著『中学社会 課題解決力を育てる授業の設計 地理』日本文教出版, 2004年, pp.85-97

(中本 和彦)

第3章 社会科の「活用する力」の評価に関する理論モデル

1 社会科の活用力，何を評価すればよいのか

学習者の何が，どのように変わったのかを明らかにすることが，評価の目的である。それは授業のさまざまな目標に関わらず，学習者に身についた知識・技能・態度の変容によって，学習の事実が明示されることを意味する。本研究における「活用する力」の評価にもあてはまる。以下，社会科における活用力を知識・技能・態度から言及する。

○ 知識

森分孝治氏は，主観的知識の構造を「事実」的知識，概念的知識，価値的知識に分けている。また，客観的知識の構造を，事実的知識（事実），一般的説明的知識（理論），一般的評価的知識・一般的規範的知識（価値）に分類している¹⁾。

岩田一彦氏は，事実関係的知識（記述的知識，分析的知識，説明的知識，概念的知識）と，価値関係的知識－規範的知識に分類する²⁾。両氏をはじめ，多くの研究者が知識の質・構造について若干の修正を加えてきているが，大きな変更はなされていない。本研究においても事実的知識と価値的知識に二分し，原田氏の定義による概念的・説明的知識を理論（分析的理論，総合的理論），一般的・評価的知識を価値（社会の基盤となる価値）とする。

○ 技能

認識の結果としての静態的な知識に対して，「する」「できる」など動詞次元の行為が想起される。例えば，地図を読み取る技能，それを数値としてデータ化し表現する技能，記述的な知識を結びつけ，そこから大胆な仮説を形成する思考技能などがある。あるいは，グループで調査研究を進めたり，話し合いや意見交換したりするコミュニケーション技能など，認知的な側面から行動に及ぶ「技能」の広範さゆえに，社会科で育成を図る評価対象が曖昧なものとなる。本研究では，「社会の見方・考え方」の変容に限定し，思考・判断に関わる技能に焦点化する。

○ 態度

授業への参加姿勢から市民としての社会参加や直接的な行動まで，態度は社会認識を通して，公民的資質育成の目標とされる。本研究が目指す活用力が，学習者の社会的な態度に直接的・間接的にどのようにかかわるかについては扱わない。また，情意的側面としての主観的な価値判断は認知的側面に限定して取り扱う。

2 社会科の「活用する力」をどのように評価するのか

(1) 到達目標と学習過程の可視化

社会科において，内容のともなわない活用力はあり得ない。また，方法は学習過程の違いに反映される。原田氏は，活用力を育成する学習の基本形として，「到達目標としての知識・技能を明示した上で，探究ないし意思決定の学習過程を具体的な授業計画書として構成し，そこに評価方法（評価計画）も記載することが望ましい」としている。そこで，単元における評価規準の基本形として，到達目標となる知識と技能の組み合わせを整理すると次のようになる。

表1 単元の評価規準の基本形

技能 事実に知識	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識（理論）	a 入手した情報をもとに問題を発見できる	b 知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定できる	c 新たな情報を用いて仮説を検証できる	d 複数の仮説を応用して事象を総合的に説明できる

技能 価値的知識	⑤論点認識のための活用力	⑥論点分析のための活用力	⑦未来予測のための活用力	⑧意思決定のための活用力
一般的・評価的知識（価値）	e 入手した情報から論点を認識できる	f 既存の知識・技能を用いて論点を分析できる	g 新たな情報を用いて未来予測できる	h 未来予測に基づいて主体的に意思決定できる

（本書11頁をもとに筆者作成）

これにより、各単元においてどのような知識を、どのように学習過程に組み込むかが明示される。例えば、地理教科書（東京書籍『地理708』平成18年2月発行、pp.34-35）をもとに、単元「日本の広さを調べよう」の学習の流れを想定し、そこでの活用力をどのように評価すればよいかについて考えてみよう。

単元計画として、まず教科書の記述内容に関して、主語と述語を補い一文からなる命題の形に置き換える（資料1）。見開きの本文は、21の命題から構成される。各々の命題に記される内容を右側に示したものが、対応する個別的な事実に知識である。それぞれについて、1～6は日本列島の構成、面積、形状、国境線による日本の領域の画定、7・8は日本の経済水域と各国の経済水域の対応として抽出できる。9・10は1～6の領域に基づいた日本の経済水域の価値を示すものである。次の11～21は領域をめぐる問題として、北方領土が取り上げられる。北方領土の構成、資源、戦前・戦後の歴史、人的交流、日本政府の見解などが示される。

教科書の記述内容は、1～10日本の領域と11～21北方領土を併記し、「主権国家の範囲の画定が、経済権益において重要である」ことを概念的にとらえさせ、説明することができるように構成されている。本文以外に、教科書に記載される資料は、地図【日本の領域と経済水域】、模式図【領土、領海、領空の区分】、写真【北方領土の人々との交流】、年表【日本の領土返還の歴史と北方領土】である。また、その他の読み物資料【地理にアクセス】として、日本の最南端である沖ノ鳥島が取り上げられる。そして、「沖ノ鳥島」の記述内容も命題化し分析すると、資料2のようになる。

ここで、次のような活用する力が想定される。（ゴシック体は表1の記号を用いる。）

沖ノ鳥島の事例をもとに、①aとしては、資料2の8から「なぜ日本政府は300億円をかけて護岸工事を行ったのか」を見出すことが考えられる。結論としては、4が理由となる。このとき「護岸工事はどのようなものか」工事の具体的な事実に知識が集められることも考えられる。しかし、工事の金額や施行の内容・方法からは護岸工事を行った理由を導くことはできない。②bとして、「経済水域を確保するためではないか」という仮説を設定することによって、4の知識を理由とすることができる。そして、この仮説は資料1の知識

内容が理解されていて導き出されるものである。すなわち、④の事實的知識は「経済水域の価値」の理解を前提に問題化される。「なぜ経済水域がなくなると問題なのか」に対する回答としての概念的・説明的知識がなければ、④の重要性を見出すことはできない。つまり、②bと③cは「経済水域の価値」の下位の知識として、日本の面積・形状・位置・国境、経済水域に対する各国の対応という事實的知識の理解が必要になる。④dは、例えば

資料1 地理教科書の内容構造 単元「日本の広さを調べよう」

<p>どこまでが日本？日本の領域</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 日本列島は、北海道、本州、四国、九州の四つの大きな島と周辺の小さな島々から成り立っています。 2 (日本列島は) 国土面積は約38万km² (である。) 3 (日本列島は) 北海道から沖縄までおよそ3000km (である。) 4 (日本列島は) 弓のようにのびています。 5 日本と外国との国境線が海上に引かれています。 6 そこまでが日本の領域となるわけです。 7 近年、多くの国々は経済水域で得られる水資源や鉱山資源を沿岸国のもの(としている。) 8 (多くの国々は、沿岸国のものとするを) たがいに認め合っています。 9 日本には沖ノ島島、南鳥島のような離島がある。 10 経済水域は国土面積の10倍以上にもなります。 <p>領域をめぐる問題</p> <ol style="list-style-type: none"> 11 北海道の東にある北方領土は、歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島から成り立っています。 12 (北方領土には) かつて日本人が暮らし(ていた。) 13 (北方領土の) 周辺の海域は、こんぶやかになどの水産資源が豊富でした。 14 (北方領土は) 日本固有の領土で(ある。) 15 (北方領土には) 現在日本人は住んでいません。 16 (北方領土は) 第二次世界大戦後にソ連に占領され 17 (北方領土は) ソ連が解体された後も、ロシア連邦に引き続き占拠されているからです。 18 (北方領土は) 1992年からはビザなしでの交流がはじまった。 19 (北方領土は) 日本人の元島民とロシア人の現島民との相互訪問が行われています。 20 日本は、北方領土の返還を求めている。 21 (北方領土の返還は) いまだに実現されていません。 	<p>事實的知識 → 概念的知識</p> <table border="1"> <tr> <td>日本列島の構成島の位置</td> <td rowspan="3">日本の領域</td> </tr> <tr> <td>日本列島の面積</td> </tr> <tr> <td>日本列島の長さ</td> </tr> <tr> <td>日本列島の形状</td> <td rowspan="2">日本の国境領域</td> </tr> <tr> <td>日本の国境領域</td> </tr> <tr> <td>日本の経済水域</td> <td rowspan="2">経済水域の価値</td> </tr> <tr> <td>各国の経済水域への対応</td> </tr> <tr> <td>日本の構成</td> <td rowspan="3">北方領土問題の背景と対応</td> </tr> <tr> <td>日本の経済水域の面積</td> </tr> <tr> <td>北方領土の構成</td> </tr> <tr> <td>戦前の北方領土の歴史</td> <td rowspan="2">戦後の北方領土の歴史</td> </tr> <tr> <td>北方領土の資源</td> </tr> <tr> <td>北方領土の日本政府の見解</td> <td rowspan="3">北方領土の人的交流</td> </tr> <tr> <td>戦後の北方領土の歴史</td> </tr> <tr> <td>北方領土の人的交流</td> </tr> <tr> <td>北方領土の外交</td> <td rowspan="2">北方領土の現在</td> </tr> <tr> <td>北方領土の現在</td> </tr> </table> <p>主権国家の範囲の確定は、経済権益において重要である。</p>	日本列島の構成島の位置	日本の領域	日本列島の面積	日本列島の長さ	日本列島の形状	日本の国境領域	日本の国境領域	日本の経済水域	経済水域の価値	各国の経済水域への対応	日本の構成	北方領土問題の背景と対応	日本の経済水域の面積	北方領土の構成	戦前の北方領土の歴史	戦後の北方領土の歴史	北方領土の資源	北方領土の日本政府の見解	北方領土の人的交流	戦後の北方領土の歴史	北方領土の人的交流	北方領土の外交	北方領土の現在	北方領土の現在
日本列島の構成島の位置	日本の領域																								
日本列島の面積																									
日本列島の長さ																									
日本列島の形状	日本の国境領域																								
日本の国境領域																									
日本の経済水域	経済水域の価値																								
各国の経済水域への対応																									
日本の構成	北方領土問題の背景と対応																								
日本の経済水域の面積																									
北方領土の構成																									
戦前の北方領土の歴史	戦後の北方領土の歴史																								
北方領土の資源																									
北方領土の日本政府の見解	北方領土の人的交流																								
戦後の北方領土の歴史																									
北方領土の人的交流																									
北方領土の外交	北方領土の現在																								
北方領土の現在																									

(東京書籍『地理708平成18年2月発行pp.34-35より筆者作成)

資料2 単元「日本の広さを調べよう」読み物資料「沖ノ鳥島の護岸工事」内容構造

<p>地理にアクセス 沖ノ鳥島の護岸工事</p> <p>1 日本の南端は、沖ノ鳥島（東京都）です。</p> <p>2 【（沖ノ鳥島（東京都）は】無人島です。</p> <p>3 【（沖ノ鳥島（東京都）は】満潮時には、写真のように大小二つほどの大きな岩が海上に1mほど顔を出すだけとなっております。</p> <p>4 【（沖ノ鳥島（東京都）】この島がなくなってしまうと、日本は約40万km²もの経済水域を失ってしまいます。</p> <p>5 日本の国土面積が38万km²です。</p> <p>6 【（沖ノ鳥島（東京都）の経済水域は】いかに広大な水域かがわかります。</p> <p>7 日本政府はこの島を波の浸食から守る（ために）</p> <p>8 【日本政府】は約300億円をかけて護岸工事を行いました。</p>	<p>事实的知識 → 概念的知識</p> <p>沖ノ鳥島の位置</p> <p>沖ノ鳥島の現状1</p> <p>沖ノ鳥島の現状2</p> <p>沖ノ鳥島による経済水域の面積</p> <p>日本の面積</p> <p>水域との比較</p> <p>日本政府の対応</p> <p>工事費用</p> <p>沖ノ鳥島によって、日本の主権の及ぶ領域が拡大する。</p> <p>沿岸国は経済水域における経済権益を得る。</p>
--	--

北方領土と沖ノ鳥島を事例として、「なぜ北方領土『問題』なのか」を問うことで評価できよう。さらに主権国家とは何か、国境線と経済水域との関係について、総合的にその理由が書けるかどうか、また最近の竹島や尖閣諸島を巡る国際関係などの例を利用してそれらを説明することができるかどうかなどを見ることが考えられる。

(2) 知識と問いの一致

資料3は、資料1の事实的知識・概念的知識に対応した問いである。事实的知識を導く問いは、「いつ、どのくらい、どのようか、何か」になる。概念を導く問いは、「日本の領域はどのように画定されるか」、「各国は経済水域にどのように対応しているか」であり、経済水域の価値についての影響・結果・理由・類似性・傾向性などの知識が導かれる。これが「なぜ主権国家が持つ領域の画定が外交問題になるのか」の説明に使用される。すなわち、経済水域の確保が沿岸国に水資源や鉱山資源などの経済的な恩恵をもたらすことが説明される。以上、問いと導く事实的知識を一致させることにより、知識間をつなぐ知的技能を見る作問が可能となることが示される。そこで、表1の①a～④dの活用力を評価する具体的な問題例を前述の教科書の内容にあ

資料3 事实的知識・概念的知識を導く問い

事实的知識を導く問い ←→ 概念的知識を導く問い		
<p>日本列島はどのような島から構成されるか</p> <p>日本列島の面積はどれくらいか</p> <p>日本列島はどのような形状か</p> <p>日本の国境はどのようなか</p> <p>日本の経済水域はどのようなか</p> <p>各国は、経済水域にどのように対応しているか</p> <p>どのような離島があるか</p> <p>日本の国土面積と経済水域の面積の比はいくらか。</p>	<p>日本の領域はどのように確定されるか</p> <p>各国は経済水域にどのように対応しているか。</p>	<p>なぜ領域の確定が外交問題になるのか</p>

わせて示したい。

a 問題発見のための活用力＝入手した情報をもとに問題を発見できる

資料Ⅰ 日本の南端、沖ノ鳥島（東京都）は無人島です。満潮時には、大小二つほどの大きな岩が海上に1 mほど顔を出すだけとなってしまいます。しかし、この島がなくなってしまうと、日本は約40万km²もの経済水域を失ってしまいます。日本の国土面積が38万km²ですから、いかに広大な水域かがわかります。日本政府はこの島を波の浸食から守るために、約300億円をかけて護岸工事を行いました。

問1 資料Ⅰから、一般常識では考えられないことを見つけて、簡単に書け。
(予想される回答) 日本政府が約300億円もかけて島の護岸工事をしていること。

b 仮説設定のための活用力＝知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定できる

問2 問1の理由として考えられることを、資料1から見つけて簡単に書け。
(予想される回答) 島が無くなると、日本は約40万km²もの経済水域を失うから。

c 仮説検証のための活用力＝新たな情報を用いて仮説を検証できる

資料Ⅱ 日本列島は、北海道、本州、四国、九州の四つの大きな島と周辺の小さな島々から成り立っています。国土面積は約38万km²、北海道から沖縄までおよそ3000km、弓のようにのびています。地図帳で日本の周辺を見ると、日本と外国との国境線が海上に引かれています。つまり、そこまでが日本の領域となるわけです。また、近年、多くの国々は経済水域で得られる水資源や鉱山資源を沿岸国のものとするをたがいに認め合っています。日本には沖ノ鳥島、南鳥島のような離島があるので、経済水域は国土面積の10倍以上にもなります。

問3 問2の理由としてもっとも重要な情報は何か、資料Ⅱから見つけて書け。
(予想される回答) 経済水域で得られる水資源や鉱山資源を沿岸国のものとするをたがいに認め合っている。

問4 問2の理由を説明するために資料Ⅱでは足りない情報は何か、書け。
(予想される回答) 日本の領域（領海）と経済水域の範囲を示すもの（地図）
国境と経済水域の違い

d 仮説応用のための活用力＝複数の仮説を応用して事象を総合的に説明できる

問5 沖ノ鳥島の護岸工事の理由と、北方領土がロシアから返還されない理由との共通点を考えて書け。

(予想される回答) 経済水域における水資源や鉱山資源を確保のため

問6 沖ノ鳥島の護岸工事や北方領土問題と関連の深い、最近の時事的なトピックを見つけて、なぜ関係するのかを説明せよ。

(予想される回答) 竹島や尖閣諸島の問題を示し、主権国家がもつ領域および経済水域から利害の対立が起きていることを説明する。

事実認識の活用について、具体的な題材に即して、学習の流れと評価方法を示した。次に、一般的・評価的知識（価値）とその活用について検討してみよう。

（3）推論過程・論証の構造の吟味

価値認識に関わる活用力は、表1の⑤～⑧が到達目標として示される。前項に引き続き、沖ノ鳥島をもとにした学習を想定する。例えば、次のような主張である。

日本の沖ノ鳥島による経済水域は認められない。経済水域を縮小すべきである。

この場合、経済水域が認められない根拠は何か問われる。経済水域は、沿岸からの200海里（1852m）をさす。前提には領土の確定がある。すなわち、沖ノ鳥島は領土か否かが争点になる。海洋法に関する国際連合条約を見てみよう。

資料4 海洋法に関する国際連合条約

第121条 第1項	島とは、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものをいう。
第3項	人間の居住又は独自の経済的生活を維持することのできない岩は、排他的経済水域又は大陸棚を有しない。
第60条 第8項	人工島、施設及び構築物は、島の地位を有しない。これらのものは、それ自体の領海を有せず、また、その存在は、領海、排他的経済水域又は大陸棚の境界画定に影響を及ぼすものではない。

資料4から表1⑤「論点認識のための活用力=e入手した情報から論点を認識できる」かは、沖ノ鳥島が人工島（構築物）であり、島ではないという主張を見出すことができるかどうか、になる。⑥「論点分析のための活用力=f既存の知識・技能を用いて論点を分析できる」は、沖ノ鳥島の護岸工事がなされたことを既存知識として、その根拠とすることである。⑦「未来予測のための活用力=g新たな情報を用いて未来予測できる」は、沖の鳥島により経済水域が拡大することをもとに、現在、生起している竹島や尖閣諸島における領土問題と結びつけるなど、他の社会事象に同様の問題を見出すことができることである。そして、⑧「意思決定のための活用力=h未来予測に基づいて主体的に意思決定できる」は、その問題に対して判断し意思決定できることである。

次のような作問例が考えられる。

e 論点認識のための活用力=入手した情報から論点を認識できる

問1 「日本の沖ノ鳥島による経済水域は認められない」という主張がある。それはなぜか。海洋法に関する国際連合条約の第121条及び第60条をもとに説明しなさい。

(予想される回答) 海洋法第121条によれば、「島とは、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものをいう」また、第60条によれば、「人工島、施設及び構築物は、島の地位を有しない」とある沖ノ鳥島は護岸工事によって人工的に保たれている島であり、また第60条3項の人が住んでいないという事実により島とはいえず、よって領土沿岸からの200海里経済水域は認められない。

f 論点分析のための活用力=既存の知識・技能を用いて論点を分析できる

問2 次の資料を見て、何が争点になっているかを見つけて書け。

韓国の主張・日本の主張 新聞記事 (略)

(予想される回答) 韓国、日本のそれぞれの主張は何か。いずれかの立場に立って、自らの主張点をいくつか見つけて箇条書きで書けている。

g 未来予測のための活用力=新たな情報を用いて未来予測できる

問3 今後、両国においてどのような主張がなされるか、論を補強する資料をできるだけ、多く見つけて書け。

(予想される回答)

韓国 独島として歴史的にも韓国の領土である。

日本 島根県に属している。

h 意思決定のための活用力=未来予測に基づいて主体的に意思決定できる

問4 どのような解決策が考えられるだろうか、自分の考えを書け。

(予想される回答)

さまざまな視点から検討し、合意形成に向けての調整案が出せる。

いくつかの根拠をあげ、自らの考えを論理的に展開できている。領土問題解決の難しさが書けている。

上記の間2～4については、トゥールミン図式を利用することも考えられる。

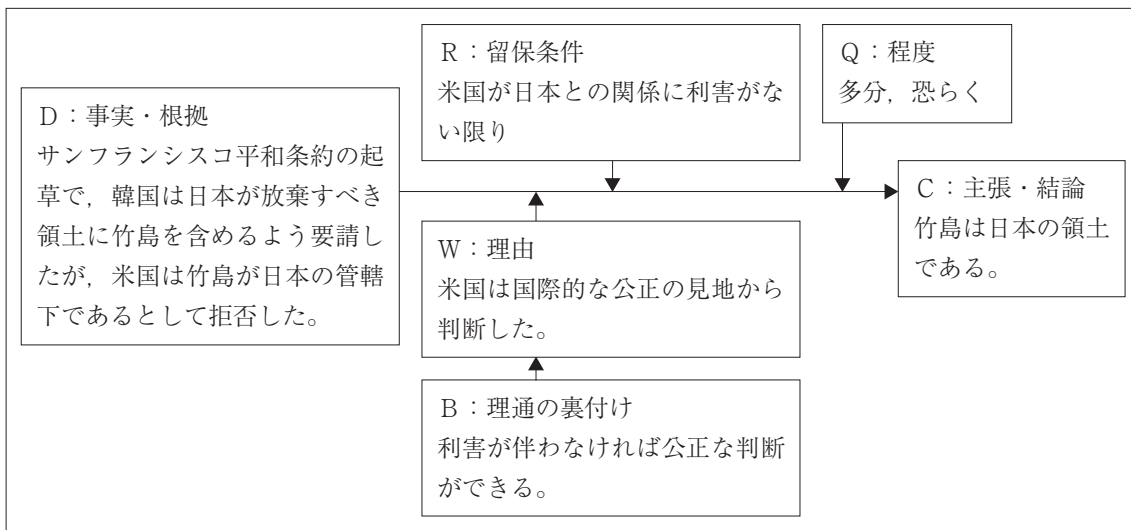


図1 トゥールミン図式

D：根拠や事実をもとに、それをどのようにW：理由づけてC：主張を導き出し、さらに理由を何によってB：裏付けるのか、R：例外となる反証や留保条件Q：限定などを示し、主張・結論がどのように導かれたのか、その構造を整理できる³⁾。

例えば、図1は「竹島は日本の領土である」とする日本の主張である。これに対し、反論を問うことも可能である。また、D・W・B・R・Q・Cのいくつかを示しておき、いずれかを書かせることもできよう。また、Bに対し「利害が伴う」ならばどうかという疑問も提出できる。前提となるBの裏付けをさらにどのように証明するのかを問題にすることもできよう。このように、一般的・評価的知識（価値）の活用力について、正当化過程を吟味することで評価することができよう。以上、表1の単元の評価規準の基本形に沿う地理の具体の作問例を示してきた。次節では、例を歴史に変えて、さらに評価問題作成の具体を示し、授業場面において一般化される評価モデルを提案する⁴⁾。

3 社会科における「活用する力」の評価問題をどのように作成するか

(1) 探究に関わる評価問題

探究に関わる評価問題は、社会のしくみ・社会構造を説明する仮説の形成と、それらの分析過程を見とるものとしてつくられる。例えば、歴史の問題を作成する。



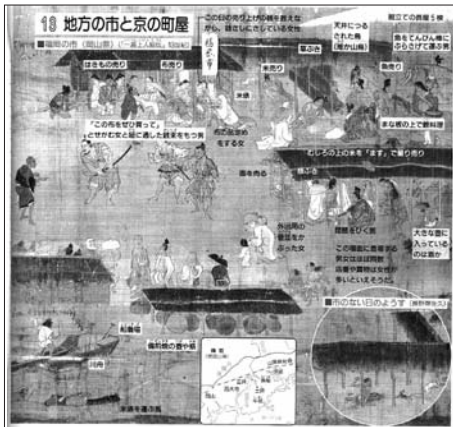
(『新しい歴史』東京書籍, P.64より)

- 問1 資料を見て、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。
- (1) 資料を見て、気づいたこと、思ったこと、考えたことを書け。
 - (2) 絵の中の人物はどのような仕事をしているか、推測して書け。
 - (3) このような屋敷は、山の頂上や山間部につくられず、交通や水利の便の

良い場所に作られたのはなぜか、その理由をXの資料と関連させて説明せよ。

X…武士(荘官も含め)らが役目として、税の取り立てや定期市の開催など経済活動に携わったことが理由として述べられるような資料を用意する。

問1の構成は、絵画資料から〔情報の取り出し〕を行い、次に〔分析の視点を与える〕さらに〔情報の整理〕をさせることが必要である。そして、〔仮説の設定〕により、理由を説明させるものとなっている。その際、Xの資料を学習者が使用することにより推論可能な工夫が必要となる。次の問2は、問1で習得された学力による応用問題になる。



(『歴史資料集』新学社, P.47より)

- 問2 次の資料を見て、あとの(1)～(3)の問いに答えなさい。
- (1) 資料から追究したい問いを書け。
 - (2) ○日市, ○日町がつく地名をインターネットで調べなさい。どのような場所にあるか、その傾向性を書け。
 - (3) 宿場町, 城下町, 門前町の中から絵画資料の一つを選び、読み取れることを書け。
注…町を形成する要素は何か、一般性・共通性についての解釈を書かせる問いを工夫する。

問2(1)は、追究したい問いを出させることで、情報をどのように取り出すかを見る。(2)は歴史研究の方法としてインターネットを利用し必要な情報を取り出し整理して、定期市が開催された場所を特定し、その傾向性を考え合わせる。これは問1(3)の理由付けの検証を意図している。そして、(3)は発展問題として、ある概念(町の形成)を象徴する絵画資料との比較から、一般性や共通性を見出すものとして構成する。このように歴史における評価問題の作成では、社会事象・概念の識別・確認を行い、獲得している知識や概念を適用させることが考えられる。小問では、なぜそのように考えたのか、その理由を、資料を用いて説明させる工夫をすることである。その際、個々の資料に対する解釈を段階的に示させることが必要になる。

(2) 意思決定に関わる評価問題

次に、意思決定に関わる評価問題の例を示す。例えば、歴史上の人物や政策に対する評価問題を作成することができる。その際、事実と価値を区別させる、自らが判断した内容とその結論を導いた手続きを示させるなどの工夫ができる。

ア 人物評価の例

- (1) 次の資料をもとに、田沼意次に対する評価をなさい。
A「幕府と商人中心の賄賂政治」、B「貿易奨励による経済政策」の見解
- (2) 田沼政治の評価が分かれるのはなぜか、資料Cをもとに事実と価値を区別して執筆者の判断に下線を引け。
C「賄賂政治批判をした辻善之助『田沼時代』岩波文庫などからの一部引用」
- (3) 当時の人々は、田沼政治をどのように見ているのか、Dから読み取れることを書け。
D落書「白河の清きに魚も住みかねて…」

イ 政策評価の例

次の資料をもとに、老中阿部正広の政策に対する評価をなさい。

嘉永7(1854)年2月10日、再度訪れたペーリー艦隊が横浜に上陸した。老中阿部正弘は、一方では朝廷に報告し、他方では諸大名や儒者、浪人、町人にいたるまで意見を徴した。彼は御三家の一つ水戸藩主徳川斉昭を海防参与とし、越前藩主松平慶永や薩摩藩主島津斉彬に接近した。
注…水戸藩は攘夷派

- (1) 幕府の勢力が衰えていたことを、幕藩体制のしくみから説明せよ。
(2) 島津斉彬に接近する必要があったのはなぜか、阿部のねらいを推測して書け。
(3) 右の表をみて、a・bの問いに答えよ。

- a 1858年に老中井伊直弼は、日米修好通商条約を締結した。その理由を表から推測して書け。
b 1857-58年の「意見なし」について、現在の日本の政治に通じるところがある。それはどのようなことか、簡単に書け。

	1853年	1857-58年
54藩, 34藩		
積極的取引論	3.7%	11.7%
許容論	25.9%	47.0%
拒絶論	48.1%	11.7%
開戦論・攘夷論	14.8%	8.8%
意見なし	7.4%	20.8%

朝日百科『日本の歴史』93, p.140より作成

- (4) 1854年日米和親条約を結んだ阿部正弘の決断について、資料を収集し、評価をなさい。(レポート 字数指定)

ア、イは歴史上の人物や政策に関わる意思決定に対する評価を行い、その判断過程をみる。そこでは利用される資料の選択、妥当性や適切性が問われる。また、資料を根拠にして、どのように自らの評価が正当化されているのか、その過程を見る。前述のトゥールミン・モデルの利用による主張や根拠、理由付け、情報・証拠の利用が適用できよう。

評価手段については、論述式やレポートなどの記述が要求される。

4 社会科における「活用する力」の評価観点—問いと求める回答の一致—

事実に知識・価値的知識のそれぞれにおいて、活用の段階、問いと導かれる回答が想定される。回答は知識の質と構造によって区別される。事実に知識における活用は知識の積み上げの論理性であり、価値的知識における活用は知識の利用の妥当性である。換言すれば、事実に知識の活用では探究における論理性のプロセス、価値的知識の利用では意思決定における正当化のプロセスの違いを見出すことができる。次のような表に整理できよう。

	技能	評価観点	問い	導かれる回答
事実に知識の活用	①問題発見のための活用力	a 入手した情報をもとに問題を発見できる	・情報・データ、資料の読み取り、比較 ・問題の特定（問題は何か）	数字、人名、位置・地名、年号、用語、語句、固有名詞など
	②仮説設定のための活用力	b 知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定できる	・予想、理由付け（なぜそのようになっているか） ・仮説、論理的推論（多分～だろう～である）	個別的・説明的知識 既有知識との結合資料
	③仮説検証のための活用力	c 新たな情報を用いて仮説を検証できる	・検証、解釈、理由の裏付け （～から、～によると、～である）	一般的・説明的知識 仮説の検証
	④仮説応用のための活用力	d 複数の仮説を応用して事象を総合的に説明できる	・複雑な推論、解釈、応用、総合（他にはないか、一般的に～である、と同じである）	理論・法則 概括的・説明的知識
価値的知識の活用	⑤論点認識のための活用力	e 入手した情報から論点を認識できる	・論点・争点は何か	評価的・規範的知識
	⑥論点分析のための活用力	f 既有的知識・技能を用いて論点を分析できる	・理由は何か、 （どのように正当化されるか）	評価的・規範的知識を導く論理構造
	⑦未来予測のための活用力	g 新たな情報を用いて未来予測できる	・価値判断、理由付け （～はよい、悪い、すべき、すべきでない）	評価的・規範的知識の正当化過程の吟味
	⑧意思決定のための活用力	h 未来予測に基づいて主体的に意思決定できる	・意思決定、選択（どちらがよい）	理論・法則 概括的・説明的知識

評価手段としては、授業過程でのワークシートやノートのポートフォリオ評価の他に、授業で用いたものとは別の事例の中から目標とした知識・技能を発見させたり、習得した知識や技能を応用して事象を説明・解釈させたりするテストが考えられる。

<注>

- 1) 森分孝治『現代社会科授業理論』明治図書, 1984年pp.59-80
- 2) 岩田一彦『社会科の授業設計』明治図書, 1991年, p.105
- 3) スティーヴン・トゥールミン著, 戸田山和久, 福澤一吉訳『議論の技法』東京図書, 2011年
- 4) 評価問題の開発の論理について, 日本教材文化研究財団『思考力・判断力を問う中学校社会科テスト問題の開発研究』2008年を参考にされたい。

(峯 明秀)

第Ⅱ部 社会科の「活用する力」の育成と評価に関する実践

第1章 地理的分野における「活用する力」の育成と評価

1 「活用する力」に関する地理の先行実践分析と課題

活用力を育成する地理的分野の授業については、第I部第2章において探究学習の場合を例示した。ここでは、まず活用力を育成する意思決定学習の先行実践を取り上げてその特質と限界を述べる。次に「活用する力」に関する評価問題について、第I部第2章において取り上げたものとは別の探究学習の先行実践を取り上げ、その実践例の特質と限界、活用力評価への示唆について述べていく。

(1) 意思決定型地理授業分析—裕茂樹「東北地方の人口を増やすためには、どうすればよいだろう。—人口減少は、地域社会にどのような影響があるのか—」¹⁾—

意思決定学習の地理授業として、裕茂樹「東北地方の人口を増やすためには、どうすればよいだろう。—人口減少は、地域社会にどのような影響があるのか—」がある。

ア 裕実践の概要

○小単元の構成（4単位時間）

- I 東北地方の概観（自然環境、東北各県の位置と歴史、人々の暮らし、土地利用と産業、交通網など）
- II 仙台とその都市圏の拡大（拡大する仙台市とその周辺地域の変貌、人口の過密・過疎化にかかわる課題）
- III 人々の暮らしと産業（米作りと果樹栽培、伝統工業と新しい工業）
- IV 交通の発達と地域の変貌（交通網の整備と暮らしの変化）

○ファックス教材による展開

上記の小単元の学習展開に対応して、以下のようなファックス教材が活用される。

ファックス教材①…「I 東北地方の概観」で使用。人口分布の様子を交通網の整備と関連させて考えさせる。

②…「II 仙台市とその周辺地域」で使用。過疎地域と過密地域における生活面で困っていると思われることを、写真をみて自由に書き出させる。

③…「IV 交通の発達と地域の変貌」で使用。

①鉄道と道路網、伝統的な産業と新しい産業（IT関係中心）の分布を地図に書き入れさせる。

②東北地方への新しい工業の進出は地域にどのような変化をもたらすかを予測させる。

③人口を増加させるためのアイデアを書かせる。その際、理由と実現のために必要となる条件、その後の影響などを書かせ、アイデアの有効性を検証させる。

○裕実践のファックス教材にみる「問い」と「答え」

ファックス教材①

問い：岩手県の主要都市の人口はどのように分布しているか考えてみよう。また、なぜそのように分布しているのかまとめよう。

(人口分布にどのような特色があるか。)

答え：人口分布は交通の発達している平地に見られる。

→人口分布と交通，地形との関係の考察 (a)

ファックス教材②

問い：教科書や地図帳などから過密地域と過疎地域の写真を探し、それぞれについて生活面で困ると思われることを書き出してみよう。

答え：人口過密地域では、交通渋滞や住宅問題、開発の問題など。

過疎化の地域では、交通の不便さや商店の減少、自治の維持の困難など。

→過疎・過密地域でみられる問題の発見 (b)

ファックス教材③

①問い：地図に鉄道網と道路網，伝統的な産業と新しい産業の分布（IT関係中心）を書き入れよう。

答え：交通網と新旧産業の分布

→新しい産業の立地についての考察 (c)

(交通網の整備や広い工業用地の確保と新しい産業の立地との関係)

②問い：この新しい産業が進出してきたことは、その地域にどのような変化をもたらすか。

答え：(人口の増加，商店街の活性化や新しい店舗の建設などサービス業の拡大，地方自治体の税収の増加と道路の整備，など)

→工業進出による地域への影響についての考察 (d)

③問い：東北地方の人口を増加させるためのアイデアを考えてみよう。

sq：私のアイデア

その理由

実現のためには、どのような条件を整える必要があるか。

周囲への影響はどうか。

考えたアイデアは有効であるか。

答え：(「もっと高速道路を整備する」)

(条件…工事費や環境問題，土地収用など様々な課題)

→人口増加のための提案 (e) とその検証 (f)

※ (a) ~ (f) の記号は、筆者が説明上便宜的に記したものである。

(裕茂樹「東北地方の人口を増やすためには、どうすればよいただろう。—人口減少は、地域社会にどのような影響があるのか—」，大杉昭英編『中学校社会科活用学習のファックス教材集—地理編—』明治図書，2010年，pp.74-77より筆者作成。)

③東北地方の人口を増加させるためのアイデアを考えてみよう。

私のアイデア（「どこで〈地図を活用〉」）「どのようなこと」等を踏まえて考える）

↑その理由

↓実現のためには、どのような条件を整える必要があるか。

↓周囲への影響はどうか ⇨ 考えたアイデアは有効であるか。

よい影響	結論（根拠をあげて提案しよう）
悪い影響	

図1 ファックス教材の実際（③③部分）

（裕茂樹「東北地方の人口を増やすためには、どうすればよいだろう。—人口減少は、地域社会にどのような影響があるのか—」，大杉昭英編『中学校社会科活用学習のファックス教材集—地理編—』明治図書，2010年，p.77より。）

イ 裕実践の特質—活用力を育成する意思決定学習—

本単元は、東北地方の地域的特色を捉えさせるとともに、過疎・過密問題について考えさせ、東北地方の人口を増やすためにはどうすればよいか、過疎問題の解決について意思決定させることをねらいとしている。

第I部で述べられた意思決定の場合の学習モデルに、裕実践の概要にある人口分布と交通との関係 (a)，過疎・過密地域でみられる問題 (b)，交通網と新しい産業との関係 (c)，工業進出による地域への影響 (d)，人口増加のための提案 (e) とその検証 (f) を当てはめると、次のようになる。

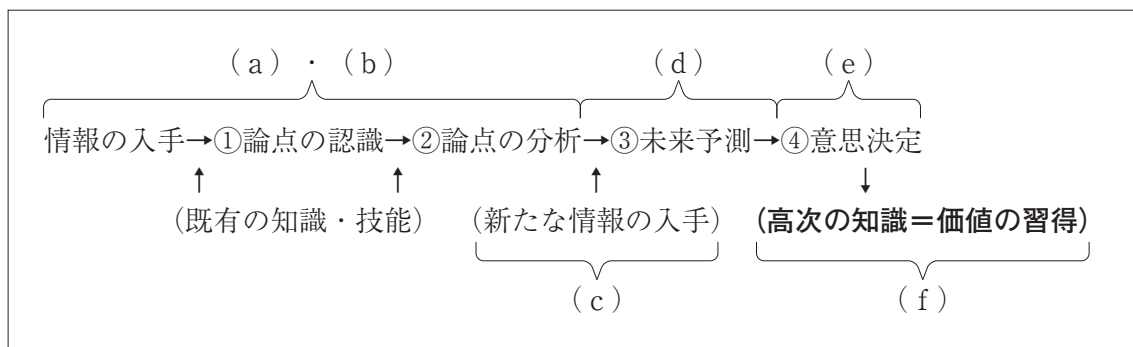



図2 裕実践の意思決定学習の過程

まず、岩手県の交通網と人口分布の主題図の読み取りを通して人口分布と交通との関係 (a) を獲得し、さらに、教科書や地図帳などに掲載されている写真から生活面で困る過疎・過密地域で見られる問題 (b) を獲得する。これらの情報から、明示的ではないけれども、東北地方には人口分布に疎密があってさまざまな問題が引き起こされており、解決の必要性があり(①論点の認識)、それは交通との関係から引き起こされていることが認識される(②論点の分析)。次に交通網と人口分布の読み取りに加えて新しい工業が進出することによる人口増加や地域活性化についての新たな情報を入手することによって (c)、これも明示的ではないけれども、「交通網を整備すれば人口が増える」、「新しい工業が進出すれば人口が増える。また地域も活性化する」という理論的な知識を習得・活用して未来予測をし (d)、東北地方の人口を増加させるためのアイデアを提案 (意思決定) する (e)。そしてさらに、その自分のアイデアについて実現可能性の視点から検証して自分のアイデアを再評価し、より高次の提案へと高めるようになっている (f)。

このように、俗実践は活用力を育成する意思決定の学習モデルの典型事例として位置付けることができる。

ウ 俗実践の限界性—俗実践改善の方向性—

上記のように活用力を育成する俗実践ではあるが、課題もみられる。それは意思決定の質的保証の問題である。本単元は、過疎地域の人口を増加させるにはどうしたらよいか、という問いの解決に向け、交通網の整備や新しい産業の進出が人口の増加をもたらす、という一般的な傾向性 (分析的理論) を根拠に、人口増加のためのアイデアを提案するものになっている。第 I 部第 2 章でも述べたように、意思決定においてより深く、より正確な判断を行うようにするためには、その判断の根拠となる事実認識がより体系的で、より間違いが少ないことが求められる。すなわち、意思決定の根拠となる分析的理論の質の高さが、意思決定の質の高さを保証するといえる。しかし、本単元における意思決定の根拠となる分析的理論は、「交通網を整備すれば人口が増える」、「新しい工業が進出すれば人口が増える。また地域も活性化する」というもので、生徒にとって比較的容易に習得可能なものであり、知的に挑戦するレベルのものではない。ここに、本単元の意思決定の質的保証における限界性がみられる。

それでは、本単元を具体的にどのように改善したらよいただろうか。その改善の方向性は本単元に内在している。本単元では、 1 にみられるように、ファックス教材³③において、「私のアイデア」の限界性を条件や影響面から批判・吟味 (検証) させるものとなっている。ここを充実させるのである。東北地方の過疎地域で人口増加が容易に進まないのはなぜか。それは「私のアイデア」くらいでは過疎地域の人口を増やそうにも容易には増やすことができないからである。より本質的な問題がそこにあるからではないだろうか。そもそも社会問題が問題として立ち現れるのは、これまで多くの人たちが考え、取り組んできたけれども、未だに解決せず、未だに問題として認識されているからではないか。本来は、ここから東北地方の人口を増やすにはどうしたらよいか、という真の意思決定学習を始める必要があるのではないだろうか。その際は、おそらく東北における人口増加を期待したいが、思うように解決しない本当の社会問題が問題として浮き彫りになり、生徒は問題を目の前にして立ち止まり、迷い、容易に意思決定して提案することができない状況

になるだろう。しかしそのような状況から絞り出した意思決定だからこそ、その問題と解決に向けた生徒の意思決定は生徒にとってとても切実で、自らの知識と価値を総動員させた、より貴いものとなるのではないだろうか²⁾。

(2) 活用力を評価する地理テストの実際—単元「経済成長と消費に沸くアジア」の評価問題—

ここでは、まず活用力を評価する評価問題の実際について、具体的にみていく。そして、次に指導と評価の一体化の視点から、評価問題と授業実践例との関係をみていき、その評価問題の特質と限界性、活用力の評価問題への示唆を述べることにする。

ア 中本和彦実践「経済成長と消費に沸くアジア」³⁾ の評価問題

活用力を育成する「理論的知識を習得・活用させる社会科授業」のうち、「地域的特色を解釈させる地理授業」として、中本和彦実践「経済成長と消費に沸くアジア」がある。その評価問題として示されているものが、以下のものである。

問 近年、砂糖の国際価格が上昇し、日本でも砂糖の値段が高くなってきています。
なぜ砂糖の価格が上昇しているのでしょうか。天候不良による価格の上昇ということ以外に、アジアの国々の経済成長や消費生活と関連づけながら説明しなさい。
(※「砂糖の国際価格の動き」については、独立行政法人農畜産業振興機構HP参照。)

(中本和彦「『見方・考え方』を中核にした地誌学習—経済成長と消費に沸くアジア—」、小原友行・永田忠道編著『「思考力・判断力・表現力」をつける中学地理授業モデル』明治図書、2011年、p.65より。)

どのような解答が考えられるだろうか。そして、この評価問題を解くには、どのような学力が必要であろうか。まず、前提として砂糖が嗜好品に関わるものであるという知識が必要であろう。次に、砂糖の価格の上昇という変化の理由が問題の意図として問われていることを読み取る必要がある。そして、それらを踏まえた上で、日本を含めた国際的な砂糖の価格の上昇と、アジアの国々の経済成長や消費生活の変化との関係を考察すること、その考察の結果を表現することが必要である。ただし、その考察のためには、「アジアは人口が多い」、「アジアは近年急激に経済成長をしている」、「アジアは経済成長に伴って消費が拡大している」という事実的知識の他に、「経済成長が嗜好品の消費を高める(誇示的消費)」、「(供給量が一定の場合)需要の増加は価格を上昇させる」という理論的知識が必要である。この評価問題を解く最大の鍵は、理論的知識、特に誇示的消費についての理論的知識を習得しており、活用することができるか、という点にある。解答の一例を示すならば、次のようになろう。

解答例

巨大な人口をもつアジアの国々は、近年、（開放政策や市場の自由化などによって外国企業の進出や工業化が進み、）急激に経済成長しており、それに伴って人々の嗜好品の消費が増加し、砂糖の消費も増加している。そのため、砂糖の国際需要を押し上げ、砂糖の国際価格を上昇させている。

それでは、どのような授業実践に基づいた評価問題なのか、次に実践の概要をみてみよう。

イ 中本和彦実践の概要

○単元目標（以下I～IVは単元展開PART I～IVに対応）

【社会的事象についての知識・理解】

- I 「アジアの経済成長と消費生活の様子」と「コーヒー」を事例に、アジアの人々の生活と自分たちの生活との関わりを理解する。
- II 「経済の自由化」が、巨大な人口を抱えるアジアを急激な経済成長に向かわせたことを、インドを事例に理解する。
- III 「消費社会論」を用いて説明されるインドの消費生活を理解するとともに、その応用として説明される消費に沸くアジアの社会について理解する。
- IV 経済成長し、消費に沸くアジアと日本の経済成長期、及び現在の消費生活を比較することによって、日本について理解する。

【社会的な思考・判断・表現】

- I アジアを概観し、自分たちとの関わりを考察する中で、「なぜ」の問いをもつことができる。
- II なぜ、インドが急激な経済成長を遂げているのか、人口や言語などといったインドの潜在的条件と「経済の自由化」を関連付けて考察することができるとともに、その考察結果をアジアの他の国々についても活用して考察することができる。
- III なぜ、インドが豊かな消費生活をしているのか、「消費社会論」をもとに考察し、インド社会を解釈することができるとともに、その考察結果をアジアの他の国々についても活用して考察することができる。
- IV アジアの経済成長と消費生活の考察結果を活用して日本の経済成長期、及び現在の消費生活について考察することができる。

◎上記の考察、解釈した結果を、資料やモデル図を用いて説明することができる。

【資料活用の技能】

◎上記の考察の過程で、資料からの確かな情報を読み解くことができる。

【社会的事象への関心・意欲・態度】

- ◎ 習得した知識を活用して、アジアの国々や日本、さらには他の地域の共通性・相異性を、関心を持って見つけだそうとする。
- ◎ アジアの国々や日本、さらには他の地域における共通性や相異性が見られたとき、

習得した知識を意欲を持って積極的に活用し、説明しようとする。

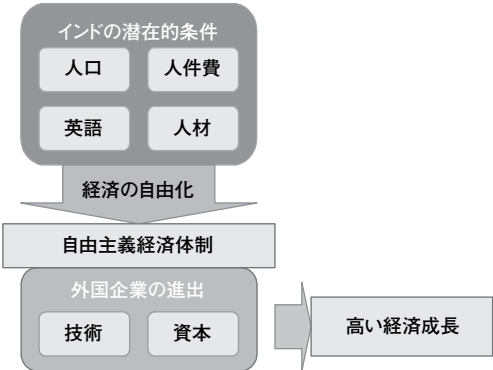
- ◎ 追究活動の中で、他者の説明や解釈に耳を傾け、自らの説明や解釈に誤りがあればそれを受け入れ、修正し、さらにより深く追究しようとする態度。

○単元計画（全8時間）

- I アジアへの扉 … 2時間
- II 経済成長するアジア … 2時間
- III 消費に沸くアジア … 3時間
- IV 日本 日本への応用（活用） … 1時間

○単元展開

過程	おもな問い・指示	学習内容
PART I (アジアへの扉)	1 アジア概観 <ul style="list-style-type: none"> ・これらの写真は、どこの国の写真だと思いますか？ ◎アジアの国々は、いったいどんなところと言えるでしょう？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・中国、インド、ベトナム、インドネシアなどの都市部、農村部等の写真 (◎都市部の豊かな消費生活が(都市部で)見られる一方で、(農村部では)貧しい生活をしている様子が見られるところ。貧富の差があるところ。)
	2 アジアと私たち <ul style="list-style-type: none"> ○なぜ、私たちの身の回りでコーヒーの値段が上がっているのでしょうか？ ○なぜ、アジアの国々でコーヒーの消費量が増えているのでしょうか？ ◎なぜ、アジアの国々、特に中国やインドを中心とした国々は、経済成長しているのでしょうか？ ◎なぜ、アジアの人々は豊かな消費生活をしているのでしょうか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ○新聞には、新興国の消費量が増えてコーヒーの値段を上げざるを得ないと書いてある。アジアの豊かな生活をしている人々がコーヒーをよく飲み始めたから、コーヒーの値段が上がるのではないだろうか。 ○経済的に豊かになることで、コーヒーをはじめ、自動車や携帯電話など様々なものを消費するようになってきていると言える。
PART II (経済成長するアジア)	3 インドの経済の自由化と経済成長 <ul style="list-style-type: none"> ◎なぜ、アジアの国々、特に中国やインドを中心とした国々は、経済成長しているのでしょうか？ ◎なぜ、インドは経済成長しているのでしょうか？ ○なぜ、IT産業が発展しているのでしょうか？ ○なぜ、インドでは最近になって経済が発展したのだろうか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ○アメリカとインドの言語は同じ英語であり、コミュニケーションがしやすい。 ○インドとアメリカとの地理的な位置関係は、真反対であり(アメリカが夜のときにインドは昼間)、事業を24時間体制で業務を行うことができる。 ○インドは人件費も安い。 ○大学への進学が高まっており、優秀な人材が豊富である。 ○インドは1991年に経済危機に陥った。そのときに就任したラオ首相が「新産業政策」を実施し、「経済の自由化」を推し進め、外国の企業の進出、大幅な規制緩和を行った。それによって、外国の企業が進出した。 ○外国の企業は、安い賃金と人口が11億人が多いインドの巨大市場をターゲットにしてインドに進出してきた。

	<p>◎なぜ、インドは経済成長しているのだろうか？まとめてみましょう。</p> <p>◎経済的危機に陥ったインドは、「経済の自由化」によって自由主義体制へと転換を図った。そのため、「巨大な人口（市場）」、「安い人件費」、「英語」、「優秀な人材」といった潜在的條件が整っているインドに外国企業が進出し、技術と資本が投入され、高い経済成長を遂げている。</p>	
4	<p>アジアの経済成長</p> <p>◎なぜ、アジアの国々、特に中国やインドを中心とした国々は、経済成長しているのでしょうか？</p> <p>◎アジアの国々は、いったいどんなところと言えるでしょう？</p>	<p>(例えば、中国における鄧小平を中心とした「改革・開放経済」への転換、世界一の人口、安い賃金、日本企業や各国の進出などを調べて、発表する。)</p> <p>◎「経済の自由化」が進められる中で、「巨大な人口（市場）」、「安い人件費」などを求めて外国企業が進出し、技術と資本が投入され、アジアの国々は高い経済成長を遂げている。 (◎…「経済の自由化」、「高い経済成長」、「巨大な人口」などを用いて各自が解釈し、論述する。)</p>
PART III (消費に沸くアジア)	<p>5</p> <p>インドの豊かな消費生活ーカフェブームとヨガ人気ー</p> <p>◎なぜ、インドの人々は豊かな消費をしているのでしょうか？2時間目の学習を思い出してみましょう。</p> <p>◎なぜ、インドの人々は豊かな消費をしているのでしょうか？</p> <p>◎なぜ、インドの人々は豊かな消費をしているのでしょうか？</p>	<p>◎なぜ、アジアの人々は豊かな消費生活をしているのでしょうか？</p> <p>◎経済的に豊かになったから、人々がコーヒーをはじめ、様々なものを買うようになった。</p> <p>◎「中間層」と呼ばれる比較的経済的に豊かな人々が増えていて、その人たちが買っている。</p> <p>◎「高価であること」で他に対する優越感に浸っている。(必要からではなく)優れた自分を見せたいという欲求を満たすための消費(誇示的消費)が生まれている。</p> <p>◎アメリカン・スタイルの広告などによってアメリカン・スタイルの消費が促されている(依存効果)。</p> <p>◎味覚や嗜好、生活習慣が洋風化するようになってきている。</p> <p>◎豊かさのために子どもの大学進学を希望するようになってきている。</p> <p>◎豊かになった中間層が、アメリカン・スタイルの広告によって、消費を促され、マクドナルド、洋服、洗濯機などを消費している(依存効果)。それらの消費によって、振るまい方、味覚、価値観(清潔感)などが変化させられ、アメリカン・スタイルの生活習慣となっていくたり、カフェ・ブームに見られるようなアメリカン・スタイルの消費によって欲求を満たすための消費(誇示的消費)を生み出したりしている。</p>

6

○なぜ、ヨガや巡礼ツアーといった「インド的なもの」（ヒンドゥー的なもの）が見直されてきているのだろうか？

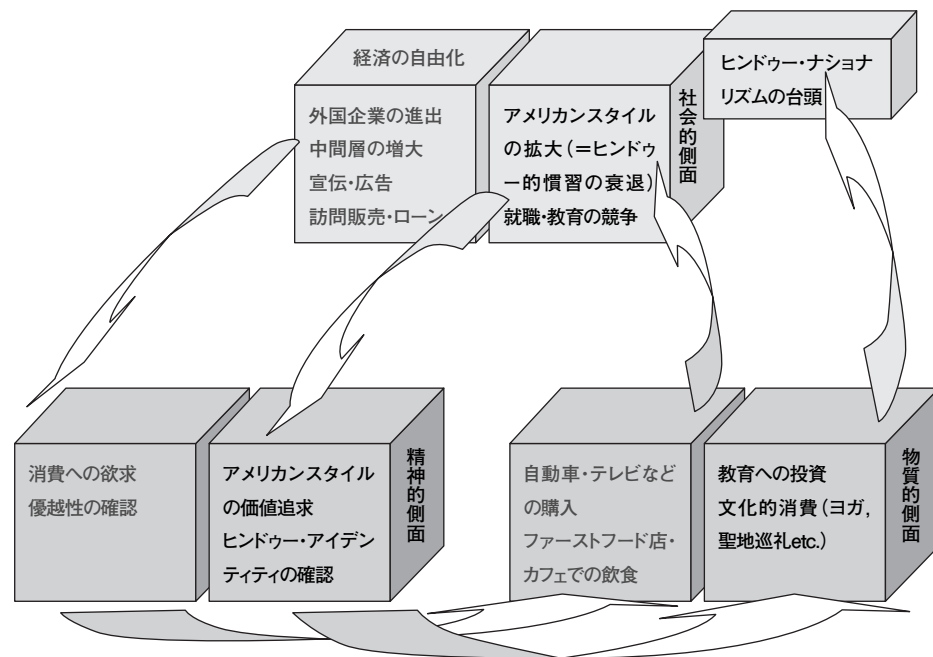
○急激な社会、価値観の変化へのとまどいや不安、あるいは消費社会を生き抜く上でのストレスなどを解消し、癒されるために、「インド的なもの」をお金で買うという、新たな消費を生み出している。

・「インド的なもの」へ回帰しようとする動きは、ヒンドゥー・ナショナリズム運動など、政治的な影響も及ぼしている。

・それでは、これまでのインドの人々の消費についての学習を、次の図を用いてまとめてみましょう。

◎なぜ、インドの人々は豊かな消費をしているのでしょうか？

◎経済の自由化によって外国企業が進出し、経済成長する中で「中間層」が拡大し、巨大な市場を見込んだ外国企業は、宣伝・広告活動や訪問販売・ローンによる販売戦略を導入（社会的側面）して消費への欲求、さらには消費による優越感の醸成を図る。「中間層」は、豊かさによる消費への欲求を満たし、優越性の確認を図ろう（精神的側面）と自動車やテレビなどの耐久消費財やファーストフード店、カフェなどでのサービスの消費を行う（物質的側面）。そのような消費は、これまでのヒンドゥー的な慣習に替わって、アメリカン・スタイルを拡大させ、それらを楽しむための就職や教育での競争を加熱させる（社会的側面）。競争は、さらなるアメリカン・スタイルの価値追求と、急激な変化や競争に疲れたり、不安になったりした人々にヒンドゥー・アイデンティティの確認を希求させる（精神的側面）。そしてそれがさらなる教育への投資とアイデンティティ確認のためのヨガや聖地巡礼などの文化的消費を生み出すことになる（物質的側面）。そのようなヒンドゥー回帰への動きは、ヒンドゥー・ナショナリズムの台頭（社会的側面）へと社会の変化を起こしていく。



7

アジアの豊かな消費生活

○アジアの他の国々でも、インドと同じような消費生活や社会の様子が見られるだろうか？調べてみよう。

ここまでの学習を通して

◎なぜ、アジアの人々は豊かな消費生活をしているのでしょうか？

(例えば、中国における「中間層」の生活の様子、上海のショッピングモールの様子、自動車販売台数、スターバックスコーヒーなどの進出、日本旅行客の買い物行動、愛国心運動などを調べて、発表する。)

◎「経済的自由化」などによる経済発展の中で、「中間層」が増大し、豊かさによる消費の欲求と誇示的欲求を満たすために、嗜好品や耐久消費財などを中心に豊かな消費をしている。また、豊かな消

		活	費を維持・発展させるための教育的・文化的消費も活発になっている。その一方で、急激な生活の変化は、自国の文化へのアイデンティティを目覚めさせ、アイデンティティを確認するための消費なども生み出している。
			◎「中間層」, 「誇示的消費」, 「アメリカン・スタイル」などを用いて各自が解釈し, 論述する。
			◎アジアの国々は、いったいどんなところと言えるでしょう？
P A R T I V (日本)	8	日本への応用(活用)	◎日本もアジアの国です。日本と比べてみよう。 ○日本の高度経済成長期, 洗濯機や冷蔵庫など, 人々はどんな思いで買い物をしていたのだろうか？ ○私たちは, ブランドのバッグや服など, どんな気持ちで買い物をしているだろうか？ ○なぜ, 多くの人が勉強し, 受験し, 大学へ行こうとするのだろうか？ ○なぜ, 京都や奈良を旅行する人が多いのだろうか？ ○日本では, 農村と都市ではどのような差が見られるだろうか？あるいは見られないだろうか？また, それらはなぜか？ (オープンエンド)

(中本和彦「『見方・考え方』を中核にした地誌学習—経済成長と消費に沸くアジア—」, 小原友行・永田忠道編著『「思考力・判断力・表現力」をつける中学地理授業モデル』明治図書, 2011年, pp.54-65より筆者一部抜粋修正。)

ウ 中本実践評価問題の特質と限界—指導と評価の一体化の視点から—

以上のような授業実践と先に示した評価問題との関係を指導と評価の一体化の関係からみてみよう。

本実践単元は、中学校学習指導要領社会の地理的分野「ウ 世界の諸地域」を意図してつくられたものである。「ウ 世界の諸地域」の内容の取扱い及びその学習指導要領解説(以下「解説」)には、次のように述べられている。

(内容の取扱い)

ウ ウについては、州ごとに様々な面から地域的特色を大観させ、その上で主題を設けて地域的特色を理解させるようにすること。その際、主題については、州の地域的特色が明確となり、かつわが国の国土の認識を深める上で効果的であるという観点から設定すること。また、州ごとに異なるものとなるようにすること。

<『解説』>

「この中項目は、世界の各州を対象として、それぞれの①州内に暮らす人々の生活にかかわり, かつ②我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し, その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることを主なねらいとしている(『解説』, p.32, 下線①・②筆者)。

そのため、本単元は、「解説」の①, ②の二つのポイントに対応するよう、次のように単元設計されている。

①アジアに暮らす人々の生活にかかわる内容

…経済成長とともに豊かさを増すアジアの消費生活を取り上げ、主題としている。

②わが国の国土の認識を深める効果的な観点

…「消費社会論」を見方・考え方（理論）として中核とする。そしてインドの消費生活を事例として「なぜ」と問い、その背景と影響について追究することを通して「消費社会論」を習得させ、その見方・考え方を活用して他のアジアの国々に応用し、共通性や相異性からアジアの地域的特色を理解させる。さらに、日本にも活用・応用させることによって、我が国の経済成長期、及び現在における消費生活を考察させる。また、そのために、導入部分に日本とのつながりを感じさせる工夫をして単元全体の布石を打っている。

加えて、表現力の育成においても以下のような表現活動の工夫がなされている。

①「なぜ」の問いに対する表現活動

「なぜ」の問いに対して仮説を立て、資料によって検証するといった科学的探究の過程に沿いながら、生徒自らが自分の考えを発露することができるよう工夫している。

②習得した理論を活用して社会を説明する表現活動

習得した見方・考え方（理論）を活用して社会を説明する場を設定している。例えば、モデル図を用いて説明し、文章化する場を設けている。

③習得した理論を活用して地域を解釈する表現活動

習得した理論を活用して地域を解釈し、論じる場を設けている。例えば、「アジアっていったいどんなところ？」と、地域を解釈する場を見方・考え方（理論）を習得するごとに複数回設定している（知識の成長）。

先述したように、評価問題を解く最大の鍵は、消費社会論の下位の理論である「誇示的消費」であった。また、評価問題は、砂糖の国際価格の上昇を事例に、アジアでの経済成長と消費生活の変化が日本を含めた国際的な影響を及ぼしていることを問うものであった。加えて、その考察の結果を文章として説明させることを求めている。これらは、上記の単元設定のポイントや表現力育成のポイントに示された指導と合致する。さらに授業で育成した思考力を問うため、授業では扱っていない砂糖を事例として取り上げることによって、単なる授業の再生によるテストを巧みに避けるように意図されている。中本実践の評価問題は、まさに指導と評価が一体となったものといえる。

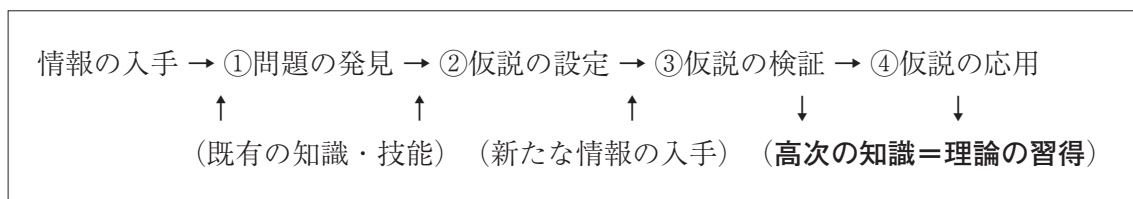
ただし、その授業と評価の一体化から先に示した評価問題には限界もみられる。授業での大きな学習内容の柱は、アジアの経済成長の理由と豊かな消費生活の理由である。具体的には、授業では、「◎なぜ、アジアの国々、特に中国やインドを中心とした国々は、経済成長しているのでしょうか?」、「◎なぜ、アジアの人々は豊かな消費生活をしているのでしょうか?」と問い、考察させていた。そのため、評価問題においても、「アジアの国々の経

済成長や消費生活と関連づけながら説明しなさい」となっていた。しかし、この評価問題では、アジアの経済成長の理由については、十分に解答を迫ることは難しい（先に示した解答例中の（ ）の部分）。この点については、別の評価問題の設定が必要だろう。

エ 中本実践評価問題が示唆するもの—活用力の育成と一体となった評価—

中本実践における評価問題は、活用力の育成と評価にどのような示唆を与えるだろうか。探究学習の過程と活用力は、次のようなものであった。

<探究学習の過程と活用力>



- ①入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力
- ②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力
- ③新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力
- ④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力

これに当てはめてみると、中本実践評価問題は、問題文と砂糖の国際価格のグラフから題意を読み取り（①入手した情報等から問題を発見する能力）、習得している誇示的消費という消費社会論や市場価格のメカニズムを仮説として設定して（②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力）、問題文と砂糖の国際価格のグラフから事実的な知識を用いて仮説を批判、吟味し（③新たな情報を用いて仮説を検証する能力）、経済成長（経済と消費生活（社会）という複数の視点から消費社会論や市場価格のメカニズムといった複数の理論を用いて総合的に説明することをせまる（④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力）問題であるといえる。まさに、中本実践評価問題は、活用力を評価する問題の典型であるといえる。そしてそれは、評価と一体となった活用力を育成する指導（実践）から生まれた評価問題であるといえる。

<注>

- 1) 裕茂樹「東北地方の人口を増やすためには、どうすればよいだろう。—人口減少は、地域社会にどのような影響があるのか—」, 大杉昭英編『中学校社会科活用学習のファックス教材集—地理編—』明治図書, 2010年, pp.74-77
- 2) 森分孝治「『なるほど!!』『どうすべきか』」, 『教育科学 社会科教育』No.383, 明治図書, 1993年11月, p.10参照。
- 3) 中本和彦「『見方・考え方』を中核にした地誌学習—経済成長と消費に沸くアジア—」, 小原友行・永田忠道編著『「思考力・判断力・表現力」をつける中学地理授業モデル』明治図書, 2011年, pp.54-65

(中本 和彦)

2 地理的分野における「活用する力」を育成する授業提案

(1) はじめに

持続可能な社会を形成するためには、社会に参画し、自立した行動ができる主権者を育成することが求められる。社会科教育においても、環境問題、資源・エネルギー問題、貧困の問題、地域紛争等の現代的課題に対する関心と解決に向かう意欲・態度を高め、身近な場所や地域から改善・変革していこうとする実践的な態度を養う必要がある。

そのためにも第三世界の地域や国に対する豊かな興味・関心や確かな認識・理解を育むことは欠かせない。とくに南北格差の背景や構造、格差が拡大するメカニズムを解明していくことが、現代的課題を認識するための起点となり基盤となると推察する。

今回、「活用する力」を育成する授業提案として、「世界の諸地域」、「(ウ) アフリカ」の単元(全9時間)を取り上げることにした(中学2年生・実践は平成21年度, 2学期)。アフリカ州の地域的特色や人々の生活の様子に関する理解を基礎に、極度の貧困が発生し、解決できないでいることに対する探究活動を行う。「どのような問題が、なぜ起こるのか?」「なぜ解決が困難なのか?」等について多面的、多角的に考えさせたい。さらに「貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために世界は何をすべきか?」ということについて自分の考えを1000字で述べさせる。

ここでは、原田氏が第I部第1章において示した活用力育成の学習過程に基づき、単元の前半部分では「探究学習」のモデル、後半部分は「意思決定学習」の学習モデルを参照している。

【単元の前半】 : 「探究学習」の学習モデル

情報の入手⇒①問題の発見⇒②仮説の設定⇒③仮説の検証⇒④仮説の応用

【単元の後半】 : 「意思決定学習」の学習モデル

情報の入手⇒①論点の認識⇒②論点の分析⇒③未来予測⇒④意思決定

このような一連の探究学習活動・意思決定学習において、地理的・歴史的知識や概念をグローバル課題の解決に活用させたいと考える。

(2) 活用する力を伸ばす単元開発をめざして

ア 単元計画の改善

年間指導計画における単元の配列と各授業の改善に取り組む。「活用する力」を伸ばすためにも単元・授業の各レベルにおいて「活用の場面を組み込む」という方法で改善を図る。

改善案として、単元を「①事実認識過程」「②概念探究過程」「③意思決定過程」の三段階で構成する(図1)。確かな事実認識、知識をもとに概念を形成し、これらの知識や概念を活用して意思決定に向かわせたい。

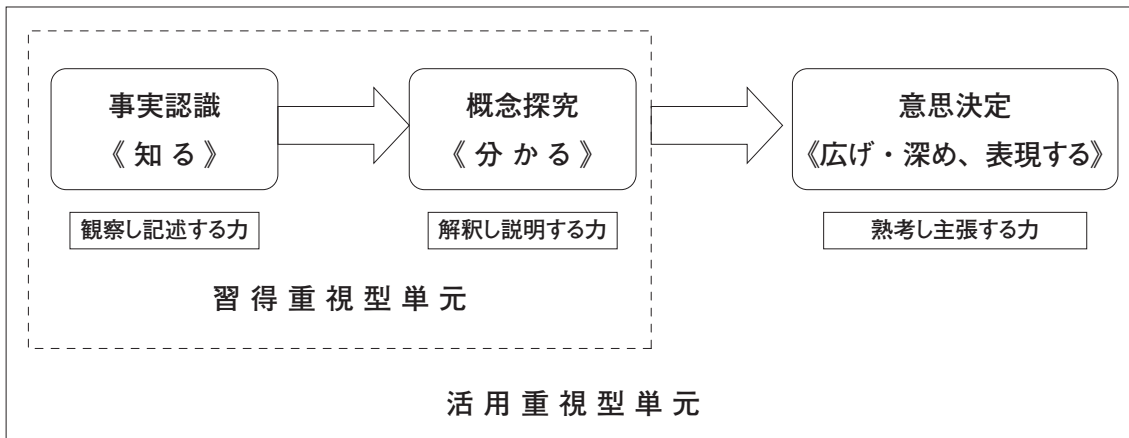


図1 単元の構成

イ 三段階の学習過程に基づく単元構成

「①事実認識過程」「②概念形成過程」では教師の指導を軸にして、知識や概念、基礎的な学習技能の形成を目指す。「③意思決定過程」では生徒が自ら課題を設定し、概念探究過程で習得した概念や技能を活用し、資料読解をベースにした探究に取り組ませる。さらに、社会的論争問題に対する意思決定を行うことも視野に入れる¹⁾。

「②概念探究過程」を原田氏が示す、探究学習の場合の学習モデル「③意思決定過程」の意思決定学習の場合の学習モデルで構成する。「②概念探究過程」「③意思決定過程」の基盤になるのは「①事実認識過程」であり、この過程で学んだ知識を「②概念探究過程」や「③意思決定過程」において活用できるように計画する。

ア) 事実認識過程－知る段階－

社会科学の知見によって吟味された視点や枠組みに基づいて、「事実(社会的事象)」を選択し、分析や総合を重ねていくことによって確かな社会認識が育まれる。「それ(社会事象)は何か?」という問いに対して観察眼を働かせ、知識に基づいて社会事象をとらえる力を鍛えることがこの過程の目的である。論理的思考や批判的思考を発揮させ、事実はどうなっているのかということについて問題意識をもって見る(観る)眼を培いたい。

このためにも、観察して読み取った事実を素材にして、「子どもが興味を持ち、考え込まずに得ない課題」「実社会・実生活に直結した課題」などを提示する必要がある²⁾。

イ) 概念探究過程－分かる段階－

この過程では、資料を通して事実を認識した上で、概念を探究することを目的とする。とくに、疑問や知的好奇心を高める資料を知識体系と関連づけて提示し、因果関係、階層関係、相関関係等、多様な関係に対する問いや気づきを促すことを重視とする。授業では「情報の入手→①問題の発見→②仮説の設定→③仮説の検証→④仮説の応用」の過程で構成する。

「なぜか?」という問いに対して説明する活動が中心になる。資料の読解を通して、「つまり～」という抽象度の高い説明と「例えば～」という具体性のある説明、さらに「なぜなら～」という、根拠(証拠)を示した説明を加味することによって、より高次の概念や理論が習得される。個別の知識と概念的知識を統合し、仮説を設定し、検証しながら概念相互の関係を広げることを通して、応用力や説明力の広い、豊かな知の習得に結びつけて

いくことができる。

ウ) 意思決定過程－考えを広げ、深め、表現する段階－

この過程では「どうしたらいいか？」という問い（課題）に対する答えを探究することを目的とする。そのために「情報の入手→①論点の認識→②論点の分析→③未来予測→④意思決定」の過程により授業を構成する。獲得した知識や概念を活用し、教師が設定したテーマに基づき、自ら課題を設定し探究する過程において、有効な資料の活用を促す。社会的な論争問題について自分と他者の見解を比較し、解釈の相違を比較したり、合意を形成したりしながらさらに考えの質を高めさせていくような学習も組み込んでいきたい。

(3) 活用する力を支える読解力

多様なテキストの読解とそれに伴う解釈や熟考、評価によって、PISA型読解力は向上し、基礎的な知識とスキルの習得につながる。「書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する」ことは「習得・活用・探究」と同義であり、国語科だけでなく、すべての教科・領域に通じる重要な学習プロセスであるといえる。ただし、社会科として求められる固有の読解力の内容と育成すべき方法を明らかにすることが肝要である³⁾。

ア 活用する力のコアとしての「資料リテラシー」

社会科授業の生命は資料である。社会科では、とくに資料の読解を基盤とした問題発見力や問題解決能力、社会科固有の情報活用能力を鍛えることが要請される。本校では、たとえば、統計データ、地図、年表、写真、景観等を読解する力を高めるため、「資料リテラシー」という用語を用いて小中連携教育を行っている。資料リテラシーは、「資料の特性に応じて、読み取り、解釈したことを論理的に表現（記述・説明・主張）する能力」である。資料リテラシーは以下の三つの過程に分類することができる。

- ①資料の収集・観察－気づいたこと・分かったことを読み取る。
- ②資料の分析・解釈－疑問点を出す、予想し、仮説を立てる、他の資料を使って調べる。
- ③資料の編集・表現－資料を批判的に吟味する、わかったこと・考えたことを表現する。

イ 資料リテラシーを鍛え、活用する力を高めるための指導方略

ア) 問いを構成する指導の充実

① 能動的な受信者を育て、当事者化を促す

連続型、非連続型テキストを資料として活用するためには、単に資料から多くの情報を取り出すだけでは不十分である。事実認識、概念探究、意思決定の各過程において、価値のある「問い」を「問い続ける」ことで読解の質を高めていくことができる。

そのためには、知的な探究を促す「問い方」の指導が要請される。社会事象に対し「自分ならどうするのか?」「自分はどうなのか?」といった当事者としての主体的、自発的な問いかけも必要になってくる。

② 資料からの問い方を教える

生徒に資料を示して事実をとらえるための視点や方法を習得させ、活用できるようにする指導が求められる。問い方のモデル・事例を示すなどして、どう問うことが有効、適切かを教える必要がある。

○**事実認識のレベル**

社会的事象を観察し、記述（描写）する中で、疑問を持たせたり、発見を促したりする。

- ①位置に関する問い：どこにあるか。どこに何があるか。どのように分布しているか。それはなぜか。
- ②形態に関する問い：どんな形をしているか。それはなぜか。
- ③変化に関する問い：どう変化したのか。変化にどんな法則性があるか。それはなぜか。

○**概念探究のレベル**

知識や概念に基づき、見えない構造や関係、機能を説明する。

- ①構造に関する問い：どのような仕組みになっているか。部分と全体はどう関係しているか。
- ②原因に関する問い：原因は何か。何が問題になっているのか。どんな問題があるのか。なぜ解決が困難なのか。
- ③関係に関する問い：何と関係しているのか。どのような相関関係・因果関係があるか。

○**意思決定のレベル**

資料を読解することを通して論理的な意見を構成する。

- ①価値に関する問い：どんな価値があるのか。どのような価値観に基づいて考えるのか。
- ②立場に関する問い：どのような人々のどのような立場から考えるのか。他の立場から考えるとどうなるか。
- ③視点に関する問い：どのような視点で考えるのか。他にどのような視点があるのか。

図2 資料リテラシーを高める問い方の例

イ) 書く活動の充実化

① 「書く活動」のレパートリーを拡充する

書く活動のレパートリーを拡充し、気づきや考えを記述させることが思考力の育成に通じる。記述文、説明文、主張文だけでなく、取材メモ、図解（関係図・模式図・概要図等）、スケッチ等、書く活動には多様なジャンルがある。考える活動は書く活動と一体であり、書く活動のレパートリーを拡充することは、論理的思考をはじめ多面的、多角的に考える学習を促すことにつながる⁴⁾。

② 言語活動の充実－国語科との連携を生かす－

学習指導要領改訂の特色の一つとして「言語活動の充実」がある。新教育課程の中心的課題は、「生きる力」としての考える力であり、これらの能力は「言語活動の充実」を通して実現されるものである。

国語科だけでなく、すべての教科・領域において「考える力」を「言語活動」と結びつけ、総合的、一貫的に高めていくことが要請される。社会科では、資料読解と言語活動を結びつけ、相互に高めるという指導と評価のあり方が問われる。

しかし、資料を的確に読解する能力が子どもに育っていなければ、単に知識の詰め込みになってしまう。資料リテラシーを小学校から計画的、継続的、系統的に高める指導を工夫していかなければならない。

ウ) 各段階に応じた「書く活動」を位置づける

① 事象を観察し、読み取った事実を具体的に書く－事実認識過程における「記述」－

事実認識過程においては、教師が示した、価値のある、有効な視点に基づいて事実を見る眼を鍛えていく。そのためには「注意深く観察したことをもとに、詳しく具体的に記述する」ことを中心に授業を展開する。資料を観察して考えられることや言えることは何か、分かることは何かということを数多く列挙させ、記述させる。

② 関係を解釈し、概念や法則を書く—概念探究過程における「説明」—

社会的事象を理解するということは、その特色や事象間の因果関係、階層関係、相関関係等を説明できるということである。事実を認識するだけでなく、全体の文脈の中でどう位置づけられるのか、どういう意味や価値があるのかということについて解釈できるということである。「事象間の関係（因果・階層・相関）を解釈し、説明する」ことを中心に授業を展開させながら、多様な資料に基づいて、より説明力の高い概念、汎用性の高い法則へと到達させるようにするのがこの過程における授業の目標である。

③ 考えを根拠に基づき、明確に書く—意思決定過程における「主張」—

意思決定は概念や技能を活用して課題解決に向かうことでもある。自ら課題を設定し、仮説を立て、資料を収集・読解し、解決方法や提案を主張文という形に構成させる。

社会科では問題の解決だけでなく、問題の複雑さ、問題発生メカニズム、解決の困難さ、問題解決のための条件等について探究し、解明し、論述することも不可欠である。

課題の探究とともに、課題に対する価値判断や意思決定を伴う過程においては、再度、概念探究や事実認識に立ち返り、検討を加えることも求められる。

（４）単元名「アフリカ」—アフリカから考える、持続可能な社会のあり方—

ア 単元設定の理由

ア) 地域形成のダイナミズムを理解し、問題発生メカニズムを考える

学習指導要領（平成20年版）では「基礎的・基本的な知識を習得する学習」を実施したあとで「それらの知識を活用し」、「主題を設定し追究する中で、地域的特色が明らかになる」学習活動を組織することが期待されている。このことは、地理教育全体に貫かれている視点であるといえる。

「（ウ）アフリカ」では、以下の主題例が示されている。

アフリカ＜主題例＞モノカルチャー経済下の人々の生活

“第一次産品にたよるアフリカ諸国の人々は、どのような生活をしているのか”という問いを立て、アフリカ諸国の主要産品、主要国の経済状況と生産物、貿易の様子、主要生産品とアフリカに暮らす人々の生活との関連、旧宗主国など先進国との結び付きなどを追究すると、アフリカの脆弱な経済基盤とその理由が明らかになり、アフリカの地域的特色の理解につながる。

主題例では、「アフリカの脆弱な経済基盤とその理由」を明らかにすることで、地域的特色を理解するという構成になっている。ただし脆弱な経済から脱しきれない要因は複雑であり、地理的側面だけでなく、歴史的、政治的要因について学習する場が不可欠である。

とくに、アフリカにおける貧困問題の背景には、歴史的に形成されてきた脆弱な経済、政治システムがある。また、急激な人口増大、内戦、病気、不平等な資源配分等によって、極度の貧困から脱しきれない状況が続いている。

政治、経済、社会等、複雑に関連づけられる問題の構造を明らかにしながら、解決の困難さを認識させるとともに解決に向けての展望について考えさせたい。

イ) グローバルな視野からアフリカの問題を考える

アフリカが抱える様々な課題は、環境問題、貧困問題、飢餓や紛争、疾病等、極めて深刻であり、世界全体が共有し、解決を急ぐべき課題である。持続可能な社会について考えるためにも、アフリカ（ここではサハラ以南のアフリカ<50か国>を指す）の国々に対する地理、歴史、政治、経済に関する確かな認識や理解は必須課題である。

すでに国連のミレニアム開発目標（MDGs）には、2015年までに極度の貧困を半減させることやHIV／エイズの蔓延を食い止めること、さらには初等教育を完全に普及すること等が示されている。

1993年には第1回アフリカ会議が東京で開催され、以来、5年ごとに日本で開催されているが、目標の達成には多くの難問がある。グローバルな国際協力と市民の支援をいっそう促進すべき時代にきている。

ウ) 地域形成のダイナミズムを理解し、問題発生メカニズムを考える

アフリカはかつて様々な王国が栄え、独自の文化が育まれてきた地域である。しかし、アフリカは生徒にとって「暗黒大陸」である。アンケート調査によるとアフリカについては偏見に満ちたイメージを持っている者が多い。

本単元ではグローバル化する貧困問題を軸に、地理的、歴史的背景、政治、経済的特色、他地域とのつながり等について多面的・多角的に考えさせていく。アフリカにおける地域形成のダイナミズムや問題発生メカニズムについて、多様な資料の読解に基づいて論理的に考える能力や態度を育みたい。

エ) 言語活動の充実に向けて

多様な資料を読み取り、解釈し、主張や合意を構成していくことを重視する。その際に、文献資料やICTを充実し、これらを積極的に活用し生徒の学習を深化させていきたいと考える。ただし、生徒が主体的に学ぶためには、その条件として適切な資料を整え、生徒が自由に選択し、活用できるようにすることが重要である。

今回、教師の方で資料（アフリカの地理や歴史、アフリカの貧困問題を理解し、考える上で基礎となる統計や地図、図書、新聞記事等の資料〈「アフリカデータブック」〉）を作成し、生徒に配布した。全体把握ツリーや因果関係マップの作成を通して、考えたことを図化する学習活動に取り組ませた。学習の成果物として、1000字提言文を作成させる。

イ 単元の計画（全9時間）

夏休みに「地域探究レポート」に取り組ませる。発展途上国に暮らす人々の生活の様子や文化を探究し、発展途上国に対しての関心を高めていくことを目的とする。

単元の前半では、アフリカの地理・歴史を大観させる。後半では、アフリカの貧困問題を軸に、客観的な資料に基づき実態把握や原因究明を行う。その上で、「アフリカにおける貧困問題とはどのようなものか?」、「なぜ貧困問題が起こるのか?」、「貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために世界は何をすべきか?」等について探究し、地理・歴史の知識を活用しながら考えさせる。

学習過程	主題	おもな活動
(1) 事実認識過程 《知る段階》	アフリカはどのような地域か？・どのように形成されてきたのか？—アフリカの地理や歴史を大きくとらえよう！—	資料（アフリカデータブック）の読解と解釈
(2) 概念探究過程 《分かる段階》	貧困とはどのような問題なのか？ —資料の読解を通して、アフリカの貧困問題の実態をとらえよう！—	全体把握ツリーの作成と 考えの記述
(3) 意思決定過程 《考えを広げ、 深める段階》	貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために世界は何をすべきか？—資料の読解をもとに考えたことを提言文にまとめよう！—	因果関係マップの作成と 考えの記述
		1000字提言文の構成と作成

図3 各過程における主題と活動

ア) 事実認識過程：アフリカはどのような地域か？・どのように形成されてきたのか？

アフリカ地域がどのようにして形成されてきたのかという点について、自然、文化、歴史の視点から学ぶ。とくに、民族や宗教、言語の分布を無視した国境線策定が、以後の国家の形成に多くの支障をきたしていることに気づかせたい。

「発展途上国・アフリカ」という側面だけでなく、独自の歴史的発展を遂げてきた歴史や多彩な民族文化にも触れ、関心を高めさせていきたいと考える。

①アフリカはどのような自然・社会環境にあるのか？

—地図・統計年表を活用してアフリカの社会を大きくとらえる—（1時間）

アフリカの位置、地域区分、地形、気候、人口、民族、宗教、言語の分布等について統計地図等を利用して知る機会を設ける。アフリカを自然・人文の側面から大観させる。

とくに植民地分割競争の名残として的人為的な国境に着目させる。民族や宗教、言語の分布を無視したこれらの国境線策定が、以後の国家の形成に多くの支障をきたしていることに気づかせる。

②モノカルチャー経済の何が問題なのか？

—一次産品の輸出に依存することの問題点を考える（1時間）—

アフリカ諸国の主要輸出入品や輸出入額について、教科書や地図帳、教師が準備した統計資料等で調べさせる。一次産品の輸出に依存した経済（モノカルチャー経済）の様子を統計資料から把握するとともに、その問題点について考えたことを書かせる。教科書や地図帳、『統計要覧（古今書院）』を使って、単一の農産物や資源の輸出に頼るアフリカの実態について説明する。

③アフリカはどのような歴史を歩んできたのか？

—地図や年表を活用して地域形成の歩みを理解する（1時間）—

アフリカ史は一般に、「①ヨーロッパとの接触以前」、「②奴隷貿易時代」、「③植民地時代」、「④解放と独立の時代」に分類することができる。これらの各時代の特色を把握することが地域的特色を理解するための基盤である。アフリカ史を大観し、現代のアフリカが抱える問題とそれらの問題の実態や原因、解決方法を考えることの意義について認識させたい。授業の内容としては、975年、1497年、1660年、1660年、1750年、1890年、1939年のアフリカの歴史地図（米山俊通<1986>『アフリカ学への招待』、NHKブックス）を見せ、アフリカの発展、沿岸部から内陸部に向けて侵略が進められていった経緯を説明した。

時間	主 題	生徒の活動	活用の観点からの留意点
夏休み	地域探究レポート 発展途上国に暮らす人びとの生活や文化について調べよう	一 斉 ・発展途上国に暮らす人々の生活の文化を探究することを目的に地域探究レポートの作成に取り組む。地域の図書館やインターネット等を利用して調べる。	・事前にレポートの構成（目的・方法・内容と結果の考察・感想や今後の課題）について指示する。 ・レポートの形式にしたがって構成する。
アフリカはどのような地域か？どのように形成されてきたのか？<事実認識>			
1	①アフリカはどのような自然・社会環境にあるのか？ 地図・統計年表を活用してアフリカの社会を大きくとらえる	一 斉 ・アフリカの自然と人文について白地図にまとめる。 ・白地図におもな都市の位置や交通網、産業について整理するとともに、今まで学習してきた地域（中国・アメリカ合衆国・ドイツ）と比較し、気付いたことをまとめる。 ・人口ピラミッドや貿易統計等を読み取り、アフリカ社会の全般的な課題点について考え、列挙する。	・地図帳を見て、地形区分、気候区分からアフリカの自然的特色をまとめる。 ・アフリカの人口分布、民族、宗教等の分布図から読み取れることを記述する。 ・資料の読解に基づいてアフリカを地域区分し、その理由を記述する。
1	②モノカルチャー経済の何が問題なのか？ 一次産品の輸出に依存することの問題点を考える	一 斉 ・アフリカ諸国の主要輸出入品や輸出入額について統計資料で調べたことをまとめる。 ・一次産品の輸出に依存した経済（モノカルチャー経済）の様子を統計資料から把握するとともに、その問題点について考えたことを書く。	・統計資料を活用して、アフリカの産業や貿易の特徴、モノカルチャー経済の歴史的背景についてまとめる。 ・日本がアフリカから輸入している農産物や資源等について調べる。
1	③アフリカはどのような歴史を歩んできたのか？ 地図や年表を活用して地域形成の歩みを理解する	一 斉 ・アフリカ年表を読み取り、歴史を大観する。また歴史地図をもとにアフリカで栄えた王国やその後の奴隷貿易、植民地分割の様子について知る。 ・アフリカと欧米先進国との関わりの変化、現代社会における南北問題について理解する。	・歴史的分野で学んだ知識や歴史教科書や歴史資料集を活用してアフリカ史の概要をワークシートに整理する。 ・ヨーロッパの発展の経緯をアフリカの視点で見直す。
貧困とはどのような問題なのか？ 貧困の本当の原因は何か？<概念探究>			
2	④貧困とはどのような問題なのか？ 資料（アフリカ・データブック）を読解し、貧困問題がどのような問題か、どのような問題と関連しているかを考える	個 人 ・資料を根拠にして貧困がどのような広がりや深まりを持った問題であるか、紛争との関連等、具体的な例をあげながら全体把握ツリーで整理する。 ・シエラレオネやルワンダ（放送番組）の事例、コンゴ民主共和国（新聞記事）について背景をつかむ。	・アフリカ諸国の一人当たりのGDPや世界の最貧国の分布図、統計グラフ等、放送番組等を読み取り、アフリカ固有の問題点を説明する。 ・複数の原因を探し、相互の関係について考える。 ・極度の貧困からどのような問題が発生し、それがさらにどのような問題を引き起こすか（問題の連鎖）について班で話し合ってみる。 ・関係マップを相互に交換し、重要なキーワードを選びながら問題相互の関係を整理する。
		班 ・極度の貧困からどのような問題が発生し、それがさらにどのような問題を引き起こすか（問題の連鎖）について班で話し合ってみる。 ・関係マップを相互に交換し、重要なキーワードを選びながら問題相互の関係を整理する。	
2	⑤貧困の本当の原因は何か？ 貧困の原因を考え、重要度が高い（本質的な）ものについて考える	個 人 ・因果関係マップの作成を通して、貧困の原因について「なぜ」を繰り返しながら問題の原因を探り、解決の困難性について発見する。 ・貧困問題においてもっとも重要な原因について自分の考えを整理する。	・貧困問題の本質的な原因について、因果関係マップを使って図示する。また、作成した図に基づいて考えを整理する。 ・アフリカの貧困問題の原因について説明文を書くための構想を練る。 ・貧困問題の構造的な要因について気付いたことを班で相互に交流し、問題の深刻さについて発表する。
		班 ・アフリカが貧困問題からの真の原因をふまえて、持続可能な社会の実現に向けて、これから解決すべき課題は何かについて話し合う。	
貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために世界は何をすべきか？<意思決定>			
2	⑥貧困削減を達成し、持続可能な社会の実現に向けて日本の果たすべき役割は何か？ 提言文を作成し、自分の主張を訴える	個 人・班 ・貧困の削減が持続可能な社会の実現に向けて世界的な課題であることに気付かせる。 ・貧困を削減するために世界の果たすべき、もっとも重要なことを提言文にまとめる。（1000字） ・グローバル課題と日本、地域等の課題とのつながりについて気付いたことを発表する。	・私たちの税金が具体的に何にどう使われるべきか、世界全体で取り組むべきことは何かということ資料に基づき、新聞の社説を参考にして主張を論理的に記述する。 ・班で話し合いながら意見を出し合い、推敲する。提言文は新聞の読者の欄に送付する。

図4 単元プラン

イ) 概念探究過程：貧困とはどのような問題なのか？・貧困の本当の原因は何か？

アフリカを大観する学習のあと、探究学習（貧困問題に焦点化した発展的学習）を行う。テーマは「アフリカから考える、持続可能な社会のあり方」である。おもな目的としては「アフリカの貧困問題の解決に向けて、自分の考えを深めること」「このことを通して、社会や世界のあり方について考えを深める（探究する）こと」の二点である。

今回の授業では資料リテラシーの中でも統計の活用力を向上させることも目標の一つである⁵⁾。アフリカデータブックには、たとえば、「アフリカの一人当たりのGDP」「アフリカの経済成長率」等の統計グラフがある。授業では複数のビデオ番組（たとえば、『データマップ 63億人の地図—寿命—, NHK, 2004年放送』）も使用し、生徒の興味・関心が高まるように工夫した。

ウ) 意思決定過程：貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために何をすべきか？

(3時間)

「貧困削減を達成し、持続可能な社会の実現に向けて日本の果たすべき役割は何か？」について、資料に基づいて論点を認識し、分析しながら、自ら意見を構成させる学習活動である。「全体把握ツリー」「因果関係マップ」を活用し、アフリカの貧困問題に関して、資料に基づき「世界が取り組むべき課題」について書かせる。授業の一例をあげる。

【授業の目標】 <社会的な思考・判断・表現>

- ・多様な資料の読解に基づき、貧困問題の原因を考えることを通して、問題解決に向けての課題を明らかにすることができる。

	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点	準備物
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの復習 ・本時のねらい ・アフリカで極度の貧困が起こっている現状を統計グラフで確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「極度の貧困にある人々」の割合のグラフと人数のグラフがどう変化したか予想する。 ・二つの折れ線グラフからわかることを発表する。 ・前時までの学習を振り返り、貧困問題にはどのような問題があるのかについて発表する。 ・本時の学習の目的について把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「1820年から1992年の極度の貧困にある人々」等のグラフ（貧困の割合・人数）を示す（パワーポイント）。 ・統計地図を見せて、アフリカでは依然として極度の貧困から抜け出せていないことを確認させる。 ・前回記述した200字の文章（因果関係マップを作成して）を読ませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカの地図 ・中程度の貧困と極度の貧困 ・一人あたりの年間所得 ・世界の平均寿命 ・アフリカデータブック
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・「因果関係マップ」を活用し、貧困問題の原因について考える。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> アフリカの貧困問題において、特に重要度が高い原因は何だろう？ </div> <ul style="list-style-type: none"> ・「因果関係マップ」を眺め、貧困問題が深刻化している原因について、重要と考えるものを選び、ワークシートに記入する。 ・なぜそれが重要なのかについて因果関係マップを用い根拠を示して説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「因果関係マップ」を見て、貧困問題がどのようなことと関係しているのかについて確認させる。 ・特に深刻な影響を与えている、重要度が高いと考える原因を三つ選ばせる。 ・一つに絞らせる。 ・4人の班で話し合わせる。 ・説明は各自1分とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・因果関係マップ ・ワークシート

40分	<ul style="list-style-type: none"> 原因究明を通して貧困問題を解決するための方策について考えを深めよう。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>アフリカが「貧困の悪循環」から抜け出すために世界はどういうことに取り組むべきだろう？</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> 貧困の悪循環から抜け出し、問題を解決していく上で、取り組むべき課題を考え、ワークシートに書く。 各自で書いたことを班内で交換する。 個人で考えたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 以下の二つの項目に留意して方法について考えさせる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ○貧困問題の解決につながる、重要度が高いものであること。 ○実現可能性があり、具体的なものであること。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ワークシートを交換させる。 何名かの生徒に発表させる。 	
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 「1000字提言文」の作成に向けて見通しを持つ 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事を読む。 具体的な事例を通して、アフリカの貧困問題に対する関わり方についてのヒントを得る。 	<ul style="list-style-type: none"> 「仕組み」をつくることの重要性に気付かせる。 「1000字提言文」の作成に向けて見通しを持たせる。 国連開発計画、ミレニアム開発目標(MDGs)等を示す。 	<p>新聞記事</p> <ul style="list-style-type: none"> NPO法人・TFTの紹介(日本経済新聞09/10/19)

(5) 成果と課題についての考察

授業実践の成果と課題について、授業者として考えたことを以下に述べることにする。

○興味や関心を高める教材の開発

活用する力を育成する授業づくりのポイントは、生徒の興味・関心を高める教材の開発に負うところが大きい。今回の授業でも、統計資料だけではなく、ビデオ教材(NHK放送番組)の視聴、読み物教材(図書・新聞記事)の読解等、多様な資料を生徒に見せて、興味・関心を高めるように配慮した。魅力ある教材により、興味や関心を高めることが、自ら学び、考えようとする意欲、活用する力の土台になると考える。

○資料の見方・資料からの考え方

今回の授業では、「アフリカデータブック」と称する資料集を教師が作成し、生徒に配布した。ただし、資料を配布するだけでは生徒の活用力を高めることはできない。①全体読み、②吟味読み、③創造読み、というように読解の方法を具体的に指示したり、資料に対する「問い方」、統計グラフを読み取るための視点や手順を教えたりすることで、資料に対して広く、深い読み取りが可能になったと考えられる。

○三分野の関連 総合的学習との関連

今回、地理・歴史・公民を融合した単元を開発した。このことにより、三分野の相互活用が促されると考える。今回は2年生の実践であったが、3年生での公民的分野の先取りの学習となっている。たとえば、公民的分野の目標に、「社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる」「世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識させる」ことが示されている。このことも今回の単元内容と関連づけられている。

○小中連携の視点から

統計リテラシーや地図リテラシー等は、小学校段階から意図的、計画的に身につけておくべき能力である。小中において、このような能力の系統表を定めるような連携の仕方も有効である。資料読解の基準を系統表に基づいて定め、単元や授業の構成に生かしていくことで、連携がいつそう進展するものと考えられる。

今後の課題点については以下の通りである。

- ・「貧困問題」にポイントを絞って学習に取り組ませたことで、確かに生徒の課題意識を高めることができたが、「アフリカ地誌」の理解に関しては不十分さが残った。動態的地誌における指導のあり方についてのさらなる実践研究が必要である。
- ・習得した知識や技能をどれだけ活用しているか、あるいは活用力がどのように高まっているのかについての検証が不十分である。他の単元についても、活用の場面を組み込んでいるものの、活用力に大きな差があることが課題である。単元レベルでの活用型授業の構成とともに、一単位時間における活用場面の工夫が必要である。
- ・活用する力を高めるためには、活用重視型単元を構成し、知識や技能を活用する場面（調べる活動・考えを表現する活動等）を比較的長い時間、組み込むことが重要である。そのための時間を確保するためにも、よりいっそう、習得型単元における指導の充実が求められる。

<注および参考文献>

- 1) 岩田は、「『知る』は社会事象の存在を認識することであり、『わかる』は社会事象間の関係を認識することである。『考える』は社会的論争問題に一定の価値判断をすることである」と述べている。「知る」は事実認識過程、「わかる」は概念探究過程、「考える」は意思決定過程と置き換えることができよう。〈岩田一彦著『社会科固有の授業理論・30の提言—総合的学習との関係を明確にする視点—』明治図書, 2001年, pp.91-92〉
- 2) 言語力育成協力者会議では、「思考や言語力の育成方策について（報告書案）」において、「思考や論理は、的確であることが基礎となる。そのため、事実を記録する、描写する、報告するなどの活動を発達の段階に応じて適宜行い、正確に理解したり、分かりやすく伝えたりするなどの技能を体系的に身に付けることが必要となる」としている。
- 3) 国立教育政策研究所（2007）『生きるための知識と技能3 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2006年調査 国際結果報告書』, ぎょうせい）
北は、社会科の読解力には、以下のような具体的な能力が包含していると述べている。すなわち「①資料に当たって、問題解決しようとする意志力」「②資料から事実を公正かつ多面的にとらえる力」「③事実を操作し全体的な傾向や特色を考える力」「④学習問題を解決に導く力」「⑤資料の限界性に気づく力」である。
北俊夫「社会科における『読解力』向上の課題」『教育展望』, 教育調査研究所, 第51巻, 第4号, 2005年, p.23
- 4) 大西によると、「報告文を書く『活用型』の記述力の育成を目標にするとしたら、言語活動として、書き手主体・受け手・目的・内容・叙述の方法という五要因を明確にするとともに、(中略)観察した事象をできるだけ忠実に『記述』し、その事象が何故そのようなして発現したのか『説明』するとともに、見学によって学び得たことについての感想、意見を述べる(論述する)技能が要求されることを分析しておくことが必要である。」と述べている。
大西道雄「文書対応記述力の育成と『場』」『国語教育』, 明治図書, No.704, 2009年, p.16

- 5) 木村は、「統計データの5段階読み」として、①傾向（規則性）読み・予測読み、②関係・関連づけ読み、③モデル化（定式化）読み、④高次元・異次元の知（情報）への変換読み、⑤新しい知（情報）の創造読み、の項目を示している。

このような段階性やカテゴリーを意識してカリキュラムを構成することは、小中高を一貫した社会科を構築していく上でも有効である。

木村捨雄著『進む情報化社会の統計リテラシー』東洋館出版社、2005年、p.9

（井寄 芳春）

3 地理的分野における「活用する力」の評価計画と実践分析

(1) 単元における評価と年間を通した評価

ア 単元における評価

「活用する力」の評価については二層に分けて考える。すなわち「単元における評価」と「授業全体を通した評価」である。「単元」は「活用を重視した単元」と「習得を重視した単元」の2種類で構成する。全単元にしめる前者の割合は約2割、後者は約8割である。今回の単元「アフリカ」は「活用を重視した単元」となる。また「授業全体を通した評価」については、「資料リテラシー」「書く力」の二つの能力で考える。「資料リテラシー」は社会科固有の能力であり、「書く力」は教科を超えた、あるいは教科の基盤となる能力である。

今回の単元における評価規準、評価方法について図1に示す。定期テストだけでなく、レポートやワークシート、1000字提言文等を利用して評価する。知識・理解については、ペーパーテスト（定期テスト）を利用する。その他の観点については、生徒の記述内容を評価する。「概ね満足である」「すぐれている」「基準を満たさない」の3段階で評価し、評価情報を蓄積し、評定へとつなげる。

観点	観点ごとの評価規準	評価方法
社会的事象への関心・意欲・態度	統計グラフを読み解いたり、テレビ番組を視聴したりすることを通してアフリカの諸問題、グローバルな課題に関心を持ち、主体的に調べ持続可能な社会の実現に対する意見を構成することができる。	・課題探究レポート ・1000字提言文
社会的な思考・判断・表現	既習事項やアフリカに関する地理的・歴史的知識を活用しつつ、様々な資料から読み取ったことを解釈した上で、提言文(主張文)の形式にまとめることができる。	・1000字提言文 ・因果関係マップ ・200字感想文
資料活用の技能	地図や統計グラフ等を読解し、課題を予想したり、新たに発見したりするとともに、これらの資料を活用して仮説を設定し、課題を探究することができる。	・ワークシート ・アフリカデータブックの記述
社会的事象についての知識・理解	アフリカの貧困問題がどのような問題と関連づけられているのか、またこれらの問題の地理的・歴史的背景、社会構造を認識し、理解することができる。	・ワークシート ・定期テスト ・全体把握ツリー

図1 単元における観点と評価規準

イ 授業全体を通した評価

ア) 資料リテラシーを高める指導と評価—統計リテラシーと地図リテラシーに着目して—

授業全体を通して「資料リテラシー」を高めるための指導・評価を行う。本単元では、「アフリカデータブック」を作成し、資料リテラシーの向上を目指している。資料リテラシーに関しては、例えば、統計リテラシーや地図リテラシーがあり、図2、図3のような評価規準を定めている。このように、小学校3年生からの評価規準を作成することを通して、活用する力を高めるための、効果的な小中連携が進むものと考えている。

	小学3・4年生	5・6・中学1年生	中学2・3年生
事実認識過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事象を数量的にとらえ、統計で客観的、実証的に表すことができる。 ・ 統計グラフの数値をもとにして全体傾向を読み取ることができる。統計グラフを変化や大小等に対して予想を記述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計グラフから分かったこと、気付いたことを既習事項や知識と関連づけて記述することができる。 ・ 統計グラフを比較し、疑問点や矛盾点を記述することができる。 ・ 統計グラフから社会的意味を見出すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計データから背後の概念を読み取ることができる。 ・ 統計データを関連づけ、因果や対立、包含等の関係を読み取り、記述することができる。 ・ 社会事象を説明するために統計グラフを選択することができる。
概念探究過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計グラフから読み取ったことをもとにして説明することができる。 ・ 観察、調査したことを統計グラフに加工して、読解し、説明することができる。 ・ 統計グラフの変化の傾向から将来の予測を立てることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計グラフに対して他者の読み取ったことを取り入れて、より深い気付きを導くことができる。 ・ 複数の統計データの傾向から、より高次の、また次元の異なる本質的な特性の読解へと発展させることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計グラフを批判的に読み取ることができる。確かな統計データを選択して探究することができる。 ・ 統計データからその背後に潜む本質や仕組みを導き出し、モデル化（定式化）を通して、他の事象に適応して説明することができる。
意思決定過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計グラフから読み取れることを分析し、統計的探究プロセスを生かし課題を設定することができる。 ・ 考えたことをまとめる際に、統計グラフを引用することができる。 ・ 作成したアンケートを利用し、自分の主張を構成することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 統計データから課題を構成することができる。 ・ 複数の統計グラフを比較し、読み取ったことをもとに、筋道を立てて論述することができる。 ・ インターネットのデータを収集し、課題を探究することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意思決定のために、説得力のある複数の統計データを使い、論理的に表現することができる。 ・ 提案力を高めるため複数の統計データを使い、他者と合意を形成しながら、共同して論理的な主張文を執筆することができる。

図2 統計リテラシーの評価基準（スタンダード）

	基盤形成期カリキュラム (小学3・4年生)	基礎充実期カリキュラム (5・6・中学1年生)	発展期カリキュラム (中学2・3年生)
事実認識過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校から家まで、また学校近辺の場所で観察したことを点や線に記号化し、自分なりに地図を作成し、まとめることができる。 ・ 身近な場所の土地利用（住宅・商店・工場等）の様子について観察したことを文章で記述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新旧の地図を比較し、関連づけながら地域の変化の様子や予想される理由について記述することができる。 ・ 地図や空中写真、景観写真を読み取り、自然的、人文的特色記述することができる。略地図を描き、整理することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 縮尺の異なる地図を比較することを通して、読み取ることができる内容を整理し、地域の特性について記述することができる。 ・ 主題図と一般図を併用し、地域事象や地域課題、地域間の結びつき等について記述することができる。
概念探究過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場所の観察をもとに、農業や工業のさかんな地域の分布の特徴について記述し、その原因や理由について調べ、地図を用いて説明することができる。 ・ 身近な地域で問題になっていることについて、地図を作成して表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 協同的に多様な地図を読解し、分布や土地利用の変化の原因や立地条件について主題図を作成して説明することができる。 ・ 分布図等の主題図を作成し、分布や立地の理由や条件について複数の主題図を活用し、説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境問題等、自然的現象と人文的現象が相互に関連する地理的課題について、地図と文章を使って説明することができる。 ・ 南北問題等の国際的な経済的課題、民族問題等の政治的課題について、地図を通して空間的な因果関係を説明することができる。
意思決定過程	<ul style="list-style-type: none"> ・ 調査体験を通して気づいたことや地図を読解して気づいたことを関連付けて整理することができる。 ・ 主題図を作成し、それを使って自分の考えを述べることができる。 ・ 総合的学習で調べた内容について地図を利用して整理し、発表することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ルートマップを用いて野外観察や野外調査の計画を立てることができる。野外で収集した資料に基づき課題を探究することができる。 ・ 地理的課題に対する主張と根拠を明らかにしつつ、地図も活用して、主張文（意見文）を構成し、論述することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資源エネルギー問題、人口問題に関して、地図化することによって空間的次元から課題を整理し、政策上の提案をすることができる。 ・ 現代社会における地理的課題について、論理的な主張を構成するために地図を利用することができる。

図3 地図リテラシーの評価基準（スタンダード）

本単元では、以下の項目を重視した授業構成をこころがけた。

○統計リテラシー

- ・複数の統計グラフを比較し、読み取ったことをもとに、筋道を立てて論述することができる。

○地図リテラシー

- ・地理的課題に対する主張と根拠を明らかにしつつ、地図も活用して、主張文（意見文）を構成し、論述することができる。

イ) 書く力を高める指導と評価—記述・説明・主張に着目して—

「学習指導要領解説・社会編」では、「改善の基本方針」として、「各学校段階の特質に応じて、習得すべき知識、概念の明確化を図るとともに、(中略)各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する方向で改善を図る」とある。本校では図4のように、記述、説明、主張をキーワードに、これらの書く力を高める指導方略を段階的、系統的に高めていく。このような表を下敷きにし、書く力の柱となるスタンダードを仮説的に策定する作業を進め、評価活動に生かしていく。

	基盤形成期 (小学3・4年生)	基礎充実期 (5・6・中学1年生)	発展期 (中学2・3年生)
記述	<ul style="list-style-type: none"> ・社会見学等で、対象を詳しく観察させ、気付いたことや疑問に感じたことをカードに数多く書き出させ、一定の視点から分類させる。 ・取材ノートを作らせ、インタビューして分かったことを書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・野外調査において、詳細に観察したことや聞き取ったことを地図に記録し、記述させる。 ・一つの事実がどのように伝えられているかを複数の新聞記事で確かめ、その異同について話し合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新聞のニュースをもとに政治、経済、国際関係等のできごとに関するキーワードを抽出させる。 ・身近な地域における諸課題について、福祉や環境等の視点から発見したことを、記録させる。
説明	<ul style="list-style-type: none"> ・資料から読み取ったことを既習事項や知識と関連づけて説明させる。 ・「つまり～」という表現で、見たこと、調べたことを説明文の形で書かせる。また、「例えば～」の表現で事例を挙げる練習をさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・関係図や模式図、概念図等を通して、知識や概念の関連性についてまとめ、構造化させる。 ・全体としてどのような広がりをもった問題であるのかを解説記事をモデルに文章で説明させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会事象の多様な関係（因果・対立・包含・階層等）を、知識と資料をつき合わせながら解釈させ、説明（記述・図解）させる。 ・学習内容と実生活、実社会とを往還的に説明させる。
主張	<ul style="list-style-type: none"> ・「～によると」等、資料を引用し、根拠にしなが、考えを書かせる。 ・体験したことがらや集めた資料と自分の意見を分けて書かせる。 ・相手意識や目的意識を持たせ、主張したい点が明確な文章を書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対する予想や仮説を明らかにしてから複数の資料を収集し、それらを引用して意見文や主張文を書かせる。 ・図表やグラフなどを読み取り、それらを使い、新聞の社説をモデルにして、目的に沿った主張文を書かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会的課題に対して当事者としての自分の在り様、生き方をふまえたより説得力のある主張文を書かせる。 ・他者の立場を想像し、その立場からどのような主張が導き出せるかを予想し、合意点を探らせる。

図4 各発達段階における「書く」指導のあり方

(2) 授業における評価の実際

ア 概念探究過程－「ツリー」と「マップ」の作成－

ア) 貧困とはどのような問題なのか？

－実態を把握する－ (2時間)

アフリカの貧困の実態や現状について統計資料の読解等を通して「全体把握ツリー」を作成させる。アフリカにおいて貧困が紛争や飢餓、感染症、平均寿命等にどのような影響を及ぼしているか、また貧困が社会をどのような状況に陥れているかについて予想し、問題点について考えさせていく。



「貧困問題とは例えばどのような問題なのか?」「どういったことが起こると考えられるのか?」「どのような問題と関連付けられているか?」というテーマについて、B4の用紙にキーワードと矢印を使って発想や発見を広げていくという学習活動である(図5)。資料(アフリカデータブック)をもとに、「国全体」「地域社会」「個人・家族」の三つの視点から図解させる。この図解の評価については、「国全体」「地域社会」「個人・家族」の三つの視点からキーワードを選択しているか、キーワードの量(30個以上が基準)と内容(既習事項の活用)、「国全体」「地域社会」「個人・家族」の 카테고리を超えた関係を発見しているか等の観点でみる。

作業を終えた後、作成した「全体把握ツリー」を見て、考えたことを200字で書かせた(図6)。図キーワードの量(発想の広がり)や200字の文章の内容をもとに評価する。下線部にあるように、発想の広がりとともに貧困問題の複雑さ、解決の困難さが認識される。貧困をめぐる社会の構造的な問題に対する認識が深まっているかどうかを評価する。

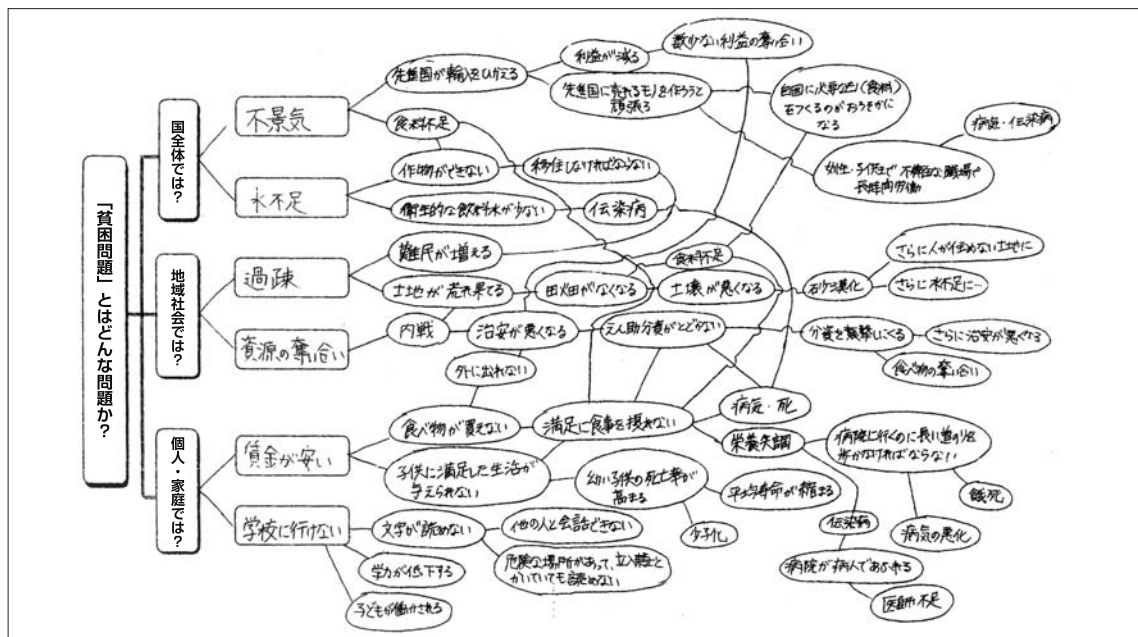


図5 全体把握ツリー (生徒作品)

貧困問題とはどのような問題なのか？

- 貧困問題とは、国、地域社会、個人等が貧しくなることで起きる問題です。例えば、国全体での貧困は、まず、経済や貿易にダメージを与えます。そして、そのようなダメージは、次の国に住んでいる人々の生命に悪影響を与えます。そうして、餓死者などが増えると、働き手が減り、経済にダメージを与えます。このように貧困問題とは、なかなか脱け出せない問題です。
- 何か一つ起こると、そこからどんどん、いろいろな問題が続いていって、悪循環になっている。食料が不足し、人口が減少したりして、貧困問題が原因で、国が一つ減りかねない。これは、一つの国ががんばったところでどうかなるような問題じゃなくて、世界が貧困をなくそうとしないと、どんどんひどくなっていくだけ。先進国の人たちは、もっと貧困問題について知っていくべき。いつか世界に広がりかねない。
- 貧困問題は、自然によるものや人が起こしたものなど様々だ。例えば、砂漠化や干ばつ、内戦によるものなどもある。自然によるものは、防ぐことは難しいけれど、人の起こしたものは防いだり、改善したりすることができると思う。だから、貧困問題は私たち一人ひとりが真剣に取り組めば、無くすことができるものだと思う。また、世界全体で考えていかなければならないものだと思う。

図6 生徒が書いた200字感想文（下線部は筆者）

イ) 貧困の本当の原因は何か—原因を究明する—（2時間）

全体把握ツリーの作成のあと、「因果関係マップ」に取り組ませる。極度の貧困問題が発生する背景や仕組み、解決が進まない原因について等、複雑な因果関係について資料を読解しながら図に表現していくという学習活動である。

方法としては、キーワードと矢印を使って、ウェビング状に図を展開していく（図7）。問題解決に向けて貧困問題の原因や背景を階層化しつつ、「なぜ?」「どうしてか?」を幾度も繰り返しながら何が重大な原因になっているのかについて探らせていく。

この図解の評価については、選択したキーワードの量（30個を基準）と内容（既習事項の活用）、キーワード間の関連づけの量と質（矢印の向き、矢印の使い分け）、上位概念の抽出等の観点でみる。多様なキーワード間の因果関係について多面的・多角的に考えているかどうかを評価する。

作業を終えた後、作成した「因果関係マップ」を見て、考えたことを200字で書かせた（図8）。アフリカにおける貧困問題がどのような関係の中で生じ深刻化してきたのか、いかに解決が困難なのかということについて、学んだ知識を活用して書いているかどうかを評価する。因果関係マップを用いて貧困問題の原因についてグループ（4人）で発表しあい、相互に評価させる。このような相互評価の場を通して、自他の考えを比較させ、新たな発見を促すことができる。

生徒の文章には「悪循環」、「繰り返し」、「地球単位（の問題）」といった表現が見られる。ある事象の結果が他の事象の原因となり、その結果が、もとの事象の原因にもなっているといったことが生じていることに気付くようになる。

図解作業によって因果関係が複雑に入り組んでおり、この問題の根の深さ、深刻さを認識していることがわかる。

このことは、ある問題の解決方法が別の問題を引き起こしてしまうというジレンマへの気付



グループでの相互評価活動の様子

きへとつながり、短期的で部分的な解決策が必ずしも長期的、全体的な解決につながるわけではないという問題意識へと発展していくものと考える。

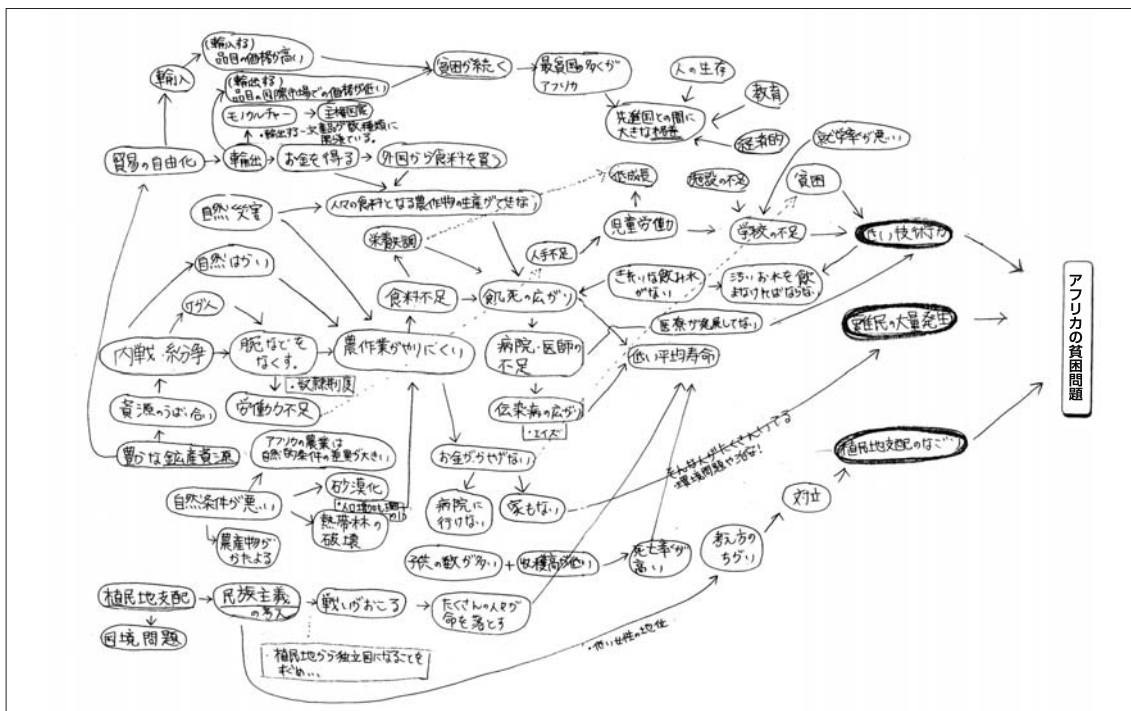


図7 因果関係マップ (生徒作品)

貧困問題の原因は何だろう？・なぜ解決が難しいのだろうか？

- 貧困問題は、国家がちゃんと機能していないことからの連鎖反応によるものが原因だと思う。国の発展が進まないから自立ができず、食料不足や治安が悪化していることなどが考えられる。これらの原因にも戦争による軍事費の増加などが絡んでいる。また、なぜ解決しないのか。それは戦争であるし、就学率が低いということもあるが、国内が平和ではなく、貧富の差が大きいということではないだろうか。つまり、悪循環になっているのではないだろうか。
- 紛争や内戦が貧困問題の原因だと思います。なぜなら、紛争や内戦をすることで、土地が荒れて、農業のできない土地になってしまうし、人手が足りないのに、子どもは兵士として内戦、紛争に行ってしまうからです。それに、農業ができないことで、食料不足になり、また食料の奪い合いになり、紛争、内戦となるので、また土地が荒れるという、繰り返しとなっているので、なかなか解決しないのだと思う。
- 貧困問題の原因は数えきれないほどあります。たとえば、農業が砂漠化、異常気象のためできない、自国だけでは何もできないけど、お金がないために他の国にも頼れない…、と考えるといくつも出てきます。では、なぜ解決が難しいかというと、まず紛争や内戦が絶えないことが大きな問題です。それに発展途上の国はモノカルチャー経済が多いので、発展しにくいということもあります。これは地球単位で解決すべき問題です。

図8 生徒が書いた200字感想文 (下線部は筆者)

イ 意思決定過程－「1000字提言文」の作成

ア) 提言文（主張文）の評価

「貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために世界は何をすべきか？」について考えたことをもとに1000字で提言文（主張文）の作成に取り組みさせる。

文章の構想・構成にあたっては、以下の二点を示した。

- ①貧困問題の解決につながる重要度が高いものであること。
- ②実現可能性があり、具体的なものであること。

1000字提言文を作成するにあたっては、事前に構成メモ（図8）を作らせ、教師が内容を確認してから執筆に取り組みさせる。とくに、「既習の知識を活用しているか」「資料に基づいて記述しているか」について評価する。提言については、貧困の悪循環から脱け出すために、どのような仕組みを作ることが求められているかについて考えるように促した。

先述した「基盤形成期（小学3・4年生）」の段階を十分に踏まえた上で、「基礎充実期（5・6・中学1年生）」の達成基準をクリアし、さらに「発展期（中学2・3年生）」を目指させる。図9は生徒が書いた提言文である。おおむね構成メモに沿って文章を組み立て、記述している。

（3）評価結果の分析から

「活用する力」を育成するためには、多様な活用する場面を保障し、指導し、評価することが求められる。とくに記述・説明・主張のように、文章でまとめたり、考えたことを書いたりする機会を数多く設け、その内容を評価する。このことが「活用する力」の育成にも直接、つながっていくものと考えられる。評価結果の分析から今後重視したい指導のあり方について述べることにする。

○資料に基づいて考えたことを書く

資料を準備し、生徒には資料の内容を根拠にして書かせるように指導する。一つの資料の読解だけでなく、複数の資料を比較することが、考えを深める上で有効である。ただし、資料を与えたら質の高い解釈や説明ができるというものではなく、読解に習熟させ、レベルアップを図らなければならない。このような点からも子どもの発達段階に応じた評価基準やルーブリックを作成し、それに照らしつつ読解指導を計画的、継続的に進めていくことが望ましい。最初はメモ程度で気付いたことを数多く書かせる（「量」の指導）。次に重要な気づきを文章化させる（「質」の指導）。「ツリー（樹形図）」や「ウェービングマップ」を描くことも有効である。

○論理的な文章の型・モデルの提示

1000字の提言文（主張文）を構成させるために、一定の形式や型にのっとなって論理的な文章を構成させた。資料のデータや文章を引用させて記述することにより、論理的な記述力が身に付き、さらには論理的思考が高まったものと考えられる。

論理的な文章のモデルとして、新聞の社説等を読ませ、その構成を分析させた上で提言文を作成させる。提言文については、キーワード使い、短文で主張内容を組み立てるように指導する。このような指導は国語科とタイアップして行うことが望ましい。場合によっては国語科の教員に指導してもらうこともあり得る。

【アフリカと先進国の連携】A女

私は、貧困削減を達成し、持続可能な社会を実現するために「貧困国と先進国との連携」が重要だと思います。具体的には、先進国の企業と国家が手を組んで、アフリカ諸国に投資をするのです。例えば、アフリカに先進国の企業の工場を建てて、現地で部品などを生産することが、一番実現可能な“挑戦”だと思います。不景気なこの時代だからこそ、“新たな賭け”をするべきだと考えます。なぜ私がそう考えたのか？理由は三つあります。

まず一つ目は、アジアでの成功例があるからです。象徴は中国。中国は豊富な原料、働き手があり、土地をはじめ、何もかもが先進国と比べて安く手に入れることができます。それらによってモノが安く生産できるシステムが整っていて、今や「世界の工場」とも呼ばれています。アフリカもその「第二の世界の工場」として躍進できる可能性があるのではないのでしょうか。アフリカには原料、人手も十分そろっていて、ヨーロッパに近いこともあり、日本とアジアの生産地のような関係を築けると 생각합니다。

二つ目は、お互いが利益を得られるという利点です。現在、世界の国々がアフリカに救援物資を送っていますが、実際に届いているかは確かではありません。そうかと言って、国にお金を貸し付けるとなると、その国にも負担になります。ちゃんと返ってくるかも分からないので、両国にとって負担です。しかし、この考えがもし採用されれば、確実に両国が利益を得られます。企業は、低コストでの物品を手に入れられるし、アフリカの工場に働く人は賃金をもらえて、ある程度の生活は保障されると思います。

三つ目は、アフリカの工業の発展の起爆剤になれるということです。アフリカはこれによって技術力という利益も得られ、もしかするとそれを基盤にして、アフリカ発の大企業ができるかもしれません。すると、かつての日本のように急成長して、大きな主要国になってくるのではないのでしょうか。

私はこれらにより、アフリカを“第二の中国”にすることによって、貧困から脱出できると思います。最終的には景気を刺激して、急成長すると考えています。先進国にはお金や支援だけではなく連携をすることが大事です。環境問題や労働条件、人権問題などをしっかり考え、未来に向けた“次世代の世界の工場”をつくりあげてほしいです。

【生活環境を改善し、食料自給の援助を行う】I女

貧困問題の原因は「食の問題」だと思う。アフリカの地形、気候、歴史で、どうして飢餓や食料不足が起こるようになったかを考えてみたい。

発展途上国の食料事情は先進国と大きく関わっていると思う。アフリカに植林をし、農園を増やし、食料自給を援助すれば、持続可能な社会が実現すると思う。

理由として、第一にまず、飢餓や食料不足は一番の死亡の原因である。アフリカ大陸は遊牧民が多く、焼き畑農業やプランテーション農業を行ってきた。サハラ砂漠の南側では、サヘルと呼ばれる地域で降水量が少なく、気候も不安定である。何度も干ばつが起こり、大地は降水量不足で乾燥し、砂漠化が進んでいる。作物や草木は枯れて、家畜や人々が餓死する被害が起こっている。砂漠化の原因は土地利用にもある。人口増加による農地拡大で森林を伐採したり、土壌浸食や飛砂で土地が荒れてしまったりしている。砂漠化を防ぐためには、植林をして井戸やかんがい施設の開発が必要である。

第二に、アフリカは、列強の帝国主義により、ほとんどの国々が植民地にされてしまったことにある。独立後も旧支配国からの政治的、経済的支配が根強く残り、食料自給がうまくできていない。商品作物の輸出でお金を得て、外国からの食料を買うという経済のしくみをとっているため、人々の食料となる農作物の生産ができていないのも飢餓の原因である。また、一次産品が数種類に限られるモノカルチャー経済で、輸出する品目の市場価格が低いまま、輸入する品目の価格が高いと、輸出入の悪循環が起こり、貧困の原因となる。

第三に、アフリカでは民族や宗教の違いや経済上の不平等から内戦が起こり、道路や鉄道など生活に欠かせない施設が破壊され、国内の産物や外国からの援助物資が国内の隅々に行き渡らず、飢餓の原因となっている。

食料自給率の低い日本が発展できたのは、労働賃金の安いアフリカなどから原料を輸入し、製品を輸出する加工貿易を行い、世界との結びつきが強かったからだ。貧困の解決には資金が必要である。アフリカのかんがい施設の整備や農業技術の開発、内戦地域の政治の安定、緑化のための植林・食料輸送の整備には、青年海外協力隊員や専門家の派遣をし、先進国の理解と協力が大切である。

図9 1000字提言文（生徒作品）

○単元ポートフォリオの作成

単元を通して教師が配布した資料，ワークシート，生徒が書いた文章を，A4の紙ファイルに綴じさせるという方法で蓄積していく。このファイルは評価する際に提出させるとともに，生徒が提言文を作成する時に活用するように指導する。たとえば，1000字提言文の構想メモを作成する際に，自分が作成した，全体把握ツリーや因果関係マップや200字感想文等を参考にさせる。また仲間のファイルに綴じたプリントを参考にすることもできる。活用重視型単元においては，このようなファイル（ポートフォリオ）を作成し，評価で利用するだけでなく，生徒が相互に閲覧し合えるように工夫したい。

○一単位授業における活用の場の工夫

単発的に活用型単元を導入しても，活用の力はなかなか身につくものではない。一単位授業（50分）においても活用する場面を組み込み，計画的，継続的に活用の力を育ていきたい。活用の力は日常の授業の中でスパイラルに高めていくことが大切である。そのためにも，短時間でできる活用型学習のレパートリーを増やしていく必要がある。その際，①資料の読解をベースにすること，②言語活動を生かすこと，の二つを重視したい。

（井寄 芳春）

第2章 歴史的分野における「活用する力」の育成と評価

1 「活用する力」に関する歴史の先行実践分析と課題

本研究では、「活用する力」（以下、「活用力」と称す）の育成に対して二つの方向からアプローチする。一つは演繹的アプローチであり、もう一つは帰納的アプローチである。簡単に図示して説明しよう。

○演繹的アプローチ

活用力の定義→活用力育成の仮説→仮説に基づく授業設計→実践・評価（テスト）

○帰納的アプローチ

授業実践（授業計画）の分析→活用力育成場面の確定→活用力育成の論理の抽出
評価（テスト）問題の分析→授業構成の再現・分析→活用力育成の論理の抽出

本報告書の第I部では、主として演繹的アプローチにより、活用力の育成と評価の理論や方法を論じた。続くこの第II部では、帰納的な方法で活用力にアプローチする。具体的には優れた歴史授業実践と評価問題を収集・分析し、それぞれに込められた活用力育成の論理と手立てを抽出する。

ここでは、まず活用力の育成に深く関わる歴史授業として、第I部で言及した仮説応用型歴史学習と意思決定型歴史学習の二つに着目し、実践事例の分析を通してそれぞれの育成と評価の論理を探るとともに、課題についても明らかにしたい。次いで、日本とアメリカの中等歴史の評価（ペーパーテスト）問題を比較、分析し、評価の側面から活用力の育成方法について考察する。

（1）歴史授業分析

ア 仮説応用型歴史授業の分析－岐阜県総合教育センター「江戸幕府の成立と鎖国－宝暦治水工事を取り上げて－」¹⁾

仮説応用型歴史授業として、岐阜県総合教育センター（以下、岐阜県センターと略称）のホームページ掲載の実践事例から、西濃地区のN中学校第1学年における「江戸幕府の成立と鎖国－宝暦治水工事を取り上げて－」（全6時間、実践者不詳）を分析する。

ア) 岐阜県センターの実践の概要

○単元計画と主発問

第1次 江戸幕府の仕組み（3時間）

- ・江戸幕府は人々をどのように支配したのだろうか。（単元を通して考える課題）
- ・江戸幕府はなぜ多くの大名を264年間にわたって治めることができたのだろうか。
資料1「江戸幕府の大名支配」（①武家諸法度，②お手伝い普請，③参勤交代）
- ・人口の多くを占める農民を幕府はどのように支配したのだろうか。
資料2「江戸幕府の農民支配」（①慶安の御触書，②村のしくみと五人組制度，
③農民への負担）
- ・幕府の利益が減るのに、鎖国を進めたのはなぜだろう。

資料3「江戸幕府の鎖国政策」(①朱印船貿易, ②島原・天草一揆, ③キリスト教の考え方と朱子学の考え方)

第2次 江戸幕府と宝暦治水(1時間)

・どうして幕府は薩摩藩に治水工事を行わせたのだろうか。

第3次 江戸幕府の政治の特色がわかる新聞作り(2時間)

・江戸幕府の政治の特色をまとめよう。

○第2次の展開

<目標>

宝暦治水工事がどうして薩摩藩によって行われたのかを追究することを通して、江戸幕府の諸政策の目的や内容を地域のできごとの中で具体的につかみ、江戸幕府の政治の特色が厳格な支配体制の確立とそれによつて築かれた安定した社会にあることを理解できる。

<構成>

1 海津町歴史民俗資料館の特別指導員から当時の人々の様子について話を聞く。

・資料4「人物ファイル 海津町歴史民俗資料館 特別指導員 瀬古尹宏」

・資料5「寛延二年 石津郡本阿弥新田庄屋善七から笠松郡代への直訴状」

2 課題の把握と予想の交流

3 予想を基に調べ活動

・資料6「宝暦治水工事資料」(①薩摩義士顕彰館HP, ②宝暦治水HP, ③宝暦治水につくした平田鞆負, ④宝暦治水の概要, ⑤江戸時代と宝暦治水に関する年表)

4 全体交流

5 講師の話を聞き、予想の検証

・幕府にとって、薩摩藩は外様大名でありながら、貿易によって富を蓄えていた「警戒すべき、油断ならない存在」であった。(大名統制の視点)

・治水工事により、幕府財政の根幹をなす農民の願いに応えることができる。(農民統制の視点)

6 自己の考えをまとめる

7 自己評価をする

イ) 岐阜県センター実践の評価

○単元構成について

6時間の本小単元は、①江戸幕府の支配体制に関する基礎的知識「習得」の段階(1時・2時・3時)、②習得した知識を「活用」して、地域の出来事である薩摩藩による宝暦治水の背景・理由を予想・検証する段階(4時)、③学習したことを新聞に「まとめる」段階(5時・6時)で構成されている。「江戸幕府の成立と鎖国」という通史的学習を踏まえ、そこで習得した知識を地域学習に応用して知識・理解の定着を図る、仮説応用型活用力育成の単元構成といえるだろう。

○学習内容(内容知)について

ここでは第3次の学習内容としての説明的知識に着目しよう。全体交流の中での生徒の

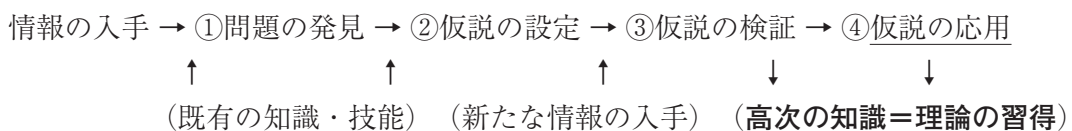
予想（教師の想定した予想）として示された意見は以下の通りである。

- ・幕府は、薩摩藩が命令に逆らえば改易することができる。命令に従えば、莫大な借金をかかえさせることができる。
- ・薩摩藩は特に貿易で利益を得ており、幕府にとってはそのお金を使わせる必要があった。
- ・薩摩藩の負担は大きいですが、幕府に逆らわないことを示すことで藩を守れる。戦国時代のように戦乱が続くような時代よりも、安定した世の中を願い、治水工事を受け入れた。
- ・海津の人々の生活が救われることは、農民の生活を安定させることでもある。幕府にとって、これも農民を統制するための政策であると思う。

幕府、外様大名（薩摩藩）、農民（海津の人々）という三者それぞれの立場から宝暦治水の意味を説明したものであり、最初の3時間で習得した江戸幕府の大名統制策と農民統制策に関する知識を活用して解釈した説明的知識といってよい。ただし、これらが知識の構造として目標に明示されず、形式的な評価規準を示すに留まっている。

○学習方法（方法知）について

学習方法については、単元全体が探究学習の過程に即しているが、特にここでは活用する力の育成の観点から宝暦治水工事を扱った第2次に着目したい。第2次もまた探究的過程からなっている。そこで、第I部で示した探究学習の学習モデルを手がかりに第2次を評価してみよう。



<解説>

- ①入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力
- ②知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力
- ③新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力
- ④複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力

上記の①・②・③は、第1次の各時間において、それぞれ幕府の大名統制、農民統制、鎖国政策に関して経験済みであり、それらを踏まえて第2次では④の仮説の応用の段階に入るといのが活用力の育成からすると望ましいプロセスであろう。

ところが、本実践の場合、せっかく第1次で江戸幕府の支配体制に関する説明的知識を習得させていながら、それを応用して宝暦治水を説明することより、海津町歴史民俗資料

館の特別指導員を招いたために、彼の話聞くことに重点がおかれるという結果となっている。生徒にとっては、自ら学んだ幕府の仕組みに対する知識を活用して地域の歴史事象を読解したという実感は乏しいのではないか。その点で、ゲストティーチャーの役割や位置付けをさらに工夫すべきであろう。

ウ) 改善の視点と方法

○単元構成の改善

本実践の主旨や教材を基本的に生かしつつ、上記の通りゲストティーチャーの位置付けを工夫するとすれば、次のような単元構成が考えられよう。

第1次の学習を踏まえ、第2次で宝暦治水を取り上げる。その際、この治水工事に関する事実については、資料5・資料6を通して確認させるが、あくまで本時の課題の探究に関しては第1次の説明的知識を動員して当たらせたい。その上で、特別指導員の話聞く方が効果的であろう。あるいは、第3次の新聞作りを終えてから、それぞれの新聞の発表会に特別指導員を招き、新聞の講評や事実の補足をしてもらうやり方もある。

○探究活動における仮説・検証の意義の確認

本実践では、なぜ疑問を中心とする課題について、生徒が最初は直観的に、次第に資料に基づき論理的に予想させる展開を想定している。これは活用力育成の点で重要である。しかしながら、最初から最後まで予想の段階に留まり、明確な仮説としての認識がなされていない。そのことが、最終的に証拠(資料)に基づいて検証することより、ゲストティーチャーのお話して確認するという展開を帰結していると考えられる。中学生であれば、予想を仮説に高め、確かな証拠で検証する学習過程を徹底すべきであろう。

イ 意思決定型歴史授業の分析－坂田和也「執権政治・承久の乱」²⁾

意思決定型歴史授業の優れた先行実践事例として、魚沼市立入広瀬中学校の坂田教諭の「執権政治・承久の乱」(4時間)を取り上げ、分析する。まず実践の概要を示し、次に評価及び改善の視点と方法を述べたい。

ア) 坂田実践の概要

○目標

承久の乱に関する朝廷側・幕府側の資料をもとに、承久の乱に際しての御家人の葛藤の追体験と友人との意見交換をしながら、当時の時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について、自分の考えを深める。

○単元計画と評価

<事前の学習>

「承久の乱における御家人の葛藤」を考える上で基礎・基本的知識となる史実の理解

第1時 「武士の起こりと院政」

→武士のおこりと台頭について、中央の政治との関連から説明できる。

第2時 「鎌倉幕府の成立」

→武家政治の仕組と朝廷との対立について理解できる。

<ワークショップ>

第3時 「承久の乱に関する朝廷側・幕府側の資料をもとに、御家人の葛藤の追体

験と友人との意見交換をしながら、自分の考えを深める学習」

<事後学習>

第4時 「朝廷側・幕府側双方からみた承久の乱の歴史的意義を考え、時代背景や乱の結果とそれ以降の鎌倉幕府の支配の確立と武家社会の展開について、より深く理解する学習」

→乱の結果、幕府の支配が西日本に及び、武家政治の基礎が確立されたことが理解できる。

○第3時（ワークショップ）の展開

1 本時の発問・課題の提示

「朝廷側・幕府側。どちらに従って戦う？－幕府の御家人の立場で考えよう！－」

2 ①資料1「後鳥羽上皇の院宣」と資料2「義時・泰時父子の会話」を読み解く。

②自己の考え（立場）を決定し、その理由を記述する。

③他の生徒と意見を交流し合う。

3 ①資料3「北条政子の訴え」を読み解く。

②自己の考えを問い直し、その判断理由を記述する。

4 ①朝廷側と幕府側に分かれて意見を交流し合う。

②最終的な判断（意思決定）を行う。

イ) 坂田実践の評価

○単元構成について

4時間の小単元は、①基礎・基本的知識の「習得」の段階（1時・2時）、②「活用」の段階－意思決定学習としての活用－（3時）、③「まとめ」の段階で構成されている。「武家政治のはじまり」という通史的展開の中に、1時間のワークショップ型学習を組み込み、そこで習得した知識の「活用」を図る単元構成といえるだろう。

○学習内容（内容知）について

学習内容（内容知）としての活用する力について、概念的・説明的知識、あるいは一般的・評価的知識が習得されたかで評価する。

<説明的知識>

・後鳥羽上皇は源氏の将軍が三代で途絶えたのを契機に朝廷に政権を取り戻そうとして院宣を出した。

・北条氏は執権として鎌倉幕府の政治を強化しようとして朝廷に対抗した。

・御家人の多くが領地の安堵（御恩）に対する奉公として幕府側についたため、朝廷側は敗北した。

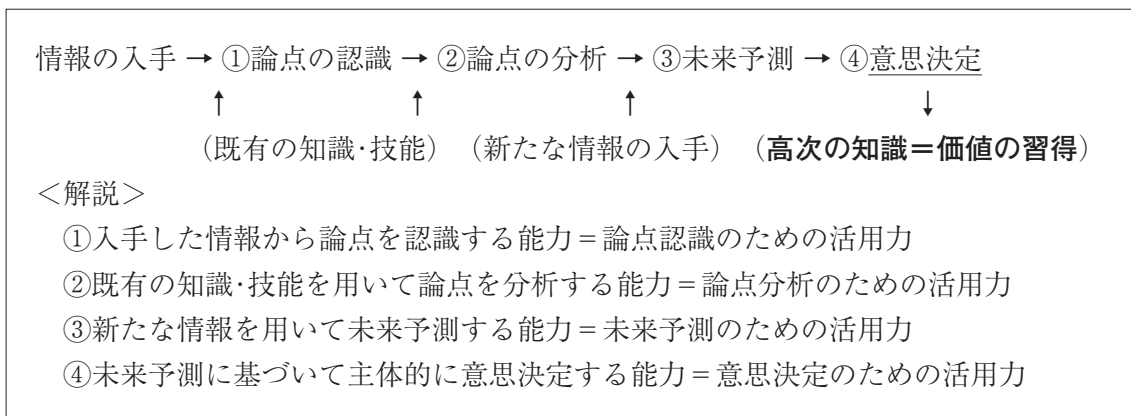
授業計画からは、上記の知識が資料の読み解きにより習得される仕組みになっている。それが習得されたかどうかは、各自の立場の判断理由から評価されるが、生徒の意見から判断すると、ほぼこれらの説明的知識が習得されたものと評価される。その点で、内容知

に関しては活用する力を育成する実践と評価されよう。

なお、評価的知識に関しては、御家人の立場に身を置いて意思決定を迫っており、特に評価的知識は想定してはいない。

○学習方法（方法知）について

学習方法（方法知）としての活用する力については、第3時のワークショップに着目したい。この時間の主発問・課題は「朝廷側・幕府側。どちらに従って戦う？－御家人の立場で考えよう！－」であり、ここから判断する限り、意思決定学習によって活用力の育成を図ることがねらいとされている。そこで、第I部で示した意思決定学習の方法に関する学習モデルを手がかりに評価すると、以下のようになる。



坂田実践の場合は、この学習モデルのように、情報の入手から意思決定までの各ステップ（①・②・③）が明確に意識されずに、生徒に任せっぱなしになっている。その結果、授業者自身も反省するように、御家人の立場からの意思決定にまで至らない生徒が多い。具体的にいうならば、それはどちらにつけば得か、勝敗の行方を根拠に判断するケースが多いという点に如実に現れている。

ウ) 改善の視点と方法

上記の分析を踏まえ、坂田実践を改善する視点と方法について、単元構成と授業設計の2点を中心に提起する。

○単元構成の改善

坂田実践のような、通史学習を前提にして、その中にワークショップ型の学習を組み込む方法では、意図した情報（承久の乱での御家人の立場からする意思決定に必要な情報）だけでなく、多様な過剰情報を習得することになるため、教師の想定した御家人の立場からする意思決定に焦点化しにくくなる。その結果として、ワークショップが単なる生徒主体の活動として受け取られがちだという課題が生ずる。

そこで、小単元そのものを、以下のように<①探究、②意思決定、③探究>の構成とすれば、この課題が解決できるのではないか。

- ①なぜ承久の乱は起こったのか？（後鳥羽上皇はなぜ北条氏打倒を図ったのか？）
- ②自分が御家人の立場だったらどうするか？
- ③なぜ承久の乱は失敗したのか、それにより朝廷と幕府はどうなったか？

○バックワードデザイン（逆向き設計）による授業設計

上記の単元構成を実施するためには、歴史の授業設計の考え方を転換する必要がある。つまり、教科書の構成に従って時間の順に学習を展開させ、結果的に一定の内容知を習得させようとする伝統的方法では活用する力は育ちにくいと考えられる。

そこで、ウィギンズとマクタイの提唱した「バックワードデザイン（逆向き設計）」³⁾の手法により、以下のような授業設計に転換することを提案したい。

- ①最終的に習得させたい「活用する力」としての内容知・方法知を設定する。
- ②それらの内容知・方法知を習得するに足る教材（資料）を収集・選択するとともに、学習活動を設定する。
- ③選択した教材と設定した学習活動から目標とする内容知・方法知を習得するための学習過程を、探究過程ないし意思決定過程として組織する。

（2）歴史テスト問題分析

ここでは日・米の歴史テスト問題を分析する。周知のように、評価の手段や方法は国により人により多様であり、また一単元内での評価の場面や対象も多様である。日本ではまだまだペーパーテストのウェイトが高いものの、アメリカでは近年オーセンティックな評価が注目されており⁴⁾、ペーパーテストによる評価の相対化が進んでいる。そうした評価のあり方については、第I部第3章の峯論文に譲りたい。ここではフォーマルな評価としてのペーパーテスト問題からも、活用力を育成する論理が抽出できるのではないかとの見通しの下に、日・米の歴史テスト問題を分析することにする。

ア 日本の歴史テスト問題

日本の中学校歴史的分野のテスト問題事例として、大阪府のK教諭の定期考査の問題を分析する。なお、K教諭は単なる高校入試対策のための授業を良しとせず、生徒の思考・判断を促す、言い換えれば活用力を育てる授業づくりに取り組んでいる。その意味で、K教諭のテスト問題からも一定の活用力育成の論理が導かれることを期待したい。

ア) テスト問題（部分）の概要

3 次の三つの資料をみて各問いに答えなさい

A

墾田は期限がくると、公地にされるため、農民の開墾意欲がわかず、一度開墾してもまた荒れ果ててしまう。今度は私有を許し、親子三代に限ることはやめ、永久に私有を認める。ただし、位によって墾田の広さに制限を設ける。

- (1) Aの法律名を答えなさい。
- (2) この法律がつくられた理由について、次の語句を使い説明しなさい。
【口分田 逃亡】
- (3) この法律のあと、私有地がふえています。この私有地のことを何というか。

B

私は平家をうつために、ある時はけわしくそびえたつ岩の上を、馬でこえ、

ある時は大海の風波をのりこえ、平家打倒のために戦ってきました。おかげで私も朝廷から、五位尉という高い地位をいただきました。源氏にとっては、大変名誉なことではないでしょうか。

- (1) この手紙を書いた人はだれか。
 - (2) この人が源平合戦で、平家をうつためにめに兵庫県で戦った場所を何というか。
 - (3) この人につかえた東大阪の武士の名前を答えなさい。(～氏)
 - (4) この手紙に兄の頼朝は怒りました。それはなぜですか。
- C 鎌倉幕府のしくみ(中央と地方の制度図, 省略) (侍所が空欄アに)
- (1) 将軍に対して家来になることを誓った人を何というか。
 - (2) 将軍と(1)の人とは何関係に結ばれていたか。
 - (3) (1)の人が奉公すれば、将軍は恩賞としての土地を与えました。このことを何というか。
 - (4) 右の組織図のAにあてはまる語句を入れなさい。

4 <論述問題>

「平安時代ってどんな時代だったのか」って問いにはさまざまな答が考えられる。次のような答が考えられるが、その中でもっとも適切だと考えられるものを選び、その理由を200字程度で書きなさい。

- A 貴族による政治の時代
- B 武士が発生し成長した時代
- C 日本独自の文化が生まれた時代
- D 政治から離れた仏教が生まれた時代
- E 東北地方が日本に組み込まれた時代
- F 律令政治が崩壊した時代

<解答例>F

奈良時代の特色といえは律令政治である。土地と人民が国のものになり、税金を納める制度が整った。しかし、この制度はじょじょに崩れ始め、平安時代になると私有地である荘園がふえてきた。寺や貴族が荘園をもつようになり、それが藤原氏が力をもつようになった要因であり、争いも増えた。そこから僧兵や武士も発生するわけであるから、平安時代でもっとも重要なことといえは、律令政治の崩壊であるといえる。

イ) 設問の特色

K教諭作成の定期考査問題に見る設問の特色を列挙すれば、以下のようなだろう。

- ①資料(系図・法令・手紙・組織図)を提示し、それを基に小問を構成している。
(問題1・2は割愛したが、いずれもリード文の空欄を埋める設問になっている。)
- ②正解(知識の再生)を誘導する設問形式が見られる。以下の設問がそれである。
 - ・Ⅲの③(藤原氏の行った政治を何というか)
 - ・ⅣのA(2)(法律がつくられた理由を、口分田、逃亡の語句を使って説明)

- ・ Bの(1) (問(4)に、この手紙に兄の頼朝は怒りました。とある)
 - ・ C(2) (将軍と1の人とは何関係に結ばれていたか)
 - ・ C(3) (1の人が奉公すれば、将軍は恩賞としての土地を与えた。これは何か)
- ③資料を提示しているが、資料の読解によらなくても既存の知識で回答できる(知識がなければ回答できない)問いが見られる。次の設問がそれに該当する。
- ・ Ⅲの②(藤原氏が勢力を持ってきた理由を述べさせる) →系図がなくても解答可能
 - ・ Bの(4) (この手紙に兄の頼朝は怒ったのはなぜか) →知識がなければ解答不能
- ④地域の歴史と関連づけた問いが見られる。
- ・ ⅣのBの(2) (兵庫県の源平合戦場)と(3) (義経に仕えた東大阪の武士)が、それに該当する。
- ⑤新学習指導要領を先取りした問いが見られる。
- ・ Vの論述問題→歴史的分野の内容「(1)歴史のとらえ方」のウ「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる。」と示された、いわゆる時代を大観する学習を想定した設問である。

ウ) 想像される授業

定期考査の性格上、そこでは対象となる一定期間内の授業内容の思考・判断や知識・理解が問われると考えられる。そこで、上記のテスト問題を基にして、K教諭の歴史授業を想像・再現すると、以下のようになる。

第一に、授業過程ないし学習形態としては、教師が資料を用いて説明する歴史授業が想像される。資料を提示した後に、問答形式で生徒を指名して、資料を音読させたり解釈させたりする場合も想定される。

第二に、歴史授業のねらいとしては、歴史の展開(流れ)を理解させ、時代の特質を大づかみさせようとする歴史授業が想像される。その理由として、重要語句の理解を重視するとともに、時代の特質をいくつかのキーワードで概括することを重視するテスト問題が挙げられる。

第三に、歴史教育の内容構成については、教科書(学習指導要領)に即して日本史の通史的内容を教えながらも、適宜地域の歴史を織り込んで、日本史の全体像に迫らせようとする方法が挙げられる。無論、そうした構成方法には、地域の歴史事象を取り扱うことで生徒の歴史学習に対する関心・意欲を高めようとする意図もあろうが、それ以上に教科書等の学習で習得した知識(中央史の知識)を活用して、同時代の地域の出来事(地域史)を説明する授業を可能にする点で、先に分析した岐阜県総合教育センターの授業実践と同様に評価されよう。

以上の三者-①資料の読解、②キーワードによる時代の特質の概括、③教科書的知識の地域史への活用-は、活用力を育成する上で重要だといえよう。

イ 米国の歴史テスト問題

米国の中等歴史テスト問題は、各州のスタンダードテストや大学進学希望者のための全国共通試験SAT(Scholastic Assessment Test)Ⅱを想定しており、大半の教科書が各章・節毎に想定問題を掲載している。ここでは、Prentice Hall社のアメリカ史の教科書⁵⁾から、第一次世界大戦後から第二次世界大戦終結までを扱う「単元8:繁栄、恐慌、そして戦争」

の想定問題を取り上げ、分析する。

ア) テスト問題の概要

- 1 次のニューディール政策の内、目標を正しく説明しているのはどれか。
A TVA：新たな恐慌を防止する
 B WPA：失業を減らす
C CCC：農民を救済する
D FDIC：産業の復興を促進する
- 2 引用文とあなたのもつ社会科の知識を活用して、次の問いに答えよ。

「砂浜には戦闘のために費やされた多量の兵士と武器が横たわっていた。それらは今や永遠に失われた。しかし、我々にはまだ余裕がある。……なぜなら我々は前進中であり、足がかりを保持しており、そして我々の背後には、砂浜の残骸の膨大な代替物があるからである。」（アーニー・パイル『勇敢な男たち』改作）

上記の文章で、パイルはいかなる出来事の後を記述しているか。

- A パールハーバーの爆撃
 - B ミッドウェーの戦い
 - C Dデイ（ノルマンディ上陸）
 - D 広島への爆撃
- 3 1920年代に導入された国別移民割当て制度の主な目標は何であったか。
A 移民の流入を終わらせる
 B 移民の出所をコントロールする
C 労働組合のストライキ突入を防止する
D 労働組合の会員資格を制限する
 - 4 次の内、第二次世界大戦の経済的帰結ではないのはどれか。
 A 消費物資の生産増加
B ガソリンとゴムの配給制
C 税金の上昇
D 大恐慌の終結
 - 5 地図とあなたのもつ社会科の知識を活用して、次の問いに答えよ。

地 図（黄塵地帯と旱魃・土壌浸食地帯を示す）（省略）

次の内、この地図によって最も支持される説明はどれか。

- A 最も深刻な黄塵の嵐がオクラホマ州を襲う
- B 旱魃や黄塵の嵐はカリフォルニアには全く衝撃を与えなかった

- C 土壌浸食はカンザスやネブラスカでは深刻な問題であった
- D 大恐慌期に10の州が旱魃や土壌浸食に襲われた

6 次の内、自動車の大量生産の帰結でないものはどれか。

- A 自動車の価格が購入できる程度になった
- B 新しい大衆文化の創造を促した
- C 他の産業の成長を刺激した
- D 農村人口の減少をもたらした

7 グラフとあなたのもつ社会科の知識を活用して、次の問いに答えよ。

グラフ（1930-40年の連邦予算－収入と支出－の推移）（省略）

このグラフが最もよく例証しているのは何の増大か。

- A ニューディールの結果としての超過支出
- B 株式市場の崩壊が経済に与えた衝撃
- C ニューディール下での政府による経済規制
- D 連邦予算に関する第二次世界大戦の影響

8 「1920年代の作家はアメリカの伝統的価値に対してしばしば批判的であった。」

次の内、この一般命題に最も当てはまるのはどれか。

- A シンクレア・ルイスは小さな町の生活をからかっていた。
- B ラングストン・ヒューズはアフリカ人であることへの誇りを表明した。
- C F.S.フィッツジェラルドは小説の多くに生意気な小娘を登場させた。
- D ヘミングウェイの素朴で力強い書き方は新世代の作家に影響を与えた。

9 次の二つの出来事の内、第一の出来事が第二の出来事の直接原因となったのはどれか。

- A 日本の真珠湾攻撃 第二次世界大戦の開始
- B 英仏の対独宣戦 ヒトラーのポーランド侵入
- C 大西洋憲章の調印 合衆国の対英支援
- D ホロコーストの露見 ニュルンベルク裁判の開催

10 クーリッジ、フーヴァー、ローズヴェルトの経済観と経済政策を比較対照せよ。

11 「第二次世界大戦中、アメリカ人は個々の差異を棚上げして共通の目的のために行動した。」あなたはこの言明に同意するか、同意しないか、あるいは部分的に同意するか。理由とともにあなたの考えを答えよ。

イ) 設問の特色

米国のこの歴史教科書に見られる設問の特色を列挙すれば、以下のようになる。

- ①多肢選択型の問題が主で、一部論述式問題が出題されている。特に、多肢選択問題の回答群は四つで、きわめてパターン化された出題になっている。
- ②史料に基づく問題、地図を活用した問題、グラフを活用した問題を含んでいる。これは、他の単元の対策問題にも共通した傾向であり、スタンダード・テストやSAT IIの出題スタイルを反映したものといえよう。
- ③日本のように大問毎にリード文を掲げ、それについて小問で問うことはせず、一つ一つ問いが独立している。これも、スタンダード・テストやSAT IIの形式に準拠したものといえるだろう。
- ④問題文の形式に一定の規則性がある。それは、「引用文（地図・グラフ）と社会科に関する既存の知識を活用して、問いに答えよ。」といった出題に見ることができる。
- ⑤論述式問題にも一定の傾向がうかがえる。それは、他の単元の論述式問題を参照してみれば明らかであるが、例えば次のような傾向が指摘できる。第一に、社会科のスキルを活用させる問いである。具体的にいえば、「複数の政策を比較・対照させる」問いや、「ある政治家の主要な政策を列挙させた後に、その特質を一般化させる」問いである。第二に、一定の歴史的説明（判断）に関する言明を提示し、生徒に同意・不同意を問うやり方である。その際、同意ないし不同意の理由や根拠をあげて説明させるのも、注目すべき特色として指摘できよう。

ウ) 想像される授業

米国の場合、教科書制度はもとより教師にとっての教科書の位置付けが日本と異なり、一概に教科書構成やテスト問題から授業像を断定的に導くことは避けねばならない。おそらく日本以上に多様な歴史授業がなされていると思われるが、少なくとも以下のことは指摘できよう。

第一に、概念の理解を重視している点である。例えば、どの教科書にも各章・節の冒頭に「重要用語key terms」や「主要観念main idea」が記載されていることから明らかであろう。そのことから、習得した知識を活用して、歴史事象や時代の特質を解釈・説明させる授業方法が推測される。

第二に、資料（史料・地図・グラフ等）に基づいて解釈・説明することを重視している点である。つまり、概念の理解とともに、社会科のスキルを習得・活用できるように授業を組織していると考えられる。

第三に、歴史的な評価に関しては、一定の根拠に基づく生徒自身の判断（合理的意思決定）を求めている点である。これは、学習指導要領が「多面的・多角的な思考」や「客観的で公正な判断」の重要性をうたい、教師もまた生徒には何よりも正確な事実認識を期待し、主体的な意思決定を問わない日本との大きな異同といっていよう。

<注>

- 1) 岐阜県総合教育センターのホームページ「社会科、地理歴史科、公民科の部屋」

<http://www.gifu-net.ed.jp/ssd/sien/hyouka/syakai14/syakaiNtyu/syakaiNtyu/page001.htm>

- 2) 坂田和也「思考力・判断力を育てる中学校社会科授業の展開－資料の活用とワークシ

ヨップ型授業, 自己内対話・他者対話を通じてー」『教育実践研究』No.19, 上越教育
大学学校教育研究センター, 2009年, pp.57-62

3) Wiggins,G. & McTighe,J., Understanding dy Design, ASCD(Association for Supervision and
Curriculum Development) 2005

西岡加名恵編著『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書, 2008年

4) 峯明秀『Authentic Assessment概念に基づく社会科学習評価研究』(2005~2007年度
科学研究費補助金-基盤研究C-研究成果報告書) 2008年 3月

5) Davidson,J.W.,et al,ed.,The American Nation, Pearson Prentice Hall,2005, pp.804-805

(原田 智仁)

2 歴史的分野における「活用する力」を育成する授業提案

(1) はじめに

ア 歴史学習における授業設計の考え方

これまでの中学校における歴史学習の授業において、高校入試が控えているという理由などから、とにかく教科書の内容を消化することに重きが置かれる風潮があり、語句の解説や時代背景などさまざまな情報を限られた時間の中で理解させなければならず、どうしても教師主導の講義型の通史学習による授業になってしまうのが現状であった。

平成24年度から完全実施される学習指導要領において、中学校学習指導要領解説社会科編には、「我が国の歴史の大きな流れを理解させ、歴史について考察する力や説明する力を育てるため、各時代の特色や時代の転機にかかわる基本的な内容の定着を図り、課題追究的な学習を重視して改善を図る」とあり、また「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動や、各時代における変革の特色を考えて時代の転換の様子をとらえる学習などを通じて、歴史的事象について考察・判断しその成果を自分の言葉で表現する学習を行うようにした」と記され、身につけるべき知識を明らかにした上で何を理解させるべきかを示すなど、学習方略を明示して知識の活用を求めている。

これから子どもたちが社会で活躍するためには、PISA型学力で言われているとおり、連続テキストや非連続テキストなどを通して知識や技能を活用する力をつけていかなければ、変化の早い現代社会には対応できない。そのために、教員からの講義による知識の習得に重きを置いた授業ではなく、自ら学んで知識を習得し、さらにそれらを有機的に結びつける活用力が求められている。

本研究において、原田氏は、社会科の活用力について以下のように定義している。

- ① 社会科固有の内容知・方法知はともに具体的な内容に即して初めて習得され、活用されるものである。つまり内容の伴わない活用力はあり得ない。
- ② 社会科における活用とは、端的に言えば單元ごとに探究学習あるいは意思決定学習を組織し、前述の基本過程にそって学習を遂行することである。
- ③ それゆえ、社会科の活用力を育てようとするならば、具体的な題材に即して探究学習ないし意思決定学習を遂行するしかない。

そこで、歴史的分野における活用力を育成するにあたって、「歴史的事象を分析・解釈させる授業」や「時代（あるいは、ある決まった時期について）を解釈させる授業」を組み込んで、結果として知識や技能を習得させることをめざし、ただ単に語句を暗記して、一問一答形式の問題に対応できる力をつけるのではない、思考・判断したことを別のことにも活かせるような授業を構成したい。

ここで考えているのは、よくあるような数時間の知識習得のためだけの授業を行い、残りの数時間で活用の授業を展開するという授業ではない。1時間1時間の授業の中に、習得と活用の両方を組み込む授業を構成し、また1つの大きなまとまり（ここでいう單元）

においても、習得と活用の両方が入っているという授業をデザインし、毎時間大きな山に挑戦する学びのある授業を構成し、毎時間毎時間子どもたちの頭の中がフル回転で考えていく、探究していく授業の構成を考える。

以上のことを視野に入れ、歴史的分野において、この①～③をふまえて授業を構成するとき、以下の2つを入れた授業をデザインすることを考えた。

1つは、1コマの授業の前半で、どのようなことを習得させるのかを明確にして、すべての生徒に習得させる内容であること。

1つは、授業の後半では、習得した内容から発展的な課題を構成すること。つまり、ここで探究学習ないし意思決定学習を構成する。

このサイクルを1コマ1コマ繰り返し、さらに単元トータルとして、習得－活用のサイクルを回すことができるように構成することとした。

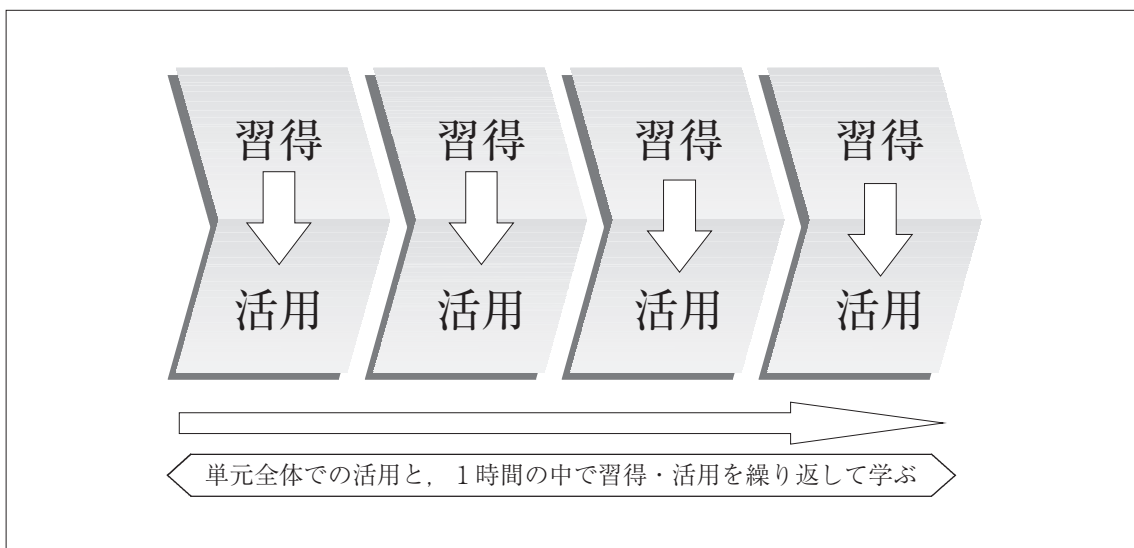


図1 本研究における習得・活用のイメージ図

イ 学習の方法について

日本の産業構造の変化により、学校における課題も変化し、この現状を克服するための1つとして授業を改善することが必要とされている。第13回近畿中学校社会科教育研究大会大阪大会での基調提案において、「今、教育現場で求められているのは、このような現状を現代社会の変化と課題に対応できるような『生きる力』や『人間力（知・徳・体）』の育成を目指す授業改善の取り組みであり、生徒が生活している地域や社会とつながり、生徒一人ひとりが主体となって『学び合う』という『関係性の構築』への取り組みである。すなわち豊かな心と社会性を培い、問題解決能力や自己教育力を身につけさせる主体性のある『学び』の学習が求められており、それに応じた生徒の生き方や価値観の揺さぶりをかける教育活動、学びを中心とした『授業改善』が期待されているのである。」と提案されている¹⁾。ちなみに、ここで言う「学び」とは、「学習するモノやコトと自分との対話」、「他者との対話」、「自分自身との対話」の3つからなっている。この3つを通して、今までの一方的な伝達・説明の授業によって、歴史的知識の習得、暗記をするということから、「活動的で、協同的で、探究的」な授業をしていくことによって、活用力が育成されると考えた。

したがって、本研究において活用する力をより高める1つの方法として、1コマの授業の中に必ず小グループにおける対話的活動を組み込んだ。対話的活動を組み込むことによって、個人の学びを豊かにすることができる。それは、授業の中で与えられたさまざまな資料に基づいて自己の考えができ、また、その自己の考えが他者の考えとのすりあわせの中で揺れ動かされ、最終的に自己の考えが確立されることにより、学びが深まっていくと考える。そのため、授業において、教室にはさまざまな資料を持ち込んだ。副教材として用いられる資料集も、一種類ではなく、各グループに数種類を用意し、それぞれの差異から考えられるようにした。そのことによって、学習指導要領でも求められている“多角的・多面的”に学習できるようにした。

(2) 歴史学習に関する授業モデル

ア 「江戸時代の財政はなぜ窮地に陥っていったのか

－徳川綱吉から松平定信までの経済政策を比べることを通して－

ア) 単元設定の理由

江戸時代中期以降の政治史については、享保の改革、寛政の改革、天保の改革の3つの改革を中心に江戸幕府が行った政策を学び、その成果と課題を問う授業が構成されてきた。しかし、江戸幕府の財政は5代将軍徳川綱吉の時代から財政難に陥っており、この時期から幕府の収入を増やすためにさまざまな政策が行われてきた。また、江戸時代中期では新田開発をはじめ農業生産が増加し、さらに商品作物の生産もあって、農村にも貨幣経済が浸透してくる時期である。そこで、今までの3つの改革を中心とする学びを捉え直し、徳川綱吉や田沼意次の政策も入れて、幕政改革について特に経済面を中心に捉え直したい。そして、それぞれの政策についてさまざまな資料からは是非を問い、さらには総合的なところから、幕政改革について考えさせたい。

イ) 教材分析

5代将軍徳川綱吉の政治について、教科書²⁾では、それまでの武断政治とはちがって、文治政治を行ったということ、また生類憐みの令を出したり、貨幣の質を悪くしたことで経済を混乱させたことが書かれており、どちらかというともマイナスのイメージを持ってしまっている記述になっている。

特に貨幣の質を悪くしたことについては、寺院の建設などに多額の費用をかけたため、幕府財政が悪化し、それを補うために発行したと書かれているが、それだけでは多面的だとは言いがたいと考える。なぜなら、1657年の明暦の大火後、3回も江戸で大火事があり、さらに1703年には関東に大地震、1707年には富士山の噴火など火災や自然災害に見舞われ、その復興費用も必要であり、また、17世紀後半には商品経済がさかんになり、年貢米の収入が減り財政難に陥ったこと。さらに、金・銀の産出量が減少し、貨幣経済が浸透してきた、貨幣の発行量が少なくなってきたことも原因として考えられる。つまり、徳川綱吉の時代は奢侈による財政逼迫という考え方で終わらせるのではなく、多方面から検討をして判断しなければならない。その判断できる資料がある程度そろっており、その資料を読み取らせることで、綱吉に対して一面的なイメージで終わるのではなくて、学習者それぞれのイメージをつくりあげていく。

同じように、徳川吉宗、田沼意次、松平定信の時代の改革にしても、教科書や中学生向

けの資料集でさまざまなことが書かれているが、それらの改革を一つずつ見ていって、その政策の善し悪しのみを判断するのではなく、前後の改革と結びつけて判断することによって、改革とはどういうことなのか、彼らが国を守るためにどのようなことに注意をしながら行ったのかということに迫っていきたいと考える。

この学習をすることによって、今日の日本の財政問題、さらには東日本大震災という未曾有の大災害をはじめ、さまざまな自然災害から復興に向けて取り組まなければならない状況において、この江戸時代の改革の歴史から学べることが多いのではないかと考える。

ウ) 単元の目標

- ①そのときの為政者が、さまざまな要因の中から、国を守るためにどのような政策を講じていったかを理解する。
- ②それぞれの為政者の政策について、その成果と課題を多面的・多角的に考える。
- ③改革には何が必要なのか、今の社会と比較しながら考察する。

エ) 指導計画 (全5時間)

	テーマ	学習活動	学習内容
第1時	なぜ徳川綱吉の時代に貨幣改鑄が行われたのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・徳川綱吉の時代の政治、経済、社会の動きを理解する。 ・なぜ徳川綱吉の時代に貨幣改鑄が行われなければならなかったのか、貨幣の改鑄によってどのような影響があったのかを多方面から分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国内外の平和と安定を背景に、それまでに武断政治から学問や礼節を重んじる文治政治へと変わった。 ・極端な動物愛護を定めた生類憐れみの令を出した。 ・佐渡金山、石見銀山、生野銀山などが開発されそこから産出される金銀から貨幣がつくられた。 ・金貨、銀貨は重要な輸出品となった。 ・貨幣経済の発達により多くの金銀が必要になった。 ・多くの金銀が必要になる中で、産出量が減少し、幕府の収入が少なくなった。 ・明暦の大火や富士山の噴火、寺社の造営など、多額の支出があり、質の悪い貨幣を大量に発行して切り抜けようとした。 ・耕地面積の拡大や農具の改良などにより米の収穫量が増えていった。 ・商業の発達により、両替商も現れ貨幣経済が浸透していった。 ・商品作物の栽培が一層盛んになり陸路や水路の開発も行われた。
第2時	なぜ享保の改革を行わなければならなかったのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> ・徳川吉宗の時代の政治、経済、社会の動きを理解する。 ・なぜ享保の改革を行わなければならなかったのかを多方面から分析する。 ・徳川綱吉、新井白石の政策を比較し、吉宗時代の成果と課題について分析する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・農業を中心として発展した生産活動が引き続き拡大した。 ・厳しさが続く幕府財政の立て直しを図った。 ・支出の減少をはかり、増収策を考えた。 <ul style="list-style-type: none"> →新田開発を進めた。年貢の増徴を行った。 →商品作物の奨励 ・米価は安定しなかった。 ・ききんが重なり、打ち壊しが起きるなど不安定になった。

	テーマ	学習活動	学習内容
第3時	なぜ田沼意次は商業の発達をめざしたのか。	<ul style="list-style-type: none"> 田沼意次の時代の政治、経済、社会の動きを理解する。 なぜ、田沼意次は商業政策を重視したのかを多方面から分析する。 徳川吉宗の時代の政策と比較し、田沼時代の成果と課題について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 年貢米の収入は頭打ちになり、米価の下落も加わって幕府財政はふたたび行き詰まった。 年貢米だけでなく、各地で発展しつつあった商品作物や商品の流通から得る利益に着目した。 商工業者たちの株仲間の営業権を認めて税を納めさせた。 長崎貿易の振興に乗り出し、俵物を輸出して、金・銀を輸入したりした。 大商人の資金を積極的に活用し、新田開発によって耕地を拡大させた。 蝦夷地の開拓にも乗り出した。 わいろが横行し、士風を退廃させた。 天明の飢饉、浅間山の噴火、関東・江戸の大洪水などの災害が相次いだ。 百姓一揆や打ち壊しが頻発した。 発展してきた商品生産・流通とそれが生み出す富に着目し、経済発展の成果を吸い上げて幕府の財源とし、財政問題の解決を図ろうとした。
第4時	なぜ松平定信は徳川吉宗の政治を理想としたのだろうか。	<ul style="list-style-type: none"> 松平定信の時代の政治、経済、社会の動きを理解する。 なぜ、松平定信は田沼政治を転換し、農業政策を重視していったのかを多方面から分析する。 徳川吉宗、田沼意次の政策と比較し、松平定信の政策の成果と課題について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 天明の打ちこわしがきっかけとなり、寛政の改革が始まった。 幕府の財政の立て直しのため、儉約令や棄捐令を出した。 商品経済の浸透により不安定化し、凶作・飢饉により荒廃した農村の復興をおこなった。 都市に出稼ぎに行くことを制限し、農村に帰ることを勧める法令を出した。 主穀生産を奨励し、農民が商業に携わることを抑制した。 ききんに備えるために、囲い米をおこなった。 田沼時代末期の危機的な状況を乗り切った。 一時的に幕政を引き締め、幕府財政の均衡を回復して幕府の権威を高めた。 あまりにも厳しすぎたため、民衆の反発をかった。
第5時	徳川綱吉、徳川吉宗、田沼意次、松平定信の4人から一人を選び、その改革について他者の改革を比較しつつ、自分の見解について述べよう。	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの人物が生きていた時代の社会背景を理解した上で、一人の人物を挙げ、その成果と課題や、改革するには何が必要なのかを自分の言葉でその見解を述べる。 	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの改革には、政策者の人物像がはっきり現れている。 為政者には、現状に対する課題認識、未来に対する展望、そして、どのような批判があろうとも、意志を貫く姿勢が必要である。 それぞれの改革は、結果として失敗に終わったとしても、現状をいかに打破するかという点において、しっかりと練られた政策を出している。

オ) 展開例

第1時の展開例

	生徒の活動	形態	予想される生徒の考え 教師の支援等
導入	<ul style="list-style-type: none"> 徳川綱吉の絵を見せて、イメージする。 金貨（慶長金銀と元禄金銀）の比較をする。 	一斉	<ul style="list-style-type: none"> どうして、このような金貨が発行されるのか。 「なぜ？」と疑問を持たせるようにしていく。
展開Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> 徳川綱吉の生誕から没までの年表をワークシートにしたがって作成し、この時代の大まかなできごとを理解する。 	対話的活動	<ul style="list-style-type: none"> わからないところがあれば、資料等で調べさせるか、グループの仲間に訊くように指導をする。
	ワークシートの中からわからないところを全体で補充する。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 綱吉時代の大きな流れについて把握させる。
展開Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> どうして貨幣改鋳を行わなければならなかったのか。 貨幣改鋳が世の中にどのような影響があったのかについて資料を基に追究する。 	対話的活動	<ul style="list-style-type: none"> 資料等を見ながら、仮説を立てて検証を行う。その際、グループで自分たちの考えのすりあわせを行わせる。
	対話的活動で考えたことを全体場で共有し、検証を行う。	一斉	<ul style="list-style-type: none"> 資料集等根拠を持って発言をするように促す。
まとめ	今日、学んだことをワークシートに記入する。		

カ) 第1時のワークシート①

年代	幕府のできごと	世の中のできごと
1646	出生	
1657		明暦の大火→江戸の大火事
1680	五代将軍となる	
1682		江戸の大火事
1683	武家諸法度を出す 「文武忠孝を励し礼儀を正すべき事」 → () 政治を行った	
	() を出す	
1685	→動物をたいへん愛護した 貨幣の改鋳を行った	
1695		
1698		江戸の大火事
1703	死去	江戸の大火事
1707		富士山の噴火
1709		

★なぜ徳川綱吉の時代に貨幣の改鋳を行わなければならなかったのか

★貨幣の改鋳を行ったことで、どのような影響があったのかを考えよう。

★今日の授業でわかったこと、わからなかったことを書きましょう。

ワークシート②

① 財政の悪化

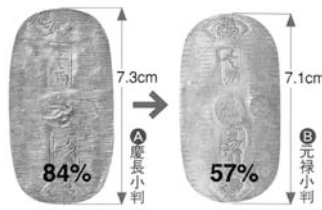
	収入(両)	支出(両)	収支(両)
1684年ごろ	1,169,500	883,000	+286,500
1694年ごろ	1,165,500	1,274,550	-109,050

赤字になった原因

- ・金山の採掘の減少
- ・寺社の造営や豪華な建物の建造などによる出費の増加
- ・人件費の増加

(『歴史資料集』新学社, p.90より)

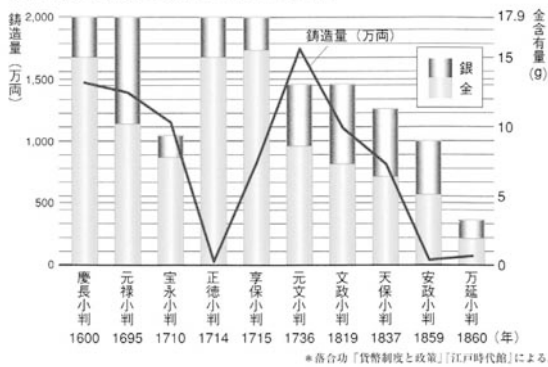
② 貨幣の改鑄(%は金の含有率)



(写真: 日本銀行金融研究所貨幣博物館)

[解説] 3代将軍家光のころまでは幕府財政には余裕があった。しかし4代家綱, 5代綱吉の時代, 明暦の大火後の再建費用・大名への貸付金, 寺社の造営費用などで財政は悪化した。

貨幣改鑄と小判の鑄造量と金含有量の変化



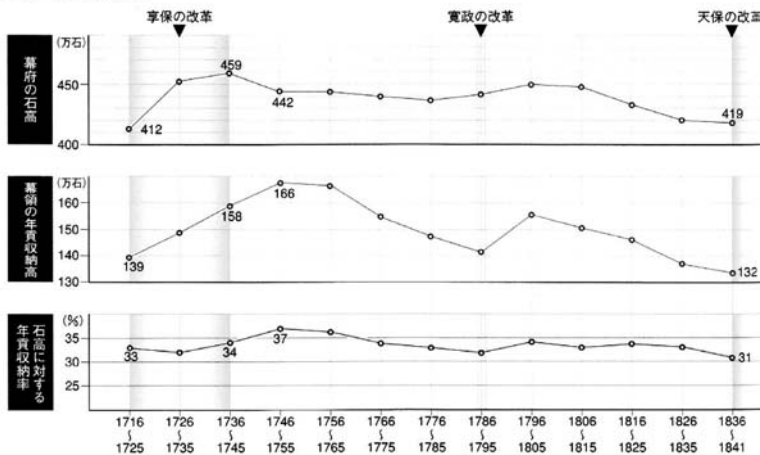
[解説] 改鑄と経済成長の関係

同じ1両の小判でも, 金の含有量には大きな違いがあった。正徳・享保期を例外として, 金の含有量は減る一方であった。浮いた差益を幕府の財政難解消に用いることも繰り返された。

元禄期の貨幣改鑄は, 経済成長による通貨不足を補う必要性から考えられたものである。その結果, 流通経済がいっそう発展し, 元禄文化を育むこととなった。逆に, 正徳・享保の改鑄は通貨流通量の縮小を招き, 大不況をもたらした。

(竹内誠監修・市川寛明編『地図・グラフ・図解でみる一目でわかる江戸時代』小学館, p.17より)

石高・年貢高の推移



[解説] 享保の改革では年貢の増収に成功し, 財政は黒字に転じた。石高の増加以上に収穫高が増えているが, これは年貢率の増加によるもので, 農民に過度の負担を強いるものであった。そのため, 百姓一揆などが多発し, 改革の成果は長続きしなかった。享保の改革に倣った寛政の改革も, 一時的な成果をあげただけだった。

(竹内誠監修・市川寛明編『地図・グラフ・図解でみる一目でわかる江戸時代』小学館, p.107より)

キ) 第1時の授業の分析

徳川綱吉の政策について、年表形式でまとめさせることで、おおまかな把握をすることができた。生類憐みの令だけにこだわらずに、経済政策に視点を置かせるため、この説明は簡単に済ませて、貨幣改鋳を中心とする経済政策に取り組ませるようにした。生徒たちは、はじめに小判の比較をする所で、なぜ重さが違うと世の中が変わるのかというところに疑問を持ち、各自が持っている資料集やワークシートに記載されている資料などから仮説を立てた。その中で、貨幣を改鋳することで、お金の価値が従来のものとは低くなるから、物価が上がるのだという意見がグループの中からでるなど、貨幣価値と物価との関係を正しく認識することができたと思う。

(3) 成果と課題についての考察

ア 成果について

ア) 「興味を引く」課題設定ではなく「興味がわく」課題の設定

どの時間でも「なぜ」という疑問がでるような課題設定を心がけた。「なぜ」という疑問を出すことによって、子どもたちはその疑問に基づいて追究をすることができる。

イ) 資料をどのように読み取らせるか

「なぜ」という疑問があり、それを追究する手がかりとしての「資料」は重要である。適切な資料を提示し、その資料に書かれていることを根拠にして自分の考え(仮説)を確立させることができる。

ウ) 貨幣価値と物価との関係の認識について

貨幣価値と物価との関係を教科書で学習するのは、3年生の公民的分野において経済学習においてである。しかし、子どもたちは、これまでの“生活経験”として、貨幣を使った生活を行っており、その経験的な知識によって貨幣価値と物価との関係を認識することができた。このことは、第一次世界大戦後のドイツにおける急激なインフレを理解することにも活用することができるだろうし、現代における世界の経済においても応用可能な理論を習得させることができる。

イ 課題について

ア) 授業者の「学ばせたい」ことと、子どもたちの「学びたい」こととの一致を

授業者は毎時間、「これを習得、活用させたい」という授業の“ねらい”をもって授業に臨む。そのために、どのような課題を設定し、どのような資料を使って子どもたちを学ばせるのかについて教材研究を行うわけであるが、授業者が「学ばせたい」内容に適した資料が見つからない場合が少なくない。資料が見つからないなら授業の軸を大きく変えなければならない。また、子どもたちが疑問を持つような資料の提示が必要である。例えば、それぞれの改革における狂歌をもとに授業を構成するなどを試みたが、他にも絵画を使用したり、時には高等学校で使用する史料集なども活用する必要があるのではないかと考える。

イ) 歴史における本当の意味での活用とは何か

今回の授業提案は、歴史を経済の側面から考えさせ、現代において応用、活用できるねらいがある。しかし、物価変動など経済のしくみは、先述したように3年生で学習する公

民的分野において設定されており，この授業が歴史の授業でありながら，貨幣価値と物価を理解させなければならず，ともすれば公民的要素の強い授業になってしまったのではないかと危惧する。その点において，歴史における本当の意味での活用とは何かを検証して行く必要があると考える。

<注>

- 1) 第13回近畿中学校社会科教育研究大会<大阪大会> 冊子
- 2) 堺市が採択している「新編新しい社会歴史」（東京書籍歴史709）による。

<参考文献>

- ・大石慎三郎『徳川吉宗と江戸の改革』講談社学術文庫，1995年
- ・大石慎三郎『田沼意次の時代』岩波新書，2001年
- ・笠谷和比古『徳川吉宗』ちくま新書，1995年
- ・鈴木浩三『資本主義は江戸で生まれた』日経ビジネス人文庫，2002年
- ・辻善之助著『田沼時代』岩波文庫，1980年
- ・藤田寛松平定信』中央公論社，1993年
- ・藤田寛『日本史リブレット 近世の三大改革』山川出版社，2002年
- ・藤田覚『田沼意次 御普請を蒙ること，身に覚えなし』ミネルヴァ書房，2007年
- ・村井淳志『勘定奉行 萩原重秀の生涯－新井白石が嫉妬した天才経済官僚』集英社新書，2007年
- ・渡辺尚志『百姓たちの江戸時代』ちくまプリマー新書，2009年

(佐古田 英樹)

3 歴史的分野における「活用する力」の評価計画と評価問題案

(1) はじめに－歴史的分野における「活用する力」の評価－

原田氏は、本研究において社会科における活用力を評価するにあたり、次のように述べている。

- ・社会科の活用力を評価しようとするならば、到達目標としての知識・技能を明示した上で、探究ないし意思決定の学習過程を具体的な授業計画書として構成し、そこに評価方法（評価計画）を記載することが望ましい。
- ・評価方法としては、授業過程でのワークシートやノート等のポートフォリオ評価の他に、目標とした知識・技能で用いたものとは別の事例の中から発見させたり、習得した知識や技能を応用して事象を説明・解釈させたりするテスト問題が考えられる。

本研究において、歴史的分野における評価を考えると、次の2つのことを意識した。

①知識・技能における評価

活用するために必要な歴史的事象がどの程度理解できているのかということと、図表などからの読み取りがどの程度できていたのかということ。

②探究ないし意思決定の学習の評価探究をしていくために、上記①をふまえて自らの“疑問”を出すことができたのか。

そして、その疑問を探究していくにあたって、上記①を根拠として活用できているかということ。

知識・技能における評価については、一問一答の形式になるのではなく、史料や図表の読み取りを通して知識や技能を評価するようにしなければならない。また、評価問題においてもそのような評価問題を作成しなければならない。

授業づくりの観点から、探究学習においては、「なぜ？」という疑問が学習者自らの中に出ることが望ましい。それは、学習者の側に立てば、「なぜ？」という疑問がわくことによって「学びたい」「探究したい」という意識が起こるのである。そのため、本時の授業、あるいは単元全体の中で、子どもたちが「学びたい」「探究したい」と思う「疑問」を出させるようなしかけ、つまり資料が大切である。そして、子どもたちが「学びたい」という「疑問」と、授業者が定めている「ねらい」とを一致させられるようにしなければならない。

そこで、2節で示した授業提案を元に、評価規準と評価の方法、評価問題について下記に示す。評価については、日頃の授業における評価（生徒の発言、ワークシート、ノートへの記載）と評価問題における評価の2つが柱となる。

(2) 授業提案「江戸時代の財政はなぜ窮地に陥っていったのか－徳川綱吉から松平定信までの経済政策を比べることを通して－」の評価

ア 活用する力の評価の観点について

峯氏は、単元における評価基準の基本形として、到達目標となる知識と技能の組み合わせを次のように整理した。

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識 (理論)	a 入手した情報をもとに問題を発見できる	b 知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定できる	c 新たな情報を用いて仮説を検証できる	d 複数の仮説を応用して総合的に説明できる
	⑤論点認識のための活用力	⑥論点分析のための活用力	⑦未来予測のための活用力	⑧意志決定のための活用力
一般的・評価的知識 (価値)	e 入手した情報から論点を認識できる	f 既存の知識・技能を用いて論点を分析できる	g 新たな情報を用いて未来予測ができる	h 未来予測に基づいて主体的に意志決定できる

図1 単元の評価基準の基本形

(本書28頁より)

この基本形をもとに、2節で示した授業提案について、第1時から第5時までの評価の観点（それぞれにおいて身につける活用力）を示すと下記の通りとなる。

第1時において

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識 (理論)	貨幣の改鑄によって幕府の利益が増えた一方で、物価が値上がりする事態となり経済が混乱したとあるが、理由はそれだけなのだろうか。	なぜ徳川綱吉は貨幣改鑄を行わなかったのかという疑問を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 寺社造営の費用がかさんだ。 ・ 非常に贅沢な暮らしをしていた。 ・ 幕府の財政が非常に逼迫していた。 ・ 貨幣経済の発達により多くの金銀が必要になった。 ・ 多くの金銀が必要になる中で、金銀の産出量は減少していた。 ・ 商品作物の栽培がいっそう盛んになっていた。 ・ 浅間山の噴火や江戸の大火などの事象も起こった。 	浅間山の噴火や江戸の大火、また寺社造営の費用がかさんだことにより、幕府の財政が非常に逼迫していた。また、貨幣経済の発達により多くの金銀が必要になった。そこで徳川綱吉は、貨幣の改鑄を実施し、金の含有率を下げることで幕府の利益を出そうとしたが、物価が上昇し、経済が混乱した。

第2時において

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識（理論）	徳川吉宗が出した政策の意味を知る。 ・公事方御定書 ・足高の制 ・上米の制 ・年貢率を上げる ・新田開発	なぜ徳川吉宗は農業中心の政策をだしていったのかという疑問を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・農業を中心として発展した生産活動が引き続き拡大した。 ・新田開発を進め、年貢の増徴を行った。 ・農業重視の政策をしたにもかかわらず、米価は安定しなかった。 ・「米価安諸色高」の状況となった。 ・ききんが重なり、打ちこわしが起きるなど社会が不安定であった。 	新田開発を進め、年貢率を上げるなどの政策を行った結果、幕府の収入は一時的に増えたが、農村では貨幣経済が浸透しており、米価がそれほど上がらなかった。そして、ききんなどの自然災害が発生し、農村において打ちこわしが起きるなど社会が不安定になって改革がうまくはいかなかった。

第3時において

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識（理論）	田沼意次は、徳川吉宗の政策とはちがいが、商業を発展させることで財政難を乗り切れると考えた。田沼の政策の理解 ・株仲間の奨励 ・長崎貿易の奨励 ・蝦夷地の開発計画	なぜ田沼意次は商業の発展を目指したのかという疑問を持つ。	<ul style="list-style-type: none"> ・年貢米の収入が頭打ちの状態になっていた。 ・商品作物の栽培は各地で発展しつつあり、また、それら商品の流通から得る利益に着目した。 ・金銀を輸入するために俵物を輸出した。 ・大商人の資金を積極的に活用した。 ・新田開発をおこなった。 ・天明の飢饉、浅間山の噴火、関東・江戸の大洪水などの災害が相次ぎ、改革を阻んだ。 	徳川吉宗時代の年貢による幕府財政の回復は、年貢米の収入が頭打ちの状態になっているので、それだけでは回復しないと考え、商業を重視する政策を行ったが、その結果、わいろが横行し、士風を退廃させた。

第4時において

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識（理論）	松平定信の政策を理解し、田沼政治の問題点をあげる。 ・ 囲い米の制 ・ 質素 ・ 儉約令 ・ 札差しからの借金帳消し ・ 旧里帰農令	なぜ松平定信は徳川吉宗の政治を理想としたのだろうか。	・ 浅間山の大噴火などの自然災害がおきた。 ・ 儉約令や棄捐令を出し、幕府財政の立て直しを図った。 ・ 都市に出稼ぎに行くことを制限し、農村に帰ることを勧める法令を出した。 ・ ききん対策のため囲い米をおこなった。 ・ 一時的に幕政の引き締めに成功したが、あまりにも厳しすぎたため、民衆の反発をかった。	わいろが盛んになり、政治が乱れた田沼時代からもう一度立て直すために農村復興に力を入れた政策を行ったが、武士の生活難を解決するまでには至らず、改革の内容も厳しすぎたことが民衆の反発をかい、改革がうまくいかなかった。

第5時において

	①問題発見のための活用力	②仮説設定のための活用力	③仮説検証のための活用力	④ 仮説応用のための活用力
概念的・説明的知識（理論）	徳川綱吉、徳川吉宗、田沼意次、松平定信の、それぞれの政策についてまとめる。 (一人の人物を挙げるために情報をまとめる)	なぜ成功した政策と失敗した政策があるのだろうか。何がそれに関係しているのだろうか。	・ 人々の暮らしから読み取る。 (武士、百姓等) ・ 経済のしくみはどうなっていたか。(米本位制から貨幣経済の農村への浸透等)	政策を成功させるためには政策者の人物像や時代を的確によむことが必要である。

上の表に従って生徒の活用力を評価する際、生徒の発言やワークシートの中から、必ず以下の点をふまえて活用力がついているのかを考えなければならない。

- ① 活用するための資料（文書、図、表など）をしっかりと読み込んでいるかどうか
- ② ワークシートや発言において、根拠となることがらを明示しているかどうか

ただ単なる“思いつき”で記述する、あるいは発言をするのではなく、しっかりと根拠をもつことで、資料の読み取りや解釈、それにもとづく活用力がついているかどうかの評価ができるを考える。

イ 評価問題について

テストにおける評価をするにあたっては、本研究において「授業で用いたものとは別の

事例の中から目標とした知識・技能を発見させたり、習得した知識や技能を応用して事象を説明・解釈させたりするテストが考えられる」とした。

そこで、本単元において、以下の評価問題を考えた。

ア) 習得した知識や技能を応用して事象を説明・解釈させたりする問題

問題例

次の①～⑥の歌を読んで、後の問いに答えなさい。

- ① 上げ米と いへ上米は 気に入らず 金納ならば しじょうくろふぞ
- ② 旗本は 今ぞ淋しさ まさりけり 御金もとらで 暮らすと思へば
- ③ 役人の 子にはぎにぎを よくおぼえ
- ④ 田や沼や 汚れた御代を 改めて 清らかにする 白河の水
- ⑤ 世の中に 蚊ほどうるさき ものはなし ぶんぶといふて 夜も寝られず
- ⑥ 白河の 清き流れに 魚(うお)住まず 濁れる田沼 今は恋しき

問い

- 1) ①, ②は徳川吉宗の改革を批判する歌である。どうしてこのような批判がされるのか、当時の社会情勢をふまえて説明しなさい。
- 2) ③の「にぎにぎ」とは何のことか。
- 3) ③はどのようなことを批判しているのかを説明しなさい。
- 4) ④, ⑤, ⑥は、この順番に時代の流れに応じてよまれたものである。どうしてこのように変化しているのだろうか説明しなさい。

この時期の幕政改革の時には多くの歌が詠まれている。その歌を題材にして活用力を問う問題例である。なお、この歌は、それぞれの授業の導入においても扱える歌である。授業の最初にこの歌を見せて、子どもたちの中から「どうしてこのように詠んでいるのだろうか」ということから、それぞれの改革について学ぶことができる。特に④は、田沼政治に失望し、松平の改革に期待を寄せているが、その改革が厳しすぎたために、⑥のように前の時代がよかったと批判する歌が詠まれる。この2つを比較してどうして対照的な2つの歌が詠まれているのかを考えさせることもできるだろう。

4) の問いに対する解答例を下記に示す。

④の「田や沼の汚れた御代」は、田沼意次のわるい政治ことをさして、松平定信は白河藩主だから、そのことに関連させて「清らかにする」とあるように、よい方向へ変えてくれるだろうという期待を表している。しかし、改革が進んでいくにつれて、良いと思う人もいれば、不満を持つ人もでてくるから、不満を持つ人たちがよんだのが⑤や⑥の歌で、⑤は、松平定信の厳しすぎる政治に不満を持ち、⑥は、松平定信の改革を期待していたけれど、思った以上に厳しすぎて、やっぱり田沼意次の時代の方がよかったなあと思っている歌である。だから、改革は最初は期待する人が多いけれど、途中から不満を持つ人もでてきて、すべての人が良いと思える改革は難しい。

ここでは、改革が良いと思う人もいれば、不満を持つ人もいるという両面性があるということを意識させたい。また同じように、最初は期待をするが、進むにつれて前の時代がよかったという声もでてくるということを、この歌によってとらえさせようと考えている。

問題例

次の文章は田沼意次の「遺訓」と呼ばれているものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

第1条 主君にたいする忠節のこと、仮にも忘却なきよう。なかんずく当家（田沼家）においては9代家重公、10代家治公には、比類のない御厚恩を受けているのだから、夢々忘却なきように。

第2条 親にたいする孝行、親族にたいする配慮をおろそかにしないように。

第3条 一類（同族）中は申すにおよばず、同席の衆、さらに付合ある人たちにたいし、表裏・疎意がないように心掛けるべきこと。どんなに身分が低い人でも、人情をかけるところは差別なく接するように。

第4条 家中の者には憐愍を加え、賞罰はえこひいきがないように気をつけること。使いやすい人、使いにくい人にも、及ぶかぎり気くばりをして、油断なく召仕うべきこと。

第5条 武芸は懈怠なく心掛け、家中の者にも油断なく申し付けるように。若者にはとくにせいだすように心掛けさせ、また他見苦しからざる芸は、折々見学させ、時には自分自身も見物を心掛けるように。しかし武芸にせいをだした上は、その余力で遊芸をすることは勝手次第で、それを止めだてする必要は毛頭ない。

第6条 権門の衆中には隔意失礼のないようにとくに心掛けるように。すべて公儀にかかわることは、どんな些細なことでも大切に心を用い、諸事入念に行なうことが肝要である。

第7条 諸家の勝手向（財政状況）を見るに不如意なのが一般のようで、良いのは稀である。不勝手がつのと公儀の御用さえ心ならずも勤めにくくなる。もちろん軍役も十分つとめにくくなるので、領地を拝領していても意味がなくなる。家の経済をたてることは大切至極のことであるので、常時油断なく心掛けることが肝要である。

問い

- 1) 田沼意次の人となりかわかるところに下線を入れなさい。
- 2) 田沼意次の人となりと、実際に彼が行った政策やその結果をふまえて、田沼意次の評価をしなさい。

田沼意次のイメージは“悪い政治家”という印象を持たれがちだが、はたしてそうなのだろうかということを、史料をふまえて検証し、田沼の改革の評価をさせることを考えた問題である。教科書や資料集における記述と、上記問題の「遺訓」とを比較させ、解答者それぞれに価値判断をさせる問題と考えている。

イ) 授業で用いたものとは別の事例の中から目標とした知識・技能を発見させる問題

問題例

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

山田方谷は、1805（文化2）年に備中松山藩の貧しい農家に生まれた。陽明学を学び、藩校有終館の学頭となり多くの弟子を教育した。1849（嘉永2）年板倉勝静が藩主となり、藩政改革に取り組む。その改革の結果、わずか8年で10万両（約600億円）の負債を返済し、しかも同じ額の余剰金も残している。また、1人の犠牲者もなく、百姓一揆も起こらなかったと言われている。

山田方谷は、以下の行財政改革を行っている。

- ① 教諭所や学問所を開設して、すべての領民が学問をできるようにしている。
- ② 干害の場合、飢えた領民に対して貯倉を開いて米を与えている。金のないものには無利子で貸し与えている。
- ③ 道路と水運を整備し、経済発展につなげている。
- ④ 身体壮健な者に西洋式戦術を教え、幕末動乱の政情不安定な時に備中松山藩の国防を強化している。
- ⑤ 盗賊の取り締まりを強化し、風俗を正している。改心した者は放免している。

山田方谷の改革が成功した理由

- ① 藩、商人、工人、武士、農民との協調体制をつくり、全体の費用の負担を全員で平等に負担していった。
- ② 自分から率先して節約をして自然に多くの人から協力を引き出していった。
- ③ 財政赤字になった原因（米本位経済から貨幣経済）を前向きに考えてうまく利用した。
- ④ 1つの商品を作るためにできるだけ多くの商品が関連するようにした。
- ⑤ 教育により領民が知識を身につけ、その知識が有効に働き、知恵に変えられるように活かせる場を提供した。

問い

- 1) 山田方谷の藩政改革と、これまで学習してきた人物（徳川綱吉、徳川吉宗、田沼意次、松平定信）の改革との同じ点、違う点をそれぞれまとめなさい。
- 2) 山田方谷の藩政改革はどのようにして成功をしたのか。①でまとめたことを参考にしながら理由を述べなさい。
- 3) 山田方谷をはじめ、この時期には各藩においても改革が進められ成功をおさめている藩も多い。国レベルの改革と藩における改革のちがいはどのようなところにあるだろうか。資料集などを参考に説明しなさい。

この問題例は、教科書や資料集には掲載されていない山田方谷の藩政改革という別の事象を取り上げ、目標とする知識・技能を発見させる問題と考えている。藩政改革においては、上杉治憲（鷹山）の藩政改革が教科書や資料集などに成功例として掲載されている。山田方谷は教科書や資料集には掲載されていないが、現在の国や地方公共団体の財政難、企業の経営状態が苦しい中において、彼の改革からヒントを得ようとしている。したがって、この問題例において、さらに山田方谷の藩政改革をヒントとして、現代の状態を打破するためには、どうすればよいのかを考えさせる問題を設定することもできるであろうと思う。

次に示す問題例は、学習してきたことをふまえて、現代にどのように活かすのかということを考えている。

問題例

私たちが生きている今、日本の財政状況は非常に危険な状態である。平成23年度末における国の公債残高は約667兆円、国民1人あたり約521万円にもふくれあがっている。また、地方の分とをあわせると、約894兆円にもなっている。

このような状況の中で、平成23年3月11日に発生した東日本大震災をはじめ、地震、豪雨による自然災害など日本各地でさまざまな被害があり、多くの復興費用が必要な現状である。

財政難、自然災害というのは、私たちが学習した江戸時代にも同じような状況が見られた。そのことに関して、江戸時代に幕政改革を行った、徳川綱吉、徳川吉宗、田沼意次、松平定信のそれぞれの政策やその結果を参考に、今の日本の危機を乗り越えるためには、どのような改革が必要なのだろうか。あなたの考えを述べなさい。

江戸時代における財政難や自然災害（火山の噴火や天候不順によるききん）を乗り越えるため、さまざまな幕政改革を行っている。そのことと、今の日本の状況とを重ね合わせ、どのような改革をすればよいのかを考えさせる問いである。この問いは、歴史的分野における学習だけでなく、公民的分野の学習をもふまえたものになっているが、そもそも歴史を学ぶということは、現代を生きる私たちが、それを教訓として、今の時代にどう活かすのかが問われているのであり、まさに「いま」何をしなければならないのかを考え、活用力を問う問題を想定している。

<参考文献>

- ・三宅康久『現代に活かす山田方谷の藩政改革その経済政策を中心として』大学教育出版、2006年

(佐古田 英樹)

第3章 公民的分野における「活用する力」の育成と評価

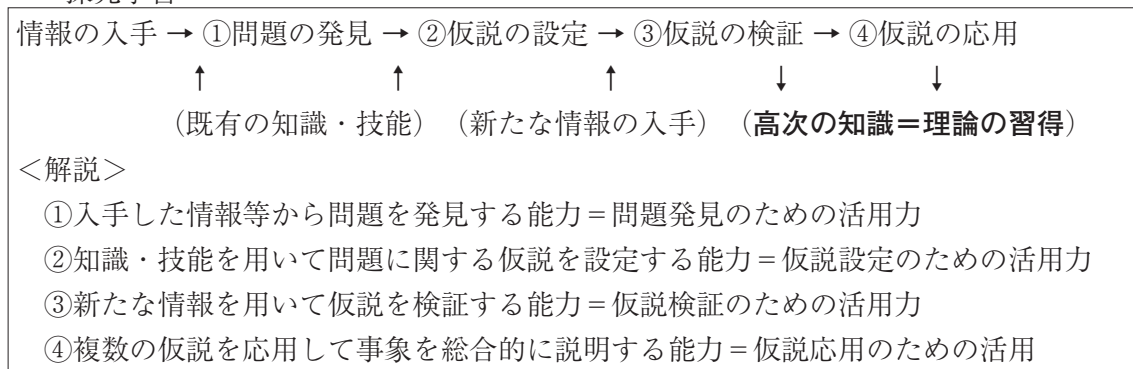
1 「活用する力」に関する公民の先行実践分析と課題

(1) 活用型学力育成のための学習過程

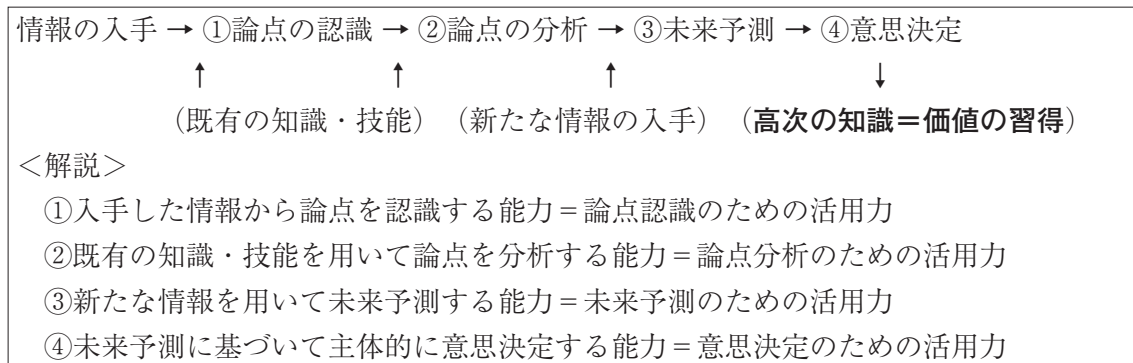
社会科における活用力を育成するためには、単元レベルの典型的事例をもとに学習過程における探究と意思決定を区別し、知識・技能の習得過程を明示することの必要性が指摘される。そして、各々の学習過程で要求される段階的な能力を、知識・技能とセットにした授業計画や評価方法を示すことで、外部から見取ることができる（原田、本書9頁内容）というものである。学習過程で要求される段階的な能力は、次のように示される。

ア 学習過程（思考・判断の過程）からのアプローチ

探究学習



意思決定学習



公民的分野の学習において、探究学習と意思決定学習をどのように取り入れることが可能だろうか。図1は、探究学習や意思決定学習の①～④のそれぞれの段階において必要とされる能力(X)と、中核となる理論や価値に段階的に迫る能力(Y)を示している。年間のカリキュラムの中では、社会の諸事象を分析・総合し、普遍的な政治や経済の概念の探究を目指す探究学習として設定される単元や、社会の諸事象を評価し、政治や経済の価値を方向付けたりする意思決定学習として設定される単元が考えられる。活用の仕方としては、探究学習・意思決定学習において、例えば単元A～Cでは、①～④のいずれかの段階、①、②、③、④ごとに活用力が適用されたり、単元Dでは①→④に連続した段階に必要とされる能力が活用されたりすることを示している。

その上で、中学校公民的分野ではどのような概念や価値の取り扱いが考えられるだろうか。

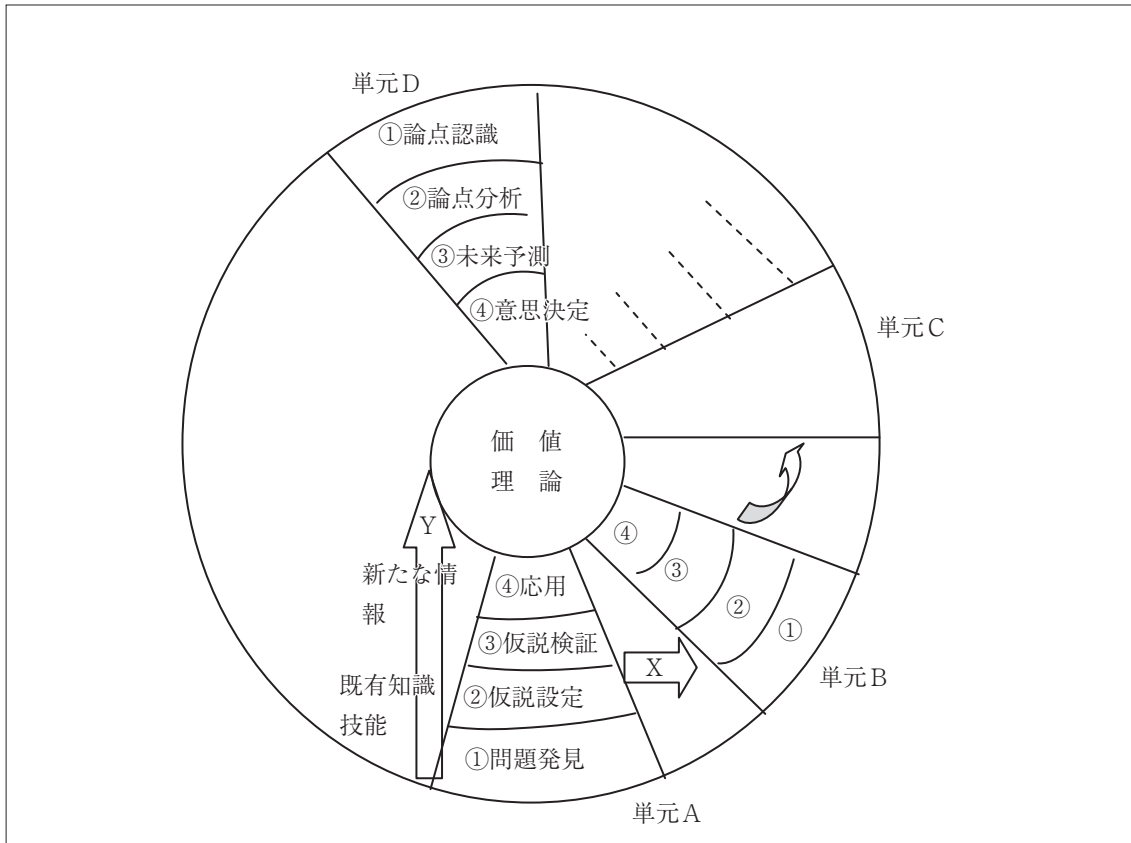


図1 単元ごとの学習と活用力の関係

イ 理論説明，概念枠組みの必要性

今回の改訂では『中学校学習指導要領解説 社会編』に、次のことが示されている。

「見方や考え方」については、従前より「諸事象をとらえる概念的な枠組み」とされ、「個人の尊厳」「国民主権」などの概念で構成されていると考えられていた。この考え方は変わらないが、今回はさらに現代社会をとらえる概念的な枠組みの基礎となるものとして、「対立」「合意」「効率」「公正」などを挙げているのである。…省略…「対立」と「合意」については、以下のようにとらえることができる。「効率」については、社会全体で「無駄を省く」という考え方である。すなわち、「合意」された内容は無駄を省く最善のものになっているかを検討することを意味しているのである。一方、「公正」については「みんなが参加して決めているか、だれか参加できていない人はいないか」というような手続きの公正さや「不当に不利益を被っている人をなくす」「みんなが同じになるようにする」といった機会の公正さや結果の公正さなど、「公正」には様々な意味合いがあることを理解させた上で、「合意」の手続きについての公正さや「合意」の内容の公正さについて検討する。(125頁)

ここでは「対立」「合意」「効率」「公正」の概念と、とくに合意に至るため無駄を省く「効率」と「公正」について、手続きの公正さ、機会の公正さ、結果の公正さ、内容の公正さが示される。これら概念によって、現代社会の諸事象を捉え、政治や経済、国際社

会の諸事象を理解する学習につなげることがねらわれている。それは、図2に示されるような内容構成になっていることから窺える。大項目(1)の「現代社会はどう見えるのか」「どう見るのか」で社会の見方・考え方の学習, それをもとにした(2)～(4)アに反映される。また, 各内容には「豊かな暮らしって何だろう」「民主主義って何だろう」「世界平和のために何ができるのかな」などの価値に迫る問いが設定されている。

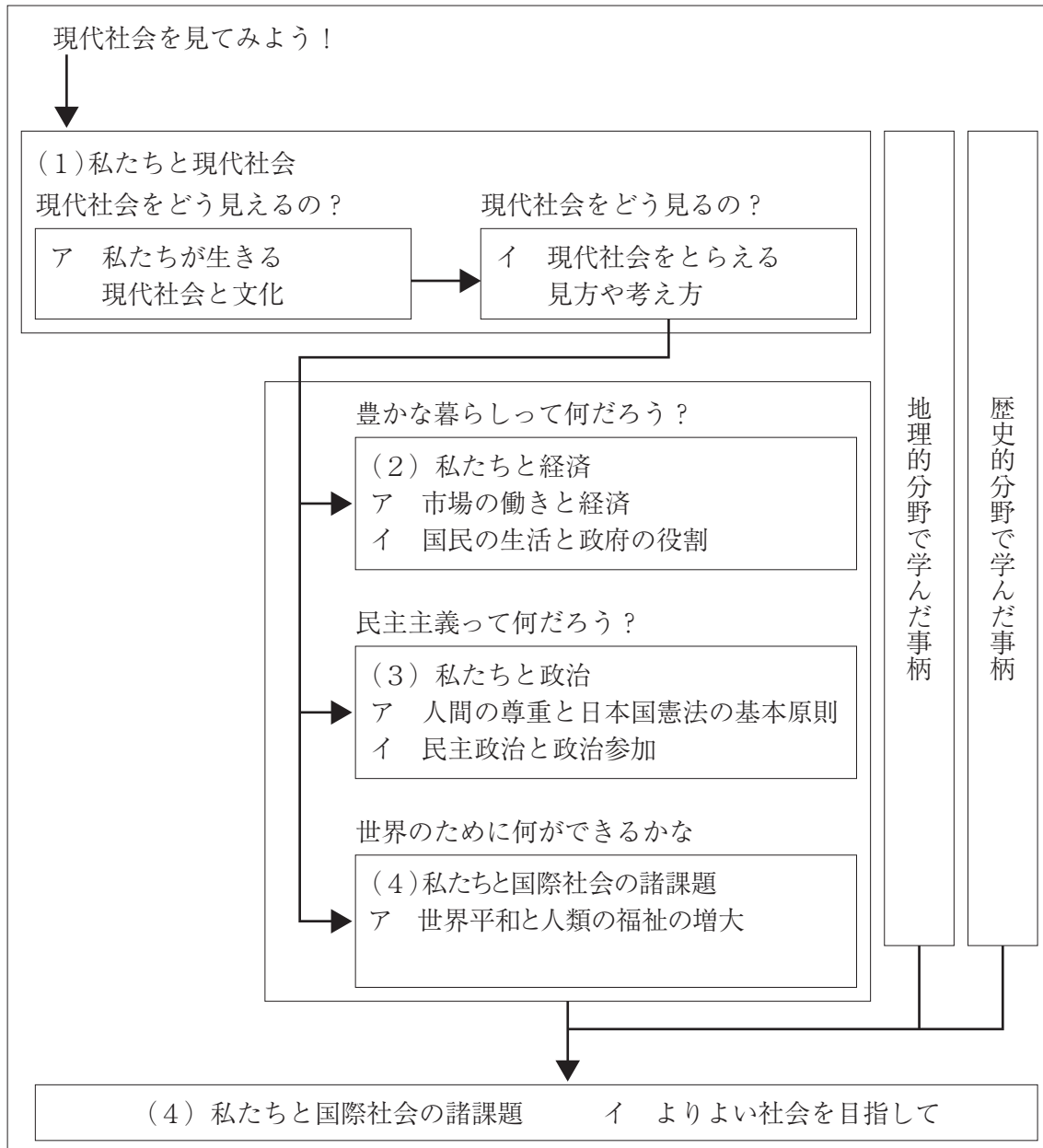


図2 中学校公民的学習の流れ

(文部科学省『中学校学習指導要領解説 社会編』日本文教出版, 2008, p.117)

しかし, 現実の社会で生起する問題, 対立は複雑に絡み合い, 価値や信念と密接に関連している。だれにとっての幸福や自由か, 美德に照らしてどうかなど合意形成に至るためには, 「効率」「公正」によってのみ問題解決が図られないことを意味する。そして, 現実

の問題それ自体を深く掘り下げて捉えるための理論の説明，概念枠組みが必要になる。例えば，様々な分野が関係し検討を要する社会保障や地球環境の問題では，どのような価値の指向性をもった公正なのか，公正を裏付ける理論は何かが明らかになっていることが必要である。この観点からすれば，公正や効率を考えるための手がかりとなる理論，社会の諸事象をどのように捉え説明するのが評価の鍵となる。例えば，表1の波線囲いで示すように，どのような理論や概念を用いて，どの知識を扱うのかを示すことである。

表1 中学校公民的分野の学習のための理論と知識

学習指導要領内容	理論や概念例	扱われる知識
(1) 私たちと現代社会 ア 私たちが生きる現代社会と文化 イ 現代社会をとらえる見方や考え方	メディア 社会システム 社会的公正	グローバル化，少子高齢社会，経済のサービス化，情報化，共生，多文化
(2) 私たちと経済 ア 市場の働きと経済 イ 国民の生活と政府の役割	資源の再配分 パレート最適，合理的期待 デモクラシシー リバタリアニズム，コミュニタリアニズム	市場，金融，需要・供給，価格，生産，消費，契約 消費者保護 財政，社会保障，税 社会資本
(3) 私たちと政治 ア 人間の尊重と日本国憲法の基本的原則 イ 民主政治と政治参加	自然権， 国家論 多元的国家論 ナショナリズム 社会選択理論	基本的人権，権利，義務，労働，政治，権力，主権，法，民主主義，平和主義，憲法，象徴，地方自治，住民参加
(4) 私たちと国際社会の諸課題 ア 世界平和と人類の福祉の増大 イ よりよい社会を目指して（新設）	文明の衝突	主権国家，領土・領海・領空，貿易資源エネルギー，環境保全 持続可能性

(筆者作成)

(2) 先行実践における「活用する力」の分析

では，公民的分野の経済単元を例に，探究学習や意思決定学習に「活用する力」がどのように位置づくかを検討する。

事例A 探究学習

鹿児島県総合教育センターの研究紀要から，平成20年度の研究提携校である吉田南中学校，社会科 二川明信教諭の①単元名「市場経済のしくみ」の学習指導案を取り上げる。

(<http://www.edu.pref.kagoshima.jp/research/cooperation/sidouan/yoshidaminami/h20/syakai.pdf> 2011.11.10)

本事例は授業設計の視点として，以下のように記している。

ア 資料を分析する力を育成する工夫 (研究との関連→資料を読み取り，理解したことをまとめる学習活動の展開：リードカードの活用)

資料を読み取り、理解したことをまとめる学習活動の展開では、各学年の生徒の発達の段階に応じて、思考をうまく導いていくために、リードカードの活用を図りたい。その際、支援として資料や内容のどこに着目して書けばいいのか、その視点を明確にし、段階を経てまとめられるようなリードカードの作成に努めたい。ここでは、需要曲線や供給曲線のグラフを理解させるために、まずは、それぞれのグラフの特徴を数値化することでより具体的に理解させ、価格の変動によってどのような変化があるのか、それぞれ2つのグラフを合わせることで、価格や生産量が決定することを導き出させたい。その際、商品の余る状態と不足する状態がどこなのか、その結果、価格がどのように変動するのかを段階的に整理させながら考えさせ、まとめられるようなリードカードの工夫に努めていきたい。

イ 考えをまとめる力を育成する工夫 （研究との関連→社会的事象を多面的・多角的にとらえる工夫）

社会的事象を多面的・多角的にとらえる工夫として、いくつかの視点から、それぞれの立場に立って考えることが必要であると考え、段階的に自分の考えを整理させることで、自分の考えをまとめることができるようなワークシートの工夫に取り組みたい。ここでは、価格と生産量の視点からそれぞれの生産者側（売り手）と消費者側（買い手）の立場で考えさせ、お互いに意見を出させることで考えをまとめさせたい。また、入荷量と価格の変動のグラフからわかることをとらえさせ、予想させたいと考える。最後に、本時の目標を再度振り返ることで自分の考えを確認させるとともに、商品の価格決定の仕方には、さまざまな要因があることに気づかせることで、市場経済に興味・関心をもたせたい。（下線…筆者）

本時の学習展開は、次の通りである。

	学習活動	指導上の留意点と研究の視点（◆は評価項目）
導入	1 今の時期のメロンの価格がなぜ高いのか考えてみよう。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・時期がずれるから ・天候に左右されるから </div>	1 今の時期の高価なメロンを提示して、収穫の最盛なのか考えてみよう。安い時期と高い時期で価格の変動があるのはなぜか、興味・関心を持たせる。
	価格はどのようにして決まるのだろう。	
展開	2 生産者（売り手）とそれを買う消費者（買い手）のそれぞれの立場で考えてみよう。 ① それぞれの望みとは、どんなことだろう。	2 売り手と買い手のそれぞれの立場で考えさせながら、両者が利益を得るための行動であることを理解させる。 ①価格を通して、それぞれの要求を考えることで、それぞれの立場で考えさせることを重視する。

売り手（供給）の立場
 ・多く作って、多く売りたい。
 ・高値で売りたい、儲けたい。
 買い手（需要）の立場
 ・安く買いたい。
 ・たくさん必要なときに安ければ、
 たくさん買いたい。

② それぞれの曲線を考えよう。

供給曲線のグラフ
 ・価格上昇→増やそうとする
 ・価格下降→つくる量をひかえる
 需要曲線のグラフ
 ・価格上昇→買う量をひかえる
 ・価格下降→多く買おうとする

3 一般的に商品の価格はどのようにして決まるの？

① 2つの曲線の交わりから具体的な数値を出そう。（均衡価格）

一般的な価格決定について
 ・市場と市場経済
 ・需要と供給の関係

300円で150個つくればよい。
 ・物余りの状態→価格は下がる。
 ・物不足の状態→価格は上がる。

4 価格の決定について考えを深めていこう。

○ 社会的事象を多面的・多角的にとらえる工夫

② それぞれの要求の傾向がどうなるか、需要曲線供給曲線のグラフを活用しながら説明する。

○ 資料を読み取り、理解したことをまとめる学習活動の展開（リードカードの活用）

3 一般的に価格がどのように決定しているのか、供給曲線と需要曲線の関係について学ばせる。

① 需要・供給曲線を合わせることで、その商品の価格と同じになることに気づかせる。また、

○社会的事象を多面的・多角的にとらえる工夫
 2つのグラフから読み取れる事実を拾い出させ、
 どのような傾向があるか確認させる。
 価格の上昇・下降により、供給量や需要量がどう変化するか予想させる。

資料を読み取り、理解したことをまとめる学習活動の展開（リードカードの活用）

2つのグラフから、商品が余っている状態なのか、不足している状態なのか考えさせることで、価格がどう変化するか考えさせる。その中で市場価格と均衡価格を理解させる。

◆ 価格の決めり方を考え、価格の決定には、需要と供給の関係があることを理解する。

4 一般的な価格の決定について学び、それをもとに実生活で起こっている現象について考えさせる。需要曲線や供給曲線の変動により、均衡価格が上下することに気づかせる。小学校で学んだ内容を振り返らせたり、高校で学ぶ内容について触れる。

なぜキャベツを捨てるのだろうか。
台風で落ちたリンゴが多いと、価格がなぜ上がるのだろうか。
閉店間際のおそうざいをなぜ値引きするのだろうか。

5 本時のまとめをしよう。

一般に価格は需要量と供給量のバランスで決まる。(均衡価格)
商品が売り買いされる場が市場あり、市場において需要と供給との関係で営まれる経済を市場済という。

6 自己評価を行う。
次時の予告を行う。

○社会的事象を多面的・多角的にとらえる工夫

◆身近で具体的な事例を通して、商品の価格の決まり方を考え、経済についての興味・関心を深めることができる。

5 これでの授業を通して、重要語句を確認し、自分の考えをまとめさせ、発表させることで、より理解を深めさせる。

6 自己評価カードを使って記入させる。
生産者と消費者の関係が価格に関わることをやすべての価格が市場で決定するわけではないことに触れ次時につなぐ。

ア 「資料の読み取り」「解釈」「説明」「論述」の学習活動の充実

二川氏の授業設計の視点には、「資料の読み取り」「解釈」「説明」「論述」の学習活動が位置付いている。グラフや表、文章資料などから情報(事実)を正確に読み取り、「社会的事象の意味や意義」を解釈し、「事象の特色や事象間の関連」を説明する。そして、まとめとして自分の考えや意見を記述する活動が意図されている。具体的には、表やグラフから読み取れる社会的事象の変化や特徴はどのような意味があるのか、変化の背景にどのようなことがあったのかなどを解釈したり、社会的事象がなぜ存在しているのか、その時代の社会にとってどのような働きや影響があったのかを解釈したりすること、そして、原因と結果との「関連」、目的と手段との「関連」などの説明、まとめとしての論述が求められる。

ところで、経済單元における知識・概念は抽象度が高く、学習者にとって簡単にとらえることが難しい。そこで、具体の社会事象を自らの経験を通してとらえさせることが必要となる。このとき、学習者は習得している知識・概念を「枠組み」として活用する。例えば、メロンの価格と生産量との関係から需要と供給の変動による均衡価格の決定を「枠組み」として理解し、それをキャベツの廃棄やリンゴの価格高騰の現象の説明に使うという学習展開に見られる。

イ 一般化可能なモデルと個別具体の往復

紙幅の都合で、本時以降の指導展開例を見ることはできない。次時予告にあるように価格の決定は市場の均衡だけではない。計画では、独占価格や公共料金などを取り上げ、政府の介入についての学習が盛り込まれている。この他にも、現実の社会では一杯数千円も

するようなコーヒーの値段や一泊数十万円もする宿泊料金もある。これは需要と供給の関係だけでなく、地価や諸費用などのコストの反映と見ることもできる。その他にも商品自体の希少性や個人の選好による高騰やダンピングによる下落などもある。一般化可能なモデルとして抽象化を図る思考と個別具体化する思考の往復により知識や概念を活用することが考えられよう。

事例B 意思決定学習

経済单元において、探究学習で得た知識や概念を、意思決定学習で活用する例も見られる。越智裕司教諭の单元「消費生活と経済のしくみ」平成19年11月16日実施の指導案を手がかりにする¹⁾。4時間扱いの3時間で、学習者にとって身近な今治商店街の現状を取り上げ、なぜ商店街が衰退したのだろうかを探究する。小集団での課題は、社会の変化・地域の変化・競争店の増加・商店街の問題点を調べ、人の集まる魅力ある商店街にするには、どうすればよいだろうかを4時間目の課題に据えている。以下、本時の展開である。

学習活動	時間(分)	学習内容	○指導の工夫 ◎評価 【評価場面】																
1 前時までの学習内容を確認する。	5	なぜ、今治商店街には人が集まらないのだろうか？ 今治商店街の課題と工夫・努力																	
(学習問題) 人の集まる魅力ある商店街にするには、どうしたらよいだろうか？																			
2 今治商店街の活性化について話し合う。 (1) 班で考えた活性化案を発表し合う。 (2) 各班から出された活性化案をもとに、学級全体で練り合い、提案する意見をつくる。	40	<table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl;">社会の変化に対して</td> <td style="writing-mode: vertical-rl;">地域の変化に対して</td> <td style="writing-mode: vertical-rl;">競争店の増加に対して</td> <td style="writing-mode: vertical-rl;">商店街の問題に対して</td> </tr> <tr> <td colspan="4">今治商店街の活性化案</td> </tr> <tr> <td colspan="4">地域社会の担い手として</td> </tr> <tr> <td colspan="4" style="border: 2px solid black;">消費者は大型ショッピングセンターやスーパー、コンビニなどの利便性ばかりに注目しがちであるが、地域での役割や地域経済の視点か</td> </tr> </table>	社会の変化に対して	地域の変化に対して	競争店の増加に対して	商店街の問題に対して	今治商店街の活性化案				地域社会の担い手として				消費者は大型ショッピングセンターやスーパー、コンビニなどの利便性ばかりに注目しがちであるが、地域での役割や地域経済の視点か				<ul style="list-style-type: none"> ○フラッシュカードや写真を用い、商店街の課題と良さ、取組に目を向けさせる。 ◎商店街の活性化案の発表や話し合いに意欲的に取り組んでいるか。 【評価場面A】 ◎商店街の長所を生かした具体的な活性化案を考えることができたか。 【評価場面B】 ◎活性化案と提案理由をわかりやすく説明できた 【評価場面C】 ◎他地域の事例を提示し、商店街だけの問題でなく地域の問題でもあることに気づかせる。 ◎話し合いを通して、地域社会の形成者としての責任と
社会の変化に対して	地域の変化に対して	競争店の増加に対して	商店街の問題に対して																
今治商店街の活性化案																			
地域社会の担い手として																			
消費者は大型ショッピングセンターやスーパー、コンビニなどの利便性ばかりに注目しがちであるが、地域での役割や地域経済の視点か																			

		ら見た商店街の価値にも目を向けるべきである。商店街の今後について、消費者の立場からとともに地域社会の担い手としての立場から、生活を豊かにするために判断し行動していくことが重要である。	役割について考えることができたか。 【評価場面D】
3 本時のまとめをする。	5		

学習者から出された活性化案

活性化案1：商店街でつかえる地域通貨をつくる。

地域通貨は、公共交通機関でもつかえるようにしてもらおう。その理由は、商店街は広い駐車場を確保することが難しく、お年寄りなど自動車に乗らない消費者にとってバス・タクシー・フェリーなどの公共交通機関を利用すれば商店街に来てもらうことができる。

活性化案2：空き店舗を利用して、託児所、地域のお年寄りとともに過ごせる施設やスペースをつくる。

(越智裕司「『自分の考えを論述する』授業づくり」小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける公民授業デザイン 中学校編』明治図書, 2009年, pp.129-138)

ア 問題解決における創造的アプローチ

授業展開は、商店街が衰退した原因を社会や地域の変化から探り、また消費者のニーズと商店街が備える施設の問題点を特定し、その解決を図るというものである。学習形態としての班や学級全体での話し合い活動において、よりよき解決策を見出すものとなっている。単なる現状維持の問題解決でなく、商店街の活性化のための具体案が導かれる点で創造的な判断が求められる点が評価できる。ただし、前提となる価値の吟味が重要である。この場合、授業者が意図した「商店街の今後について、消費者の立場からとともに地域社会の担い手としての立場から、生活を豊かにするために判断し行動していくこと」がなぜ重要なのかも問われることになる。逆説的に、商店街が衰退してはなぜいけないのか、なぜ地域社会の担い手としての責任から商店街を活性化しなければならないのかなどの暗黙の価値の前提を探究の対象にすることになる。

イ 判断の妥当性の吟味

各評価場面における評価の観点については、検討の余地が残される。「意欲的に取り組んでいるか」「考えることができたか」「説明することができたか」など行動表現での評価ではなく、内容を吟味する必要が出てくる。例えば、評価場面Cでは活性化案と提案理由の説明のわかりやすさでなく、内容の妥当性を吟味する。

地域通貨は、公共交通機関でも使えるようにしてもらおう。その理由は、商店街は広い駐車場を確保することが難しく、お年寄りなど自動車に乗らない消費者にとってバス・タクシー・フェリーなどの公共交通機関を利用すれば商店街に来てもらうことができる。

これについて、なぜ公共機関が介入しなければならないのか、どのくらいの費用を投じるのか、競争原理に反するのではないかなど、どのような立場を念頭において提案しているのか、提案の実現可能性を考える必要が出てこよう。

以上、事例A・Bともに、具体的な事例を通して抽象的な概念の理解をせまる学習として構成されている。そこでは、知識の習得が課題を探究する中で行われる。さらに獲得された知識や概念を、現実の社会事象の解釈や判断の材料として活用する学習になっている。つまり、授業の改善を行うには、

探究学習における ①問題の発見→②仮説の設定→③仮説の検証→④仮説の応用

意思決定学習における ①論点の認識→②論点の分析→③未来予測→④意思決定

それぞれの学習過程の①～④において、獲得されている知識・技能に対応して、新たな情報がどのように利用されているかを検証する必要性が示された。そこで、活用型学力育成における評価をどのように行うかについて、事例Cを見てみよう。

事例C 探究学習・意思決定学習を組み合わせる学習

事例Cは、次節で示す奥田修一郎教諭の回転寿司の授業である。授業は、日常の身近な経済生活の中で、「なぜ安い」「どのような工夫があるの」などの問いから、その解明を通して、効用や選好、費用や価値といった経済概念に迫るように構造化されている。その概念は回転寿司とは異なる他の社会事象、ハンバーガー店の経営やコンビニエンス・ストアのさまざまな工夫に共通することとして、「枠組み」をあてはめて考えられるものになっている。表2は、回転寿司店とハンバーガーショップに共通して、学習者が目にしていく具体の事象から、経済概念のどのようなことが見出されるかを示したものである。

その他、店舗の立地条件やレイアウト、原材料の仕入れのコストダウンも扱われている。無駄の削減、効率化を図り、利潤を追求するにはどうすればよいかを探究する学習と、それを前提とする中での企業の戦略的な意思決定を追体験する学習が組み込まれている。授業展開の詳細は、次項に委ねたい。

表2 概念の活用の適用事例

概念	具体	回転寿司店	ハンバーガーショップ
購買意欲 安価 稀少性	商品 メニュー	一皿100円である，値段が皿でわかる，サイドメニューもある，注文できるものもある，高い皿のものもある。	セットメニューがある，おまけがついている，新商品が次々にでる，期間限定商品がある，安いもの・高いものがある。
機械化 大量生産 効率 品質管理	調理	卓上にぎり機や自動食器洗い機がある，鮮度管理されている。ベルトコンベヤーで回転している，など。	最初からカットされている，具を流れ作業にしている，冷めないようガラスケースに入れてある，など。
分業 雇用形態 労働生産性	従業員	業務部，広報宣伝部，品質管理部などに分かれている，正社員，パートやアルバイトに分かれている，など。	メニューを聞く人と渡す人に分かれている，全員がイヤホンをして，連絡を取っている，並んでいるときにメニューを持ってくる。

(奥田修一郎教諭の授業事例から扱われる概念を筆者抽出)

評価については，ある事例によって習得された概念を他の事例において説明できるかどうかを見ることになる。また，学習者が行う意思決定が企業行動に照らして合理的であるかどうか，その筋道を見るものになろう。本稿の「第3章 社会科の「活用する力」の評価に関する理論モデル」で示したモデルを振り返るならば，探究学習と意思決定学習における知識と思考・判断の評価について，次のようにまとめておきたい。

事実にかかわる思考において，事実に知識，概念や理論などの説明的知識と思考技能との関係に焦点をあてるならば，内容領域に即した知識の質と知識間のつながりをみればよい。

価値にかかわる判断については，論証の妥当性をみる。その場合，使用される資料や証拠，それをどのように使用し筋道立てられているかが評価の対象となる。従来の価値的知識に関する誤解は結果としての価値そのものを評価しようとしていたことであり，価値判断の思考技能との区別がなされていなかったことが指摘される。

今回，焦点をあてた経済以外の公民分野の単元に共通して，学習者が質やレベルの異なる知識をどのように活用し，原因や結果，影響や理由などを説明するのか，また価値判断の過程を辿るのか，各単元や事例に応じた評価規準（基準）の具体が集積されることが早急に必要となる。

<注>

- 1) 越智裕司「『自分の考えを論述する』授業づくり」小原友行『「思考力・判断力・表現力」をつける公民授業デザイン 中学校編』明治図書，2009年，pp.129-138

(峯 明秀)

2 公民的分野における「活用する力」を育成する授業提案

(1) はじめに一授業を構想するにあたって一

原田氏は、教育学一般の活用力と社会科固有の活用力との違いを、次のように定義している。

- ①社会科固有の内容知・方法知はともに具体的な内容に即して初めて習得され、活用されるものである。つまり内容の伴わない活用力はありえない。
- ②社会科における活用とは、端的に言えば単元毎に探究学習ないし意思決定学習を組織し、前述の基礎的過程に沿って学習を遂行することである。
- ③それゆえに、社会科の活用力を育てようとするならば、具体的な題材に即した探究学習ないし意思決定学習を遂行するしかない。

この定義は、日々おこなっている授業を省察する上で、大変示唆に富んだものである。新学習指導要領では、「習得」「活用」「探究」という学力や学習方法が強調されているものの、「習得」と「探究」、「活用」と「探究」の関係が見えにくい。この「習得」「活用」から発展学習としての「探究」へとつながる学習論は、一見するとわかりやすい。しかし、このとらえ方からすると、目の前の子どもたちを見るにつけて、「学習意欲のなさ」や「荒れ」の中で、日々の「習得」型学習すらままならないし、ましてや「活用」型学習や「探究」型学習に発展させられないという声が現場から聞こえてくる。だが、原田氏の定義のように「習得」「活用」「探究」を捉えると、日ごろの授業改善に多いにつながる。まず、着目したいポイントは：

活用力育成には、具体的な題材に即した探究学習・意思決定学習が必要であること

では、どんな題材がいいのだろうか。一つには、子どもたちが切実に思っていることや身近なことをテーマに設定することである。時事問題では、今、話題になっていること、関心を寄せていることを題材として取り上げることであろう。しかし、テーマが常に切実感のあるものばかりではない。その場合は、探究学習をしていく中で、切実感のあるものにしていく授業構想がもとめられる。それは、常識的判断では捉えられない事象をぶつけ、子どもの中に「なぜ」疑問をおこさせ、追求を促していくことや、多角的・多面的な見方から、仮説を検証してみる学習などで行えるものである。ここでの多角的というのは、例えば、消費者ではなく企業側から見るとどうなのか、経営者ではなく労働者の視点に切り換えると、どのように見えるのかという風に、立場を転換させて事象を捉えていこうというものである。また、多面的とは、いろんな経済的な見方（理論・学説）から、考察できるようにすることである。

ここで、もう少し「習得」「活用」「探究」の関係について整理しておこう。原田氏は、学習とは基本的に探究のことだと考え、習得・活用をいずれも探究活動を通して獲得すべき知識・技能と位置づけ、両者の違いは、個別的な知識（情報）や技能が「習得型学力」で、一般的な知識（概念・法則・公式）とそれを駆使する技能が「活用型学力」とする¹⁾。

活用型の学習では、「なぜか、これからどうなるのか、どうすればいいのか」といった納得解がもとめられる。学習者にとっては、別な言い方をすれば、事象や問題の背景を「読み解く」力がもとめられる。

(2) 授業構成の仮説

本研究では、公民的分野の経済学習における「活用する力」の育成をはかる授業提案をする。授業提案をする前に、まず、経済とは何かと経済学習のねらいとは何かを次に整理したい。

経済とは、わたしたちの生活に必要なさまざまなモノやサービスを、限りある資源を用いて作ったり(生産)、それを売り買いしたり(流通)、買ったり使ったりする(消費)すべての活動とそのしくみ。この生産と消費を中心とした活動は、お金と引き替えに行われる。別な言い方をすれば、私たちの生活・社会は「**分業と交換のしくみ**」で成り立っていることを理解すること。もう少し詳しく言えば：

- 労働して得たお金を基に、消費活動を行う。
- 協力して働き、生産量を増やす。
- 交易(交流)によって、生活を豊かにする。

そして、「経済」の目的を、参加する人々の福祉(幸せ)を高めるための、システムをつくることと考えた。さらに経済学習のねらいであるが、次のように捉えた。

公民の経済学習のねらいは、社会の仕組みや成り立ちを理解することにある。また、その仕組みがうまく機能していないなら、(1)なぜ、うまく機能していないのか、その理由を理解し、(2)それがうまく機能するためには、どうすればよいのかを考えること。

この機能しているかどうかの基準として、新学習指導要領では、「効率と公正」という概念的な枠組みが明示された。この「効率」とは“ムダのない”ことと捉えてもよいが、経済的な事象をとらえるための次のような概念的な枠組み(言い換えれば理論的な知識)を使うことで、より経済的な見方・考え方の深化をうながすことができるであろうと考える。

仮説① 活用する概念的枠組みを明確にすることは、見方・考え方の深化を促すとともに、評価の際の規準にもなり、学習者にフィードバックすることでさらに社会認識を広げることができるであろう。

その概念的枠組みとは、次の4つである。

A「個人がベストな選択をするために関わる概念的枠組み(知識)」

- A1 すべての資源には限りがある。(稀少性)
- A2 資源には限りがあるので、片方しか選べない。(トレードオフ)
- A3 選ばれなかった選択肢は「コスト」と考える。(機会費用)
- A4 メリットが変われば、行動が変わり、結果が変わる。(インセンティブ)

もう一つが、B「価格がはたしている重要な役割を知る概念的枠組み(知識)」

- B1 足りないものは値上がりし、余っているものは値下がりする。
- B2 価格が自動的に資源の節約をする。

さらには、経済学習だけでなく、公民分野の学習の中で、いろんな事例を捉えることができ、その解決策を考えていけるC「社会的ジレンマに関する知識」

社会的ジレンマとは：

- C1 まず、一人一人の人間にとって、「協力」か「非協力」かのどちらかを選択できる状況がある。
 - C2 このような状況で、一人一人の人間にとっては、「協力」を選択するよりも「非協力」を選択する方が望ましい結果が得られる。
 - C3 一人一人の人間にとっては「非協力」の方が「協力」より望ましい結果を生み出す
が、全員が自分にとって個人的に有利な「非協力」を選択した場合の結果は、全員が
「協力」を選択した場合の結果よりも悪いものになってしまう。
- (山岸俊男『社会的ジレンマのしくみ-「自分1人ぐらいの心理」の招くもの-』サイエンス社、1990年、pp.7-8)

この社会的ジレンマの知識は、「学校生活の清掃」、「授業中のおしゃべり」、という身近な例から、外食産業やアパレル業界に見られる「値下げ競争」、公共財供給ゲームにみられる「フリーライダーの問題」、さらには、共有地の悲劇にみられる環境問題、特に「地球温暖化問題」に活用でき、解決策も考察することができるものである。

なお、D「公正」に関する枠組みは、経済学習だけでなく、公民分野の学習の中で、習得・活用されていくものであるが、「公正」の意味は、いくつかあるので、これも次のように整理したい。

- D1 みんなが参加して決定するようになっているか。(手続きの公正)
- D2 機会が不当に制限されていないか。(機会の公正)
- D3 結果が不当なものになったりしていないか。(結果の公正)
- D4 その立場になったとき、それを受け入れられるものであるか。また、自分が生まれていない状態であることを想像しながら、最も弱い立場におかれている人のことを考えられているか。(無知のヴェールからの公正)

仮説② これらの活用する概念的枠組み（知識）を使って，異なる事象を捉えられるように学習計画を立て実施することで，より見方・考え方が深まるであろう。

仮説③ 身近な例やワークショップ教材を用いることで，探究学習が進められるであろう

（3）実施した実際の経済学習から

大項目（2）国民生活と経済 中項目ア『私たちの生活と経済』（平成10年12月告示学習指導要領 以下10年版と略）

大項目（2）私たちと経済 中項目ア『市場の働きと経済』（平成20年3月告示学習指導要領 以下20年版と略）

「身近な消費生活を中心に経済活動の意義を理解させる」

① 無人島に漂着！あなたならどうする²⁾

この時間では，まず経済活動の基本を考えることができるようにする。経済とは難しいことばかりではなく，人間生活の基本的な行為であることに気づけるようにする。また，次のような発問（さまざまな工夫と努力で，なんとか生活できるようになったころ，島の反対側に人が住んでいることがわかりました。あなたはどうしますか。）をすることで，物々交換のこと，さらには貨幣の3つの働きを考える。

② 無人島生活の経験を現代社会に置き換える。

あるモノ（携帯電話やポテトチップスなど）から，生産・分業・流通のしくみを概観できるようにする。また，所得には3つの所得があることを，クイズからつかむ。資源には限りがあり，何かを得れば，何かを失うことを，いくつかのワークショップから習得し，活用できるようにする。A1～A3

○こつこつ貯めた預金が40万円になりました。家族でどう使うか話し合いました。

○修学旅行のお小遣い6000円は何に使った？

（お金以外の限りある資源を考えたあとで）

○火曜日から，期末テストがはじまる。今は土曜日の昼。Aさん：テスト勉強は予定どおりには進んでいない。でも，今日である人気の映画の上映も終わりだ。映画館の近くのお店で洋服をみたい。夕方までにもどって残りがんばってやれば，間に合うでしょう，まずは映画に行こう。Aさんが得られるものは何？失うもの（あきらめないといけないもの）は何？

○電力も今年は限りあるものに。電力を使わないようにするために，どんな解決策があるのか。B2

大項目（2）国民生活と経済 中項目ア『私たちの生活と経済』（10年版）

大項目（2）私たちと経済 中項目ア『市場の働きと経済』（20年版）

「価格の働きに着目させて市場経済の基本的な考え方について理解させる」

③ 富士山の缶ジュースはなぜ高い

「なぜ都心のホテルのコーヒーは1200円するのか？」 「車内販売のホットコーヒーは

なぜ高い？」「深夜のタクシー料金（夜11時～朝の5時まで）は、昼間より2～3割高くなるのはなぜ？」など、価格の決まり方には、いくつかあることを知る。コブクロのコンサートチケットをいくらで販売、いくらで買うかのワークショップを行い、需要と供給との関係で価格が決まることを理解し、さらに価格の役割を考えていけるようにする。B1とB2

④ 家計とは何だろうか

20年後の家計簿をつけ、家計のしくみについて理解する。また、昨年の支出が多かったもの、ここ40年で変わってきた支出項目、ある食品の消費が多い都道府県などを班対抗のクイズを行う。A1～A3 さらに、貯蓄の目的と方法についても知る。

⑤ 広告と正しくつきあうために

いくつかの広告に関するクイズをしたのち、ワークショップ「広告をつくってみよう。」（宣伝する商品、対象、どんなイメージ、どんなタレントを使うかなど）班・クラス発表から広告の役割と課題を理解する。また、支払い方法には、いくつかあり、クレジットカードや電子マネーの仕組みを知る。ミニ討論。

大項目（2）国民生活と経済 中項目ア『私たちの生活と経済』（10年版）

大項目（2）私たちと経済 中項目ア『市場の働きと経済』（20年版）

「現代の生産の仕組みのあらましや金融の働きについて理解させるとともに、社会における企業の役割と社会的責任について考えさせる」（10年版）

「現代の生産や金融などの仕組みや働きを理解させるとともに、社会における企業の役割と責任について考えさせる」（20年版）

⑥ 会社って何だろうか。

自分の興味のある企業を調べ、発表し合う。さまざまな企業（会社）があることを知り、企業の役割をまとめることができる。それを踏まえて「会社をつくろう」の企画書をつくることで、生産に必要な3要素（自然、労働、資本）に気づけるようにする。

⑦ 会社はどんな工夫や努力をしているのだろうか。

回転寿司屋に関するアンケートをとり、生徒が疑問に思っていることを探究できるようにするとともに、すでに知っていることを、経済の考え方からとらえられるようにする。

■回転寿司屋さんで学んだことを、ハンバーガー屋さんに応用してみよう。

※⑦については、（4）のところで詳しく言及したい。

⑧ CSRに着目して、どの会社を応援しますか。（株式会社のしくみ） シミュレーション（簡易株式学習ゲーム）A1～A3

⑨ もし企業が競争しなかったら？ 2010年度のヒット商品番付を調べる。近くにあるお店の商品の工夫を発表する。トップ3企業ビンゴゲームから、市場の寡占について知る。独占によって誰がどんな害を受けるのかを考える。

⑩ あなたは誰だったらお金を借りますか？（金融・直接金融・間接金融・日本銀行の役割）

⑪ 景気変動のしくみ（デフレ・インフレ）

- ⑫ 円高・円安って何？（産業の空洞化） 活動として：クイズ円高OR円安 班対抗戦追求課題として円高はなぜおきるのか？ B1とB2

大項目（2）国民生活と経済 中項目ア『私たちの生活と経済』（10年版）

大項目（2）私たちと経済 中項目ア『市場の働きと経済』（20年版）

「社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について、勤労の権利と義務、労働組合の意義及び雇用と労働条件の改善について、勤労の権利と義務、労働組合の意義及び労働基準法の本質と関連付けて考えさせる」（10、20年版）

- ⑬ 求人票をみて：どの働き方がいいのか。A1～A3

どの給料のもらい方がいいのか？（ア だんだん少しずつ増える。イ 毎年変わらない。ウ だんだん少しずつ減っていく。エ 年によって増えたり、減ったりする。）なぜ、そう思ったのか？働く人の立場から考えよう。A4

取材教材（回転寿司屋さんで働く人からのインタビュー） 正規雇用と非正規雇用・終身雇用・成果主義について考える。

- ⑭ 突然、こんなことを言われて（ロールプレイで労働基準法と労働組合法を学ぶ。）

- ⑮ 「子どもの○顔よりも、子どもの□顔」（○には寝 □には笑の漢字がはいる。女性と労働 ワークライフバランス）なぜ、女性と男性の賃金格差があるのだろうか。ワークライフバランス社会を実現するために、何が必要か？（ミニ討論）

大項目（2）国民生活と経済 中項目イ『国民生活と福祉』（10年版）

大項目（2）国民生活と政府の役割 中項目イ『国民生活と政府の役割』（20年版）

「国民生活と福祉の向上を図るために、国や地方公共団体が果たしている経済的な役割について考えさせる。租税の意義と役割及び国民の納税の義務について理解させる」（10年版）

「市場の働きにゆだねることが難しい諸問題に関して、国や地方公共団体が果たしている役割について考えさせる。租税の意義と役割について考えさせるとともに、国民の租税の意義について理解させる」（20年版）

- ⑯ マンションの耐震改修にあなたは一時金を支払いますか。：公共財供給ゲームをおこなって、税の役割、フリーライダーについて理解できるようにする。C

- ⑰ 公正な税の負担って？「税の種類はなぜこんなに多いの？」「どの課税制度が公正なのか 定額課税・定率課税・累進課税を比較してみる。」D

大項目（２）国民生活と経済 中項目イ『国民生活と福祉』（10年版）
大項目（２）国民生活と政府の役割 中項目イ『国民生活と政府の役割』（20年版）
「消費者の保護について理解させる」（10年版）
「消費者の保護など市場の働きにゆだねることが難しい諸問題に関して、国や地方公共団体が果たしている役割について考えさせる」（20年版）

⑱ リカちゃん人形の何が変わったのか？（消費者をささえる政府の取り組み）

ちょっと待て！契約はそこからはじまっている。（身の回りの契約を探り、契約がいつ成立するかを考える。）○ロールプレイ教材「ついつい買ってしまったダイエット商品」○リカちゃん人形の変化から、PL法を理解する。

大項目（２）国民生活と経済 中項目イ『国民生活と福祉』（10年版）
大項目（２）国民生活と政府の役割 中項目イ『国民生活と政府の役割』（20年版）
「社会保障の充実について理解させる」（10年版）
「社会保障の充実など市場の働きにゆだねることが難しい諸問題に関して、国や地方公共団体が果たしている役割について考えさせる」（20年版）

⑲ アリとキリギリスの年金問題（社会保障）

「なぜ、国民年金の未納者が20代で増えているのか」を追求課題にしながら、今の年金制度を理解できるようにする。その解決策や今後の年金制度には、どんなものがあり、それぞれにはどんなメリットとデメリットがあるのかをまとめ、これからの年金制度を設計してみよう。

意思決定学習から社会形成型学習へ A1～A4

大項目（２）国民生活と経済 中項目イ『国民生活と福祉』（10年版）
大項目（２）国民生活と政府の役割 中項目イ『国民生活と政府の役割』（20年版）
「限られた財源の配分という観点から財政について考えさせる」（10年版）
「財源の確保と配分という観点から財政の役割について考えさせる」（20年版）

⑳ 日本はギリシャのようにならないのか。国債について調べよう。学習課題としては、大きな政府がいいのか小さな政府がいいのかをミニ討論。消費税アップにあなたは賛成それとも反対それはなぜ？ A1～A4

㉑ 予算案をつくってみよう。（国と地方公共団体の歳入と歳出） A1～A4

予算配分ゲームを行い、住民の気持ちにこたえるために、どんなことを考えればよいかを考える。D

(4) 公民的分野における「活用する力」を育成する授業モデル

～「回転寿司屋さんから考える経済学」～

(3) では、経済学習を通しての「活用する力」の育成をはかる授業計画と実際おこなったこととおおまかにまとめた。次に、「生産の仕組みのあらましや社会における企業の役割」における「活用する力」を育む学習モデルを提案したい。

生産や企業についての学習は、習得型学力の獲得を受容学習で達成する授業、あるいは、習得型学力の獲得を探究する授業のいずれかの授業構成が多い。それは、一つには、活用する知識である概念的な枠組を、あらかじめ授業をつくる時に措定してこなかったことによるし、また、経済概念を深化させる問いを用意できなかったこと、視点を変えた見方ができるような学習課題を提示できなかったことなどによる。さらに、どこまで活用する力がついたかを検証をする次のステップの学習展開につなげることが、難しかったことにもよる。これらを踏まえて、「回転寿司屋さんから考える経済学」という授業を開発した。

ア 単元設定のねらい

3年生の経済学習では、「回転寿司屋さん」を教材化した。それは次の二つの理由からである。一つ目は、子どもにとって考えやすいテーマであること。つまり、大阪が発祥地（まさにネタの宝庫、例えば『何から回転するヒントを得たのか』、東大阪の中小工場の技術）であり、身近にお店（大阪狭山市近辺に4軒）があること。そのため、何回かの取材が可能であったこと。子どもへのアンケートでは、全員が、回転寿司屋さんへ一度は入ったことがあるということで、どの子もまず自分の経験から考察できると考えた。二つ目は、習得・活用させたい見方・考え方を学習の中に、組み入れやすい素材であったことである。なお、この学習で習得させたいこと・活用させたいこととは次の通りである。

○どのように限られた資源を使って、どのように利潤をあげているのか。

→コスト（利潤）・稀少性・選択（活用）A1 A2

○ムダ（ロス）をなくすとは？ いろんなムダ（ロス）を考える。

→機会費用という見方の（活用）A3

○立地条件（1年生の地理『通販はなぜ急に成長したのか』の活用）

○流通（習得）

○グローバル化（習得）

○働き方「正規雇用」「非正規雇用」「OJT on-the-job training」「OffJT off-the-job training」
（習得）

○値下げ競争はなぜ起きるのか（「囚人のジレンマ」）（習得）C

→後の学習で「公共財供給ゲーム」「環境対策のジレンマ」（活用）C

イ 教材の特色

○ロールプレイ型（回転寿司屋さんへ就職したとして、いろんな部署につくという設定）

※ゲーム、クイズ、取材したVTRなどを入れて、変化をつける。

[ストーリーの展開]

①「回転寿司屋さんに就職が決まりました。」…中学校の時の職業インタビューや職業体験がきっかけになり、高校の時には回転寿司屋さんでアルバイトもしていました。マネージャーさんから、将来、回転寿司屋さんに就職してみないかと言われていて、この業界に進むことになりました

②新入社員は入社して約3ヶ月、お寿司の製造や接客などをおこないます。店長さんが、あなたにこんな宿題を出しました。「たくさんのお客さんにきてもらうために、どんな工夫をしたらいいのか、アイデアをどんどん出してください。」「お客さんが、何度もきてもらえるような工夫も考えてください。」

さらに、店長さんは、こんなことも考えてみるようにと言いました。「お客さん（消費者）は、何を、回転寿司屋にもとめているのでしょうか？自分の経験をふまえて考えてみてください。」…消費者の目線に近いところからの学習をはじめようとする。

③お店での仕事と平行して、研修もおこなわれます。研修での講師の先生の言葉として：「回転寿司屋さんは売り上げを大きくのばしてきています。その理由はさまざまです。今日は、安いお寿司を提供するために、どんな工夫をしているのかをあらためて考えてみよう。」

…利潤を大きくするには。お寿司105円の内訳から、どの費用(材料費、人件費、減価償却費、光熱費、本部経費、お店の利益、消費税)に注目するか。回転寿司屋さんでは、材料費は簡単には削れない。ポイントは人件費。では、人件費をおさえるための工夫は、どんなものがあるのだろうか。(卓上にぎり機、タッチパネル、皿カウンター、自動皿あらい機、)

④研修では、こんな宿題がでました。「ムダをなくすために、どんな工夫をしたらいいですか？」

…ムダという考え方を広げて説明できるようにする。一つは、売れ残ったために、商品を捨てなければならないムダ。もう一つは、お客さんが食べたいと思っても食べられない場合におきるムダ(ロス)。食べたいと思っているネタが流れてこないことや、せっかく来店しても満席だったためにかえってしまうことや、食べたい寿司ネタが品切れになってしまうことなど。さらには、寿司ロボットなどを休ませてしまうロス(ムダ)や職人さんが手持ちぶさたになるロス(ムダ)

(そのための工夫として、鮮度管理システム、バイパス装置、切換装置、特急レーンなど)

⑤お店での実習が終わると、購買部に配属されました。なお、回転寿司屋さんには、次のような部署があります。業務部(お寿司の製造や接客などを行います)、広報宣伝部、品質管理部、環境事業部、商品開発部、購買部、人事部、私は、まず、購買部に配属されました。

「スシ食いねエの歌詞に出てこないネタとは？」格安なネタを提供するために、日本国内だけでなく世界とも取引をしている。サーモンは1980年代には寿司ネタにはなっていなかったが、ノルウエー産のものが輸入されるようになり、今や人気メニューになったことを、番組録画をしたDVDを使いながら説明する。他の寿司ネタもどうなっているかを調べたり、流通面でも、産地直送のルートをつくっていることに気付かせる。

⑥親しい同期の人は、商品開発部に配属されました。ここでは、サイドメニューの開発（この工夫が売上につながる！）や市場調査が重要なことを研修で学びます。また、店舗開発部に配属された人は、新店舗を建てる用地を確保することが仕事となります。ここでは立地条件がとても大切な要素です。クイズ「回転寿司屋さんでは、お店をつくる時に、あるところの近くに建てるのが、とても重要な要素になっています。それは何？」

品質管理部でも、コンベヤーをつくる会社と手を組んで、こんな努力をしています。（衛生面や外国仕様を着眼点にして、ケース入りの皿や磁気で動くレーンの開発）

⑦早いもので入社して2年。そんな私が店長になりました。お店での正社員は（a）名 残り（b）名はパートやアルバイトの人です [aは2 bは48]。働き方には、さまざまな種類があります。どんな種類があるのか、確認しておこう。2年目店長。大丈夫？心配は入りません。こんなサポートシステムが？（キッチンにつけられたビデオカメラが動きを見守り、適切なアドバイスをしてくれる。）

⑧今年で4年目。スーパーバイザーといって、エリアの店長を指導する立場になりました。ところが、こんなことがおきたのです。

<ア>大阪狭山（大野台地区）に昨年から大きな回転寿司屋さんが進出してきました。そのお店は長寿屋。私たちの店と同じく長寿屋も、ターゲットは子ども連れの家族。大野台地区のお客さんを、それぞれ半分ずつ確保できている。

<イ>二つのお寿司屋とも今後価格をどうするかで悩んでいる！お寿司の価格を105円にするか。それとも90円にするか。

<ウ>お互い105円ならば、今まで通り、私たちの店も「長寿屋」も1日それぞれ20万円ずつもうけがある！お互い90円するならば、もうけは、私たちの店も「長寿屋」も減ってしまい、1日それぞれ10万円ずつのもうけになってしまう。

<エ>私たちの店が90円して、「長寿屋」が105円のままだと、私たちの店が一人勝ちして40万円のもうけで、「長寿屋」のもうけは0になってしまう。逆に「長寿屋」が90円にして、私たちの店が105円のままだと、「長寿屋」が一人勝ちして40万円のもうけで、私たちの店のもうけは0になってしまう。

<オ>さて、それぞれの班が、私たちの店、「長寿屋」として、価格を決めてください。相手の動きは、わかりませんよ。「せいよ！」で手元にある札をあげてください。90円 105円 2回目もやってみよう。

ウ 回転寿司屋さんで学んだことを、ハンバーガー屋さんに応用してみよう。

次に、「回転寿司屋さんから考える経済学」で習得・活用した知識を、ちがった文脈で応用していく学習を展開した。子ども達にとって、回転寿司屋さんは家族と行くお店であるが、ハンバーガー屋さんは、友人と行くお店である。事前のアンケートでは、ハンバーガー屋さんに来店する頻度の方が、回転寿司屋さんのそれよりも多い。そのため、お店のサービスや様子などは、よく知っている。まず、ハンバーガー屋さんでは、どんな工夫をしているかを、一人に10枚のポストイットを渡し、思いついたことを一つひとつ記入するように指示をする。すべてのポストイットがでそろったら、グループの中でそれを読みあい、

同じ内容のものを一つにまとめて小見出しをつけるようにする。

【サービスを充実させる】

○チラシにクーポン券をつけている。○おサイフ携帯が使える。○マックでDSができる。○コンセントをテーブルにつけている。○注文してから早く出す。○「スマイル0円」と書かれている。○時間がかかる時は、番号のかいた札を持たせて、あとでもってきてくれる。○並んでいる時に、店員がメニューをもってきてくれたりすることがある。

【お店に関すること（立地条件・レイアウト・店内・トレイ）】

○スーパーの中に店を出している。○カウンターのすぐうしろにキッチンがある。○お客が机の配置を変えてもOKにしている。○固いイスがおかれている。○トレイには紙がひかかれている。○捨てられる食器が使われている。

【調理に関すること】

○ハンバーグにはさむ具材が、あらかじめカットされている。○ハンバーガーの具を流れ作業化している。○ポテトをいっきにあげて、すぐに出せるようにしている。○ポテトなどは、さめないようにガラスのケースにいれておいてある。○注文を受けてからつくるようにしている。

【従業員やお客の動き】

○メニューを聞く人と、お客さんにわたす人にわかれている。○商品を客が運び、テーブルまで持っていき、片付けもさせている。○全員が、イヤホンみたいなものを使ってコミュニケーションをとっている。○レジでは、ヒマな人がいないようにしている。

【商品・メニューに関すること】

○つぎつぎに新商品を発表する。○期間限定メニューを出す。○朝マック・夜マックなど、時間帯に制限のある商品を出す。○味をおいしくしている。○セットメニューをつくっている。○安いメニューを出している。

さらに、今まで学んできたことをもとに、なぜ、そのような工夫をしているのかをグループで考え説明できるようにする。

○時間がかかる時は、番号のかいた札を持たせて、あとでもってきてくれる。
○並んでいる時に、店員がメニューをもってきてくれたりすることがある。
→お客さんを待たさないようにする。待たせるロスをなくす。
○商品を客が運び、テーブルまで持っていき、片付けもさせている。
→人件費を削っている。
○メニューを聞く人と、お客さんにわたす人にわかれている。○全員が、イヤホンみたいなものを使ってコミュニケーションをとっている。○レジでは、ヒマな人がいないようにしている。
→労働の効率化
○スーパーの中にお店をだす。
→買い物客や子ども達をターゲットにした立地条件

また、回転寿司屋さんとのちがいと共通点をまとめる。最後に、このような工夫をしているのは、なぜかを考えてのレポートをまとめる。（評価）

ハンバーガー屋さんの工夫からはじめ、その背後にある企業の行動原理を探究していく学習のまとめとして、授業時間内のレポート作成をおこなった。制限時間は20分。

○近ごろ、外食に行く人の数が減っている、だから、売り上げは簡単には上がらない。このことを理由に、もうけを得るために、売り上げを大きくしようとするだけでなく、ムダな費用をなくそうとする工夫をしているのだと思う。例えば、人件費を減らすために、商品を運ぶことや後始末を客にやらせ、簡単に調理できるものにしてその調理をムダなく、流れ作業にすることなどが、それだ。また、材料費を安くすることにも力をいれている。それに、買おうとしているお客を逃がさないようにする工夫や、ドライブスルーなどで、回転率をあげるたりすることもしている。それでも、売り上げが上がらないとなると、ファミリー層をターゲットに、子ども向けのキャンペーン（マックでDSやハッピーセット）や、昔に売っていた今は売っていない商品を出したりしている。

<注>

- 1) 公益財団法人日本教材文化研究財団『児童・生徒の習得・活用型学力を育成する社会科学習指導方法と評価に関する研究』2010年
- 2) 財団法人経済広報センター『住宅メーカー職場シミュレーション』2010年, pp.4-7

(奥田 修一郎)

3 公民的分野における「活用する力」の評価計画と実践分析

(1) 授業構成の基本原則

峯氏は、「社会科で評価すべきことの最大公約数は、社会の見方・考え方が育ったかである。」¹⁾とする。2節でも述べたように、経済学習では、社会の見方・考え方言い換えれば理論的知識の習得、他の事例への応用をしながら、今ある仕組みや制度を理解し、うまくいっていないのなら、その理由をつかみ、改善された仕組みを提案することにある。思考力は、この事実と理論の間の往復が繰り返されればされるほど深まっていく。具体的には情報を入力し、たくさんの事実を知ることから、問題を発見する(第1段階)。その事実から「どうして?」「なぜ?」について解明できる仮説(理論)を設定したり引き出したりする(第2段階)。次に、新たな情報や視点を用いて、さきの仮説を検証し、修正していく(第3段階)。1～3の段階を踏まえて、複数の仮説(理論)を応用して、事情を総合的に説明できるようにする(第4段階)。しかし、これまで多く行われてきた実際の授業では、1と2段階でとどまっていたり、演繹的方法からのアプローチをしたりすることが多かったのではないか。

(2) 教材研究の方法論から

たくさんの事実から帰納法的に理論を引き出す方法があるが、経済学習では、むしろ、理論的知識(仮説)から具体的事象を見ていく演繹的方法がとられる。企業についての学習では、「企業は利潤を最大にするように行動する」という大前提(仮説)を理解することがもとめられる。また、この大前提には、利潤と利益のちがいについての前提(仮説)をつかんでおくことが大切である。

利益 = 総収入(売上) - 総費用(支払った金額)
利潤 = 総収入(売上) - 総費用(犠牲にしたものすべてで、他の利益を得る機会を失った場合、その失った利益も費用とする[機会費用])
利潤を上げるには、総収入(売上)を増やすこと、かかる総費用をおさえること。

ここからもわかるように、費用という概念を機会費用ととらえる前提がある。次に、利潤をより多くあげるためには、①総収入(売上)をより増やし、②総費用をよりいっそう削ることが必要であることがわかる。前者の売上を増やすためには、より商品が売れることがポイントになる。そのために、たくさんの人に知ってもらい、来てもらい、何度も足を運んでもらう工夫やサービスに目を向けていく。また、費用も、いくつかの視点からみていくことができる。①人件費の面 ②客を待たせる費用の面 ③材料費にかかる費用などである(実際には、光熱費・フランチャイズ費、広告費などもある)。

大前提(上位の理論)から前提(下位の理論)を導き出し、前提にそって具体的な事実を整理し、次のような知識の構造化をはかる。

[大前提 (上位の理論)] [前提 (下位の理論)] [具体的な事実]

※表中 (回) は回転寿司屋での, (マ) はマクドナルドでの工夫

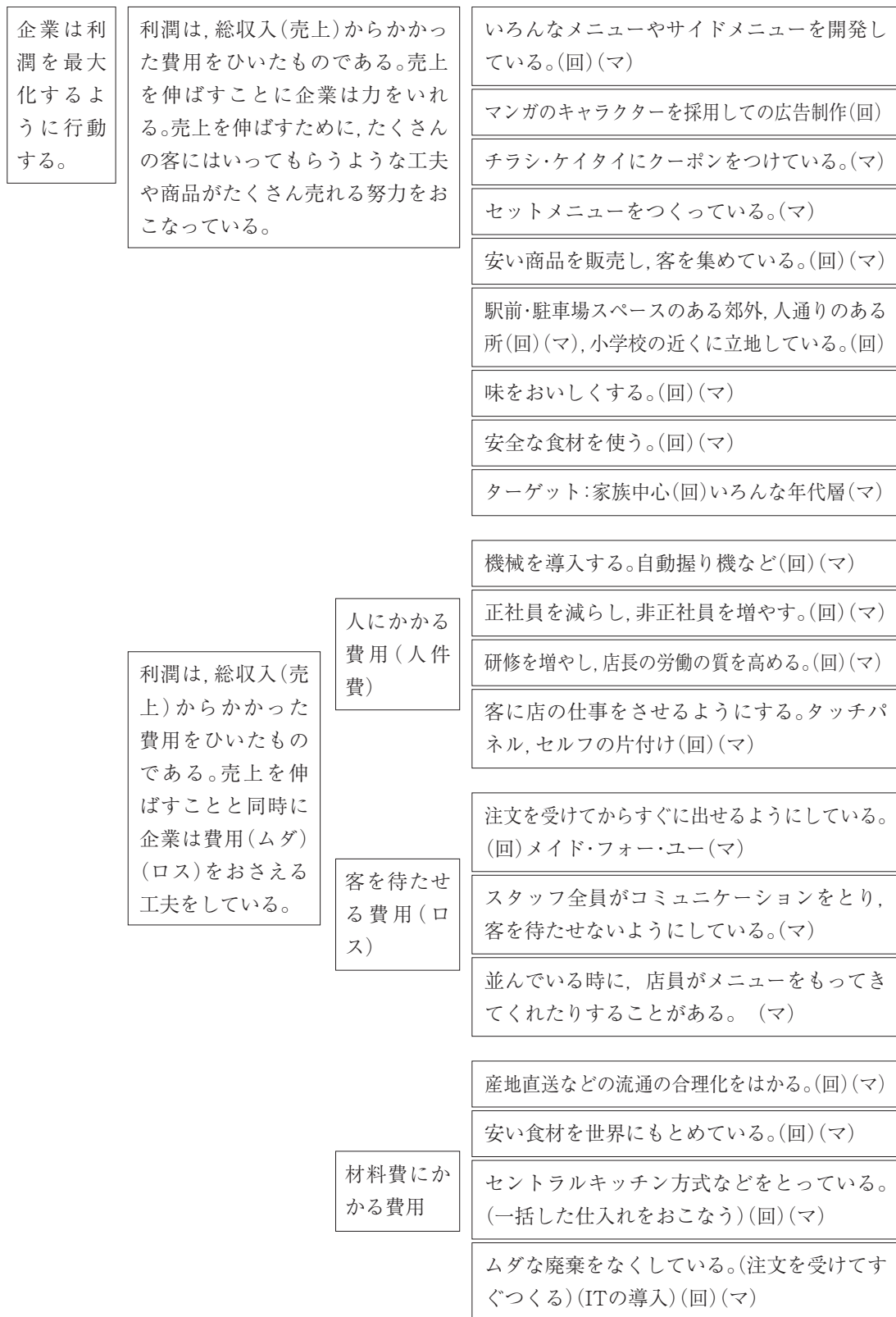


図1 知識の構造図

(3) 授業づくりのために

授業づくりの第一段階は、子ども達が具体的な事実を掴みやすい題材を選ぶことである。つまり、よく目にするもの、話題になっているもの、行ったことがあるところ、普段使っているもの、近所にあるものなどである。また、子ども達にアンケートをとるのも、一つの方法である。その際、どれくらいの頻度で利用しているのか、いつ、どこで、誰と使っているのか、どれだけのお金を支出するのかを尋ねるようにする。さらに、ここでのポイントは、探究していこうとする課題の問いに、自分なりの答えを出すように指導することだ。例えば、「他の外食産業の成長が伸び悩む中、回転寿司屋さんが、最近、右肩上がりの成長をしているのはなぜ？」という問いを設定する。この問いへのアプローチは、社会的背景、消費者側、企業側（経営者）側など、いろんな角度から可能であり、出てきたものを分類していく。大きな問いの次には、企業側（お店）に着目させるため、「回転寿司屋さんは、（成長させるため）どんな工夫をしているのだろうか」という問いを準備し、探究できるようにする。ここでのポイントは、経験してきたことをまずもとにし、具体性のあるところからはじめることである。ただ、経験の中だけでは、気付かないこともあるので、取材をしたり、再調査や聞き取りをしたりするという学習も大切である。次に、その問いをKJ法の要領で、同じような内容のものを一つにまとめたり、小見出しをつけたりする。第二段階では、第一段階でまとめた項目一つひとつに、なぜ、そうなっているのかを考察していく。個人でまず考え、グループ討議をする。討議したことを全体で吟味していく。例として、「お客さんに片付けをしてもらっている。」これは、「従業員の片付ける手間を省くことになっている」→「このことで、人件費を削ることができるのではないか」という風に、より一般化しやすい言葉でまとめるように促す。第三段階では、さらに第二段階の学習の際、探究してきた個々の事柄が、他の企業（マクドナルド）ではどうなっているのかを、共通点と相違点から工夫の背後にある経済的な見方（仮説）を検証できるようにする。第四段階では、第三段階で検証したことや複数の経済的な見方を応用して、その工夫は、企業はそもそもなぜおこなっているのか、それはどんな行動につながっているのかを考察できるようにする。思考したことは、レポート作成をすることで表現できるようにする。この一から四の段階は、知識の構造を、問いの構造におきかえ、より説明ができる概念（理論）を発見できる過程に他ならない。

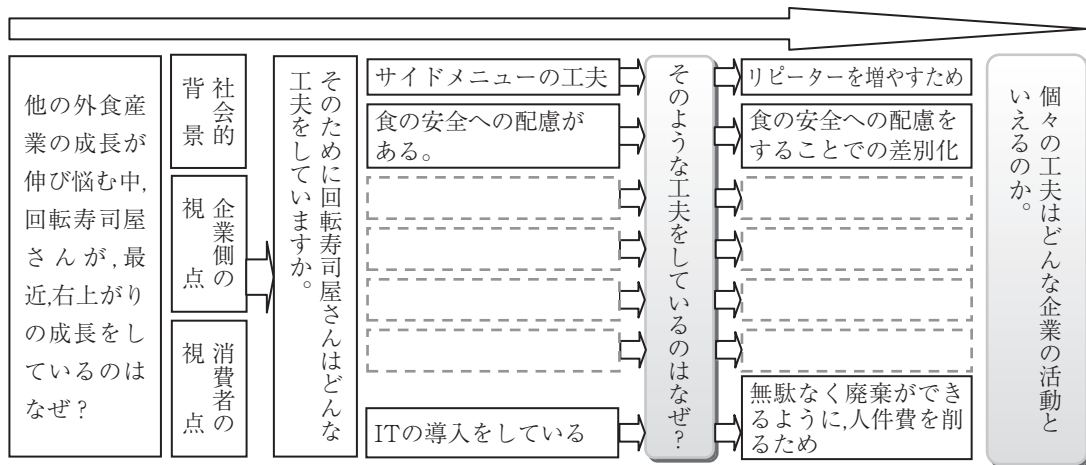


図2 問いと単元展開

(4) 活用する力を育むために

回転寿司屋さんの急成長の秘密を、具体的な工夫に着目し、次にその背後にある企業側の意図さらには企業行動の大前提（理論）を探究・発見する学習へと展開していった。ここで習得・活用したことを、ちがう文脈にあてはめてみて、さきの前提をより深く広げる学習へとつなげていくことが肝要だ。ここでいう文脈は、急成長してきた（最近だけでなくこれまでに成長したケースを用いてもよい）他の外食産業に着目して、お店の工夫を回転寿司屋さんとの共通点と相違点から明らかにし、その工夫の背後にある企業の行動意図や経済理論を探究していく学びである。今回は、マクドナルドに着目した。方法知の活用をはかるためにも、さきの問いの構造化をもとに、なぜ疑問を追求し、仮説を整理し、さらに新たな情報を用いて仮説を検証することにした。具体的な学習では、まず、自分が店に訪れた際に気がついたことを出し合った。次に下記の資料を使って、マクドナルドの工夫・努力を整理し、その背後にある企業の行動意図を総合的に説明していけるようにした。

資料1 「回転寿司屋さんと共通していること、ちがっていることを下の資料を参考にまとめてみよう。（日本マクドナルドHPの沿革より作成）」

2004年12月 オーダーメイド調理システム「メイド・フォー・ユー」をほぼ全店に導入

2005年2月 朝食時間帯を強化。1800店以上で営業開始時間を6:30に設定

2006年1月 「えびフィレオ」が定番メニューとして販売開始

4月 ドライブスルー店舗を中心に24時間営業を強化

2007年1月 期間限定販売の「メガマック」が記録的ヒット

2008年1月 100円マックに楽しいスナック「シャカシャカチキン」新登場

2月 「至福のコーヒータイムを100円マックで」「プレミアムローストコーヒー」を販売

12月 電子マネー Edyを導入

2009年6月 「ニンテンドー DS[®]」を利用したマクドナルドの新サービス「マックでDS」全国で導入開始

2010年12月 スマートフォン用 マクドナルド公式アプリを12月より提供開始

資料2 探究ワークシート②

共通しているところ

ちがっているところ

なぜ、その工夫はされているのか。

ア 評価計画と評価観点

表1 学習過程ごとの評価規準と評価方法

	学習過程	必要な能力	評価規準	評価方法
第一段階	問題の発見	入手した情報等から問題を発見する能力＝問題発見のための活用力	回転寿司屋が右肩上がりの成長をしている理由を、いろんな観点から書くことができる。企業（お店）側がどんな工夫をしているかの情報を集め整理し、同じ内容のものを集めたり、小見出しをつけたりすることができる。	・探究カードの記入 ・取材活動（聞き取り） ・グループでKJ法を使っての活動ができているか。 ・小見出し
第二段階	仮説の設定	知識・技能を用いて問題に関する仮説を設定する能力＝仮説設定のための活用力	その工夫がなぜそうなっているのか経済的な見方から考察できているか。（仮説が設定できているか。）	・探究ワークシート①
第三段階	仮説の検証	新たな情報を用いて仮説を検証する能力＝仮説検証のための活用力	マクドナルドでの工夫の情報を集め、回転寿司屋との共通点・相違点を整理し、その工夫の背後にある仮説（経済的な見方）が検証できているか。	・探究ワークシート②
第四段階	仮説の応用	複数の仮説を応用して事象を総合的に説明する能力＝仮説応用のための活用力	回転寿司屋とマクドナルドでの工夫は、企業として、そもそもなぜおこなっているのかを考察し、説明することができるか。	レポート

イ レポート文の評価

ハンバーガー屋さんの工夫からはじめ、その背後にある企業の行動原理を探究していく学習のまとめとして、授業時間内のレポート作成をおこなった。制限時間は20分。

実際のレポートから：

○マクドナルドでは、人件費を削るために、客が商品を選び、片付けをする。捨てる量を減らすために「つくりおき」をやめる。待ち時間を短縮するために、早くできるものから渡すなど、さまざまな工夫をしています。これらの工夫は、効率よく作業をし、ロスをなくすためだとわかりました。

○近ごろ、外食に行く人の数が減っている、だから、売り上げは簡単には上がらない。このことを理由に、もうけを得るために、売り上げを大きくしようとするだけでなく、ムダな費用をなくそうとする工夫をしているのだと思う。例えば、人件費を減らすために商品を運んだり、後始末を客にやらせたり、簡単に調理できるものにして、その調理をムダなく、流れ作業にすることなどが、それだ。また、材料費を安くすることにも力をいれている。それに、買おうとしているお客を逃がさないようにする工夫や、ドライ

ブスルーなどで、回転率をあげるたりすることもしている。それでも、売り上げが上がらないとなると、ファミリー層をターゲットに、子ども向けのキャンペーン（マックでDSやハッピーセット）や、昔に販売していたが今は売っていない商品を出したりしている。

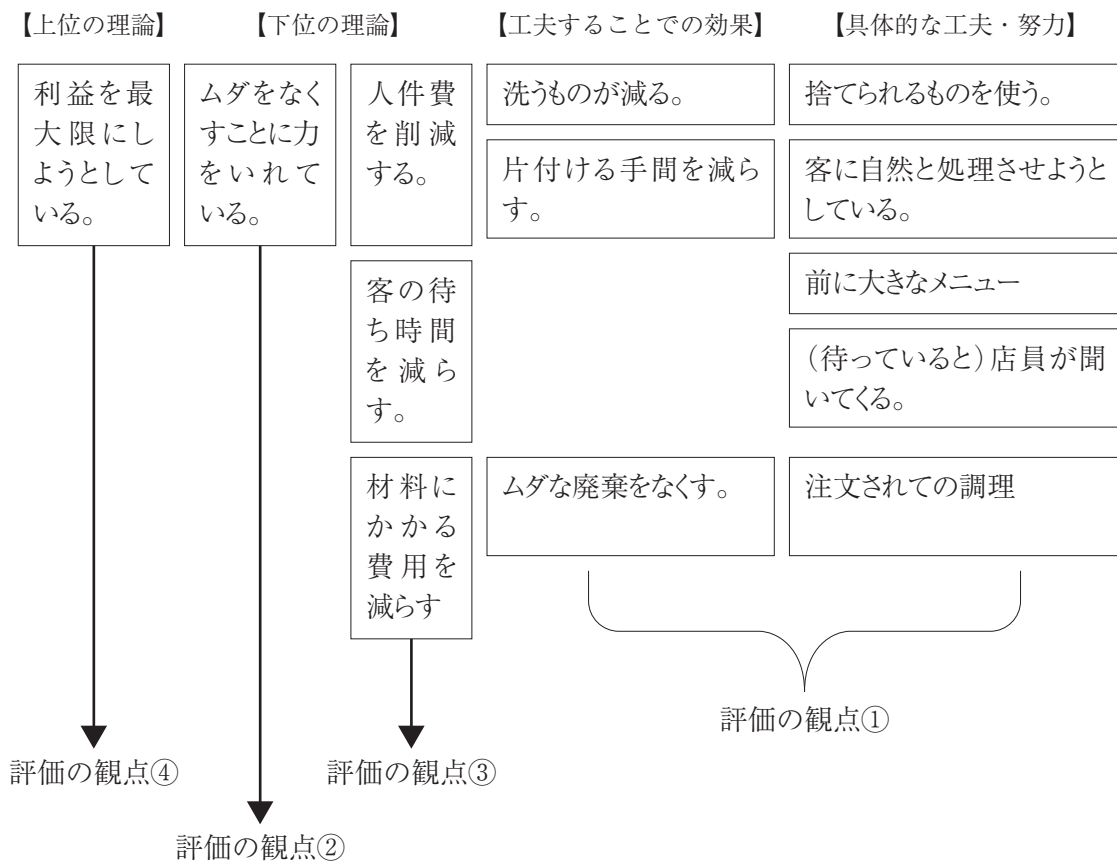
○列に並んでいる間に、メニューを見せて、早く決められるようにしたり、費用はかかったが、機械を導入して、調理の時間を削ったり、イスの工夫をしたり、ドライブスルーを取り入れたり、店の回転率を早くしようとしている。そのことで、より多くの商品を買ってもらえるようになった。持ち運びから捨てるまでを、客にやってもらったり、容器を捨てられるようにしたり、ヒマな人がいなくなるようにしたり、パートやアルバイトなどを多く雇ったりして、人件費を削っている。このようにむだなところにお金をかけなくてもよくし、利益を最大限に上げられるようにしている。

ウ 評価規準

レベル	評価の観点
5：素晴らしい	①回転寿司屋で学んだことをもとにマクドナルドの工夫と努力を具体的に書き、その工夫がなぜされているのかの説明がある。 ②工夫・努力を経済概念からの確に捉えようとしている。（利潤をあげるために売上を伸ばすことだけでなく、同時に費用をおさえるようにしていることが述べられている。） ③費用には、a人のかかる費用 b客を待たせる費用 c材料費にかかる費用があるが、それらにも適切な例を出し、関連づけながらの言及ができています。 ④さらに、企業の行動原理を総合的に説明することができている。 ⑤全体的にわかりやすい構成で書かれている。
4：よい	①～⑤のうち、③（または②）に関してやや不十分。
3 ふつう	①～③は、ほぼ書けているが、①～③を踏まえて企業の行動原理の説明が十分にできていない。
2 もう一步	①は具体的に書けているが、②～④の言及がない。
1 努力が必要	レポートが未完成。

レポート評価例

○マクドナルドでは、回転ずしと同じように、ロスをなくすことに力をいれています。まずは、ごみ！捨てられるものを使っているのので、洗うものが減ります。それに、食器などもそうですが、自然と客が処理しています。そうすることによって、店員がわざわざひとりひとりの席にいったり、片づける手間が省けて、店員はちがう仕事ができ、効率よく働かせていると思います。効率よく店員がたくさん働くことによって、店員の数は、そんなにいらなくなるので、人件費削減にもなります。注文を決めるのも、前に大きくメニューがあったり、店員が聞いてくれたりするのので、待ち時間は減るし、スムーズにメニューを作ることができる。そのことで、また、無駄なく店員を働かせることができていると思います。また、注文されて調理するやり方で、ムダな廃棄もなくなるので、材料費も削減しています。このような工夫があるから、マクドナルドは、すごく人気はあるし、ムダをなくすことで、商品自体も手ごろな価格で提供できるようになっているんだと思いました。その工夫・努力をすることで、利益を最大限にしようとしています。



※評価の観点①～④を踏まえているが、このレポートでは、売上を伸ばす工夫についての言及がない。

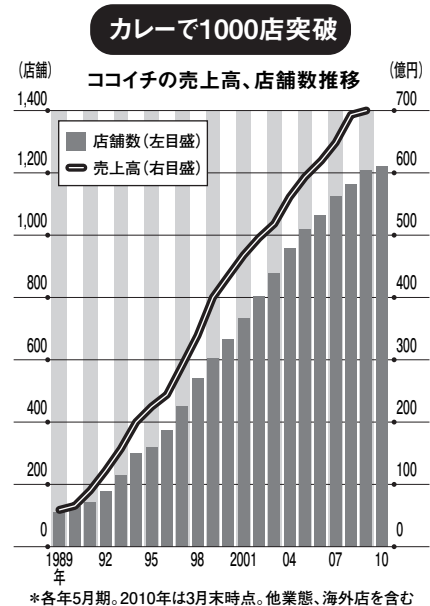
図3 「上記のレポート分析をする」

エ 評価問題例として

右のグラフはカレー屋さんのココイチの売上高と店舗数の推移を表しています。ココイチは近年、右肩上がりの成長をみせています。その秘密のいくつかを次の資料をもとに、答えなさい。

- 期間限定メニュー7種類、朝カレーセットメニュー4種類、肉類のカレー14種類、魚介類のカレー5種類、野菜のカレー3種類、特定原材料を含まない（小麦、卵、乳、そば、落花生、えび、カニ）カレー5種類、ハーフカレー14種類、お子様カレー7種類、
- トッピング（ゆでたまご70円、ツナ100円、オムエッグ150円、イカ200円、ハンバーグ250円、エビフライ300円など）
- 辛さ（甘口、普通）は基本料金、1辛あがるごとに20円アップ（12段階）

グラフ1²⁾



（『週刊ダイヤモンド2010年5月22日号』p.68より）

- ①消費者は昨今、食に安全・安心をもとめる傾向が強くなっています。ココイチでは、その消費者の声にそうためのメニューをそろえています。それはどのメニューですか。なぜ、それを選んだのか理由も含めて書きなさい。

解答例：特定原材料を含まないカレー

理由 特定原材料とは、食物アレルギーをおこしやすいとされる食品のことであるが、あらかじめメニューに入れることで、消費者に安心して注文できるようにしているから。

- ②カレー店の客単価は676円（東京都区部）ですが、このカレー屋さんでは、客単価は830円ということです。カレー本体の値段は、600円前後なのに、なぜ、ココイチでは客単価があがるのでしょうか。簡潔に述べなさい。

解答例：何種類ものトッピングや12段階辛さで自分好みのカレーをつくれるように、客が選択できるようになっているため、単価が上がっていく。

（4）実践分析

授業づくりの第一段階として、子どもたちが具体的な事実を掴みやすい題材の選択がポイントであった。授業の前にとったアンケートから、回転寿司屋さんが子どもたちにとって身近であることがわかった。この段階で、探究課題である「他の外食産業の成長が伸び悩む中、回転寿司屋さんが、最近、右肩上がりの成長をしているのはなぜ？」を設定した（問題の発見）。その問いに対する答えは整理すると、社会的背景、消費者をその気にさせる工夫、お店の工夫に分けることができた。そこから、さらに「回転寿司屋さんは、（成長させるため）どんな工夫をしているのだろうか」という問いに焦点化し、来店した際に気付いたことを手始めに、再取材や再調査をすることで、探究できるようにした。それをKJ

法で分類した上で、「なぜ、その工夫をおこなっているのか」の問い（仮説の設定）をおこなった。ここまでを回転寿司屋での学習で確認し、次に「その工夫」がマクドナルドではどうなっているのかを調べていった（仮説の検証）。最後に、回転寿司屋とマクドナルドで得られたいくつかの見方・考え方（仮説を応用）し、企業の経済的行動を総合的に説明する学習を行い、レポートによる評価活動を行った。

ア 仮説検証

仮説① 活用する概念的枠組みを明確にすることは、見方・考え方の深化を促すとともに、評価の際の規準にもなり、学習者にフィードバックすることでさらに社会認識を広げることができるであろう。

活用する概念的枠組みだけでなく、知識の構造化・問いの構造化を明らかにしたことで、それぞれの思考・判断の積み上げや躰きが、個々の子どもにそって見ることできた。また今回、費用の概念を深めることが大きなポイントであったが、ムダ（ロス）をなくすためのお店の工夫から、機会費用の概念を習得することができた。

仮説② これらの活用する概念的枠組み（知識）を使って、異なる事象を捉えられるように学習計画を立て実施することで、より見方・考え方が深まるであろう。

今回、回転寿司屋で習得した概念的枠組みを、マクドナルドに応用しようとしたが、マクドナルドのいろんな工夫とその背後にある企業のねらいに気付ける子どもが多かった。（例えば、なぜトレイには「なぜ広告の紙がひかれているのか？」→広告だけでなくトレイをきれいに保つ、トレイをきれいにする手間をお客にさせている。）また、2つの外食産業と比較することで、共通点が多いことから、企業の経済的行動原理を言語化できる子どもが約1/3いた。

仮説③ 身近な例やワークショップ教材を用いることで、探究学習が進められるであろう。

子どもたちに馴染みの深いものを題材にし、実際、聞き取りや取材をしたことで、興味をもち、問いを自覚させなら、授業をすすめることができた。また、回転寿司屋さんに就職してというロールプレイのストーリー性のある教材を教師側が創作したことで、子どもたちにとって学習の見通しが立てやすいものになった。

イ 次の学習につなげるために

「生産の仕組みのあらましや社会における企業の役割」における「活用力」を育む学習教材として、子どもにとって身近な企業が有効である。CMでお馴染みの企業もよいが、地域の代表的な企業を取り扱う方が、取材や撮影などの子どもたちの調べ学習ともリンクでき、より探究学習が進められる。

この授業では、ムダのない（効率的）ということ、コストという観点から深めていくようにした。この学びを財源の問題でも活用していくことがもとめられる。ここでは、コスト削減だけでなく、資源（財）をムダなく、どう配分していくかという効率率のもう一つの側面からの捉えが必要である。さらに、そのため、どんな配分が公平なのかを考えて

いける学習へといけるようにしたい。

<注>

- 1) 峯明秀「参考資料の生かし方—小学校社会—」,『指導と評価』, 2011年9月号
- 2) 『週間ダイヤモンド』2010年5月22日, p.68

<参考資料>

- ・石川秀樹『単位が取れるミクロ経済学』講談社サイエンティフィク, 2009年

(奥田 修一郎)